# 新修 外國史綱

（實業學校用）

明治書院編輯部編

株式會社
東京・明治書院・神田

43038
教科書文庫
4
230
44-1938
20000
74177

資料室

教科書文庫
4
230
44-1938
2000074177

4C
230
昭13

昭和十三年三月十二日
文部省檢定濟
實業學校歷史科用

# 新修
# 外國史綱
〔實業學校用〕

明治書院編輯部編

株式會社
東京・明治書院・神田

# 緒言

一、本書は昭和十二年三月二十七日公布された文部省の新教授要目により、各種實業學校に於ける外國史教科書として編纂したもので、内容を東洋史・西洋史の二篇に分つた。

一、東洋の文化は、古來我が國に影響する所が極めて多いから、特にその文化史方面に於ては、西洋史よりもやゝ詳細に説いた。但し世界の大勢より見て、西洋文化の發達は今日及び將來に大なる影響を我が國に與へるものであつて、世界文化の幹流をなすものであるから、その史的發展の趨勢を説くに當り、この點に特別の考慮を加へ、世界の現勢の由つて來る所を知らしめることに努めた。

一、地名・人名の稱呼は、主として史學會の調査に係る「外國地名人名稱呼一覽」により、本文中、その初出の地名・人名等の左傍に、參考として原語の綴を添記した。

一、史實の年代を明かにすることは、歴史を學ぶ者の緊要事である。而もこれを本文中に記入する時は、彼此の事件を對比するに不便であると考へたから、本書はこれを頭註に明記することとして、前後の關係を參照するに便ならしめた。



広島大学 教 74177 図書
広島大学図書
2000074177

一、地圖・年表も亦學習上缺くべからざるものであるから、地圖は本文の處々に略圖として多數挿入することとし、年表はこれを卷末に添付し、東洋・西洋を對比して一目に世界の變遷を概觀せしめることとした。

一、挿畫も亦本文の記事を補說するに足り、兼ねて興味を喚起せしめるものであるから、出處の正確なものを、成るべく多く採錄した。殊に注目に値すべき特種の挿畫は、これを別刷として挿入した。

昭和十三年一月





# 目次

總說……一

## 東洋史篇

第一章　東洋史の意義……三
第二章　上代の支那……四
第三章　上代の印度……九
第四章　秦漢……一一
第五章　漢の文化と佛敎……一五
第六章　三國晉南北朝……一七
第七章　隋唐……二〇
第八章　唐の文化……二四
第九章　五代宋……二七

第十章　元……三〇
第十一章　宋・元の文化……三三
第十二章　明　清……三六
第十三章　明・清の文化……四〇
第十四章　西洋諸國の亞細亞經略（一）……四三
第十五章　西洋諸國の亞細亞經略（二）……四六
第十六章　清の衰亡……五〇
第十七章　中華民國　滿洲帝國……五二
第十八章　現代の東洋……五八

## 西洋史篇

### 第一篇　上代東方諸國とギリシヤ・ローマ

第一章　西洋史の意義……六一
第二章　古代東方諸國……六二
第三章　ギリシヤ……六七





第四章　ギリシヤの文化……七一
第五章　ローマ……七五
第六章　ローマの文化とキリスト教……八一

### 第二篇　民族の大移動と中世のヨーロッパ

第一章　ゲルマニヤ民族の大移動……八四
第二章　サラセンの勃興……八六
第三章　ローマ法皇と神聖ローマ皇帝……八九
第四章　十字軍……九二
第五章　封建制度と都市の勃興……九六
第六章　中央集權の風潮……九八
第七章　蒙古人及びトルコ人の侵入……一〇三

### 第三篇　新機運の世界と近代諸國家の發達

第一章　文藝復興と諸種の發明……一〇五
第二章　地理上の發見……一〇七

第三章　宗教改革……一一〇
第四章　宗教戰亂……一一三
第五章　イングランドの革命と大ブリテン王國の成立……一一七
第六章　フランスの强盛とルイ十四世……一二〇
第七章　ロシヤの勃興とペートル大帝……一二三
第八章　プロシヤの勃興とフレデリック大王……一二五
第九章　印度及びアメリカに於けるイギリス・フランスの植民地の衝突……一二八
第十章　アメリカ合衆國の獨立……一三〇
第十一章　近古の西洋文化……一三二

第四篇　フランス革命と自由主義及び國民主義の發展

第一章　フランス革命……一三七
第二章　ナポレオンの出現……一四〇





第三章　神聖同盟と自由獨立運動……一四八
第四章　イギリスの議會政治の發達……一五一
第五章　フランス再度の革命……一五三
第六章　イタリヤの統一……一五七
第七章　アメリカ合衆國の南北戰役……一六〇
第八章　ドイツの統一……一六二
第九章　ロシヤ・トルコ戰役……一六六
第十章　近世の西洋文化……一六八

第五篇　列强の世界政策と各國均勢の保持

第一章　列强のアフリカ經略……一七三
第二章　列强のアジヤ及び大洋洲經略……一七五
第三章　大戰前のヨーロッパの情勢……一七七

第六篇　世界大戰とその後の世界情勢

第一章　世界大戰……一八一

第二章　大戰後の世界情勢……一八七
第三章　世界の現狀……一九三
第四章　西洋史より見たる我が國の使命と國民の覺悟……一九七





# 新修外國史綱

## 總說

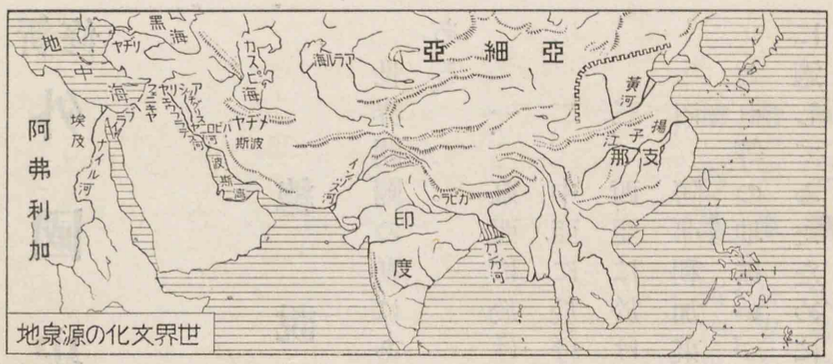
世界文化の發生地

世界開闢の初にあたつて、文化の曙光を放つた地域が凡そ四箇所ある。

一、東亞に於ける支那の黃河・揚子江の流域。
二、中亞に於ける印度の印度河（インダス）Indus・恒河（ガンガ）Ganges の流域。
三、西亞に於けるチグリス河 Tigris・エウフラテス河 Euphrates の流域。
四、阿弗利加 Africa 東北隅のナイル河 Nile の流域。

これ等の地は、いづれも氣候が暖かで、土地がよく肥え、人類の生存に適してゐたために、自ら文化の發源地となつたのである。そのうち

東洋史と西洋史



世界文化の源泉地

黃河・揚子江の流域に發した文化は支那文化の源泉となり、印度河・恒河の流域に發した文化は印度文化の源泉となり、チグリス河・エウフラテス河及びナイル河の流域に發した文化は西洋文化の源泉となつた。

支那文化と印度文化との發達の歷史は東洋史に屬し、西洋文化の發達の歷史は西洋史に屬するを以て、本書はこれを東洋史篇と西洋史篇とに分ち、東洋史篇に於ては、古より我が國と密接の關係にあつた支那を中心として說き、更に西洋史篇に於ては、歐米諸國の興廢の跡を檢し、東西兩文化の融合して今日の世界文化をもたらした由來を明かにすることとした。





東洋文化

# 東洋史篇

## 第一章　東洋史の意義

**東洋史の範圍**　東洋史は支那の歷史を主流として、これに他の東洋諸國一帶の歷史を綜合したものである。

**東洋文化**　支那の文化を創造した民族は漢民族(支那民族)で、太古に於て支那の黃河流域に文化を開いたが、更にこれを揚子江流域に及ぼした。支那文化の創造された頃、印度の印度河流域にアーリヤ民族(Aryans)が獨自の文化を創造し、更にこれを恒河流域に及ぼした。印度文化が後に支那文化と接觸するに至つて、東洋文化の發展は更に擴大した。卽ち東洋文化の第一主流は支那民族の文化であつて、第二主流は印度アーリヤ民族の文化であつた。この兩文化は東洋史の根幹をなすものである。

東洋民族とその活動地域

**民族と地域**　東洋史中に活躍した民族は、支那民族を主として、朝鮮民族・滿洲民族・蒙古民族・土耳古（トルコ）民族・西藏（チベット）民族・印度アーリヤ民族等で、その地域は支那本部を中心として、朝鮮・滿洲・蒙古・新疆・西藏・前後兩印度・中央亞細亞に及んでゐる。近世に至り西洋人が進出し來るに及んで、東洋はこれより東西兩洋民族の活動の天地となつた。

東洋史と國史との關係

**國史との關係**　我が國の文化は遠く神代より起り、獨特の發達をなしたが、夙く支那文化を採り、更に印度文化をも入れ、最近には西洋文化を移し入れて、益〻その發展を遂げた。吾等は東洋史を學ぶに當り、常に國史を顧みて、彼我國情の異なる所以を知り、その文化の變遷について正しい理解を得ることに努めねばならぬ。

## 第二章　上代の支那

漢族

**古代支那**　支那は今を距ること凡そ五千年前に、漢族によつて開かれた國である。漢族は始め西北方より黃河の下流に移住し、漸次先



黃帝

住の土人を南方に驅逐して、遂に黃帝（クワウテイ）といふ英主の時に至り、揚子江までその領土を擴げた。當時文化も頗る進み、農牧・養蠶の業も起り、醫藥の方、交易の途も開け、文字・舟車等の發明もあつたといはれる。その後、堯・舜（ゲウシユン）の二名君が相次いで出で、よく天下を治めて、後世まで聖帝と仰がれた。

堯・舜

王位世襲の始

その頃黃河が氾濫（ハンラン）して大洪水を起し、人民を苦しめたが、舜の臣の禹（ウ）がこれを治めて偉功を建てたので、舜の禪（ユヅリ）を受けて王位に登り、その子孫が世々王位を世襲することとなり、夏（カ）王朝として凡そ四百年續いた。

夏

殷

その後、湯（タウ）王が夏を滅して殷（イン）王朝を興し、殷は凡そ六百年續いたが、武王が出で、これを滅して周（シウ）王朝を建て、周は凡そ八百年天下を治めた。

周

支那の國體

易姓革命

禪讓放伐

**支那の國體**　支那では、堯・舜より夏・殷・周と、王朝が代る〳〵興つたが、これは德あるものが天命によつて天子となり、德なきものはその位を奪はれるといふ思想から行はれたもので、これを易姓革命（エキセイカクメイ）といふ。革命とは天命が革（アラタマ）る義である。その平和革命を禪讓（ゼンジヤウ）といひ、武力革命を放伐（ハウバツ）といふ。萬世一系の

天皇の統治し給ふ我が國體とは、全くその根本を異にするものである。

**周の代**　周の始には、成王（武王の子）・周公（武王の弟）等の名君・賢相が出て治績を擧げ、制度文物も大に進歩した。一族・功臣に領地を分つて諸侯とする封建政治も、この時に定まつた。その後凡そ三百年を經て王威は漸く衰へ、諸侯が相爭うてゐる間に、外民族が頻に侵入したので、有力な諸侯が起つてこれを退け、天下に號令した。これを覇者（シヤ）といふ。覇者として數人の諸侯が代るゞ現はれたが、その間の凡そ三百年を春秋（シユンジウ）時代といふ。春秋以後、王威は全く振はず、小諸侯は次第に亡びて、大諸侯の對立となり、世は戰亂の巷と化した。その間の凡そ二百年を戰國時代といふ。當時の大諸侯は、秦・楚・燕（エン）・齊（セイ）・韓（カン）・魏（ギ）・趙（テウ）の七國で、そのうち秦が最も優勢となり、遂に天下を一統した。

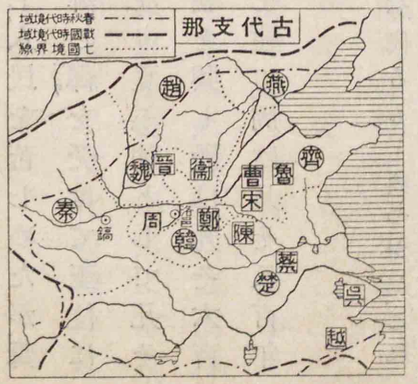
封建政治

覇者
齊の桓公・晉の文公・秦の穆公・宋の襄公・楚の莊王を五覇といふ。

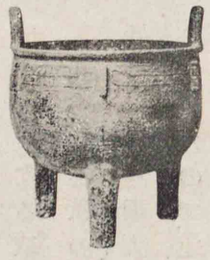
春秋時代

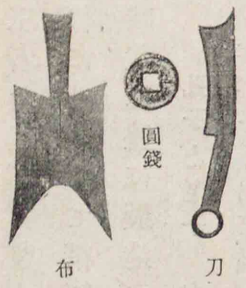
戰國時代

**周の文化**　支那の文化は周に至つて著しく發達し、諸制度も備はり、學校も設けられて、學術・技藝は興隆し、後世の模範となつた。天子は鎬京（カウケイ）（後に洛邑に遷る。）を都として中央を直轄し、諸侯をその周圍に配して封建制を行ひ、井田（セイデン）の法によつて土地を人民に耕さしめ、その收穫の一部を租として納めしめた。社會は天子・諸侯・大夫・士・庶民の五階級に分れ、家族を基とし、血統を重んじ、祖先を祀り、孝を百行の本とし、長幼の序、男女の別を嚴にした。



鏡


鼎



上代の貨幣

**上代の産業**　漢民族が黄河の下流に移住してから、農業が開け、夏・殷兩朝の代に著しく發達し、周代には農は國の本とまで考へられるに至つた。商業は、上代には物々交換が行はれたが、後種々な形の貨幣が造られ、周代の末、春秋・戰國の頃には、その流通が盛になつて、大商業が行はれ、

孔子の廟（大成殿）

釋迦の降魔成道の圖



王者を凌ぐ富豪も現はれた。工業も殷代に既に銅器の製造があり、周代には極めて精巧な銅製の器具が數多く造られ、鐵製の器具も春秋時代に盛に製造された。

**孔子と老子**　春秋・戰國の世には、列國が競つて人材を招いたので、學者・論客が多く出て、種々の學說を唱へた。中にも孔子と老子とが最も著はれて、後世まで大なる感化を與へた。

孔子（前四七九歿）

老子

漢代に孔子が禮を老子に問うたといふ傳說を石に刻したもの。

老子と孔子

孔子は春秋の末に出て、後の儒教の基を開いた。その說く所は修身齊家に始つて治國平天下に及んだ。孔子はこれを以て諸侯を遊說（イウゼイ）したが、用ひられなかつたので、遂にその鄉國たる魯（ロ）に歸り、春秋といふ書を著はして、七十三歲で歿した。かくその教は當時に行はれなかつたが、後世支那の政教の基礎となるに至つた。

老子は孔子と時を同じうして出で、周に仕へたが、生歿が詳かでない。その說く所は無爲自然を重んじて、仁義禮樂等の形式を排するにあつた。老子の教は後の道教の基となつた。

孔子廟（大成殿）

圖は山東省曲阜縣に在る聖廟内大成殿の前面を斜に見た所である。大成殿は聖廟内の杏壇の北に位し、こゝに孔子の像を奉安し、かねて諸聖哲の像を祀つてある。殿宇の高さ約二十三米、間口約四十米、奥行約十六米、左右にある兩廡は各〻約九十米で、その東西の兩廡には先賢先儒が祀られてある。建築の大、結構の美、他に及ぶものがない。

釋迦の降魔成道の圖

南印度のアジャンター窟院の内壁にある壁畫中の一つで、釋迦が菩提樹下に坐して靜思してゐる時、貪欲、愛著、疑惑等の諸煩惱が頻りに起つて、その悟道を妨げたことを比喩化してたものである。

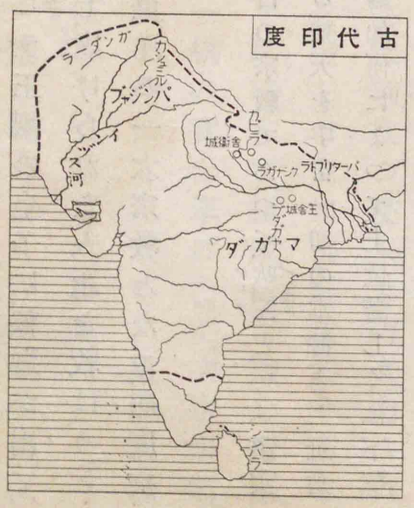
孟子
莊子

アーリヤ族印度を開く

**孟子と莊子**　戰國の世に出て、孔子の教を説いたものに孟子があり、又、老子の説を述べたものに莊子（サウジ）があつた。いづれも孔子・老子に次ぐ碩學として後世まで尊ばれた。

## 第三章　上代の印度

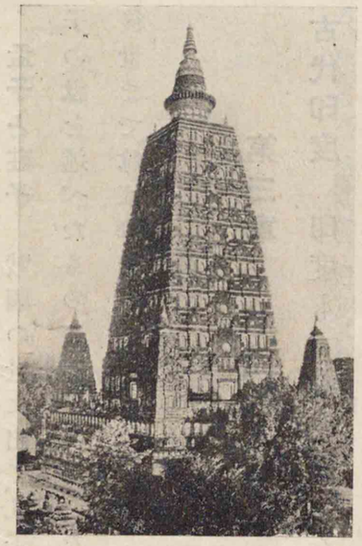
**古代印度**　印度も支那と同じく最古の文明國の一で、今を距ること凡そ四千年の昔に於て、中央亞細亞より南下したアーリヤ族によつて開かれた。アーリヤ族は始め印度河の上流地方に住み、次第に東方に進んで恒河の流域に及び、幾多の王國を建てたが、その間に僧族・士族・平民・奴隷の四階級が出來て、その差別が嚴守された。僧族は婆羅門（バラモン）Brahman と稱して、社會の最上位を占め、教權を濫用して他の階級



釋迦
佛教
婆羅門教と佛教
釋迦（前四七七頃歿）

を壓迫した。この時ヒマラヤ山南のカピラ王國の皇子に、釋迦が出て、印度古來の宗教たる婆羅門教を改革し、虐げられた人生を救はうとして、新に佛教を開いた。佛教はこの後、東洋の一大宗教となり、印度文明の要素となつた。

**婆羅門教と佛教**　婆羅門教は印度最古の宗教であつて、吠陀（Veda）といふ讃美歌を經典として、僧族の立てたものである。梵天を宇宙一切の本源とし、社會の階級制を勵行し、凡ての人は生前の行爲如何によつて、上位若しくは下位の階級に轉生すると說いた。佛教は婆羅門教の階級制を打破し、人は皆平等で、何人も正道を行へば成佛することを得ると說き、忍辱慈悲の行を勸めた。

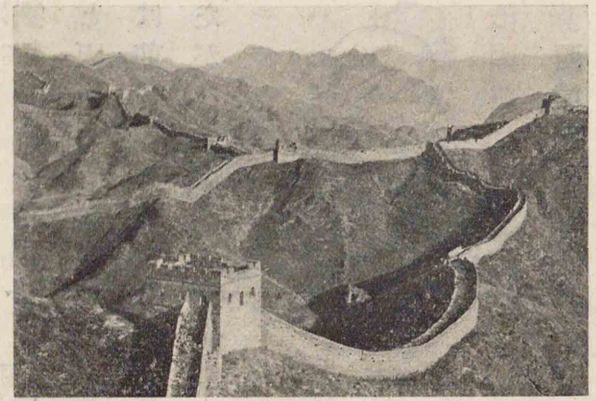

ブダガヤの大塔

阿育王が釋迦成道の地に塔を建てたのが荒廢してゐたのを、十九世紀にビルマ王が再建したもの。

**釋迦**　釋迦は孔子と同じ頃、中印度の迦比羅城主の子として生れ、實名を悉達多（Siddhartha）といつた。釋迦はその族名である。二十九歲の時出家し、苦行すること六年にして正覺を得、始めて佛教を說いた。その後四十五年間到る處に於て教化に力を盡し、八十歲で歿した。

始皇帝の天下統一（前二二一）
秦の滅亡（前二〇六）
漢の興起（前二〇二―後二二〇）

# 第四章　秦　漢


萬里の長城

**秦の始皇帝**　戰國時代の六國を滅して天下を統一した秦王政は、王號を皇帝と改め、自ら始皇帝と稱した。帝は、外は萬里の長城を築いて北狄匈奴の侵入を防ぎ、內は古來の封建制を廢して新に郡縣政治を布き、書を焚き儒を坑にして、極度に言論を抑壓し、よく天下一統の實を擧げたが、次帝が暗愚で、權臣が政を擅にしたために、亂民が蜂起して、秦は僅に十五年で亡びた。

**漢の興隆**　秦を滅したものは漢の高祖

高祖（前一九五歿）
長安の奠都（前二〇二）
武帝（前八七歿）

劉邦であつた。劉邦は蕭何・張良・韓信の三傑を用ひ、秦を滅した後、項羽と天下を爭ひ、遂にこれを仆して帝位に即き、長安（周の舊都）に都した。高祖は前代の弊政に鑑み、封建・郡縣の二制を併用して國家の基礎を固めたが、その後數代を經て帝權はいよ〳〵伸び、武帝の時に至つて隆盛を極め、内は一旦滅びた秦以來の文教を復興し、外は秦の滅後北方の脅威となつた匈奴等の諸夷を擊ち斥けて、大に國威を輝かした。支那が始めて西域（漢以西の諸國の總稱。）と交通し、朝鮮・南越をその領地としたのも、この時であつた。

漢の高祖

漢と西域との交通
張騫

**西域との交通**　武帝は匈奴に當るために、西方の大月氏と結ばうとして張騫を西域に遣はした。張騫はその目的を達しないで、空しく歸國したが、これより西域との交通が開け、西方の文化は次第に漢に流入した。

古代の朝鮮

**古代朝鮮**　武帝は又朝鮮を征服してその領土とした。朝鮮はもと

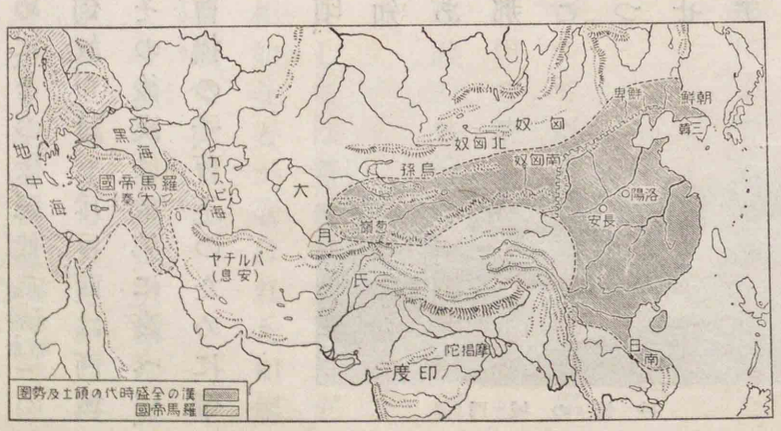




王莽の帝位簒奪
漢の再興（二五）
光武帝（五七歿）

殷の王族箕子が國を建てたといはれる。後に燕の人衛滿がこれを簒つたが、その孫に至つて武帝に滅されたのである。當時朝鮮半島の南部には三韓（馬韓・弁韓・辰韓）があつて、次第に漢と通ずるやうになり、漢の文化は漸次東方に傳はつて、やがて我が國にも及んだ。

**漢の中絶と再興**　武帝以後、宣帝（武帝の孫）の代に、一時國勢は榮えたが、その後次第に衰へて、遂に外戚の王莽のために國を簒はれた。然るに王莽は幾くもなくして殺され、漢の王族劉秀が衆に推されて帝位に即き、漢を再興して洛陽（周の洛邑）に都した。これを光武帝といふ。これより後を後漢といふ。光武帝は專ら内政の改善に努め、學問を盛にし、節



漢の滅亡（二二〇）

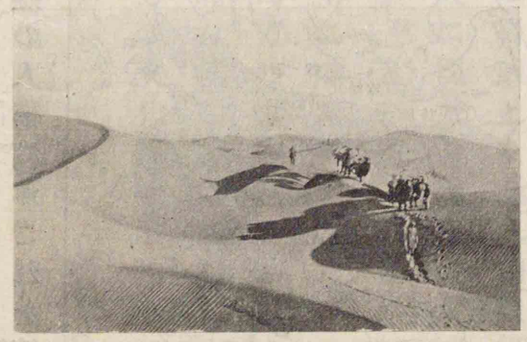
漢と羅馬との交通

班超

アントニヌスの使者漢に到る（一六六）

義を勵まして、頗る治績を擧げた。これがために、その後三代（明帝・章帝・和帝）の間は大に榮えて、漢の國威は再び振ひ、北は匈奴を討ち斥け、西は西域諸國を從へて、これを畏服せしめた。然るに、その後、漢は次第に衰へて、政治は亂れ、群雄が四方に起つて、遂に魏の曹操の子、曹丕のために帝位を簒はれて、滅亡するに至つた。

**羅馬との交通**　漢が西域に威を振つた頃、西方に大秦（羅馬國）といふ大國のあることが知られ、後漢の明帝の時より西域經略の任にあつた班超は、使をその國に派し、羅馬も亦支那の名產である絹を珍重して、漢と交通せんことを望んだが、安息國（ペルシヤ）がその中間にあつて、常にこれを妨げたので、久しく目的を達せられなかつた。然るに、漢末に至つて、羅馬帝アントニヌス（安敦）は、海路より使を遣はし、今の安



西域の流砂



漢の文化

董仲舒
鄭玄
司馬相如
司馬遷
班固
文字の發達
蔡倫

南を經て、漸く漢の洛陽に到らしめた。これより東西二大帝國の交通は次第に開け、その後、羅馬の商人は屢〻南支那に來つて貿易に從つた。

## 第五章　漢の文化と佛教

**漢の文化**　秦の始皇帝が焚書の暴政を行つて以來、一時衰へた學問も、漢に至り、武帝が儒學を奬勵して國民思想の統一を圖つたために、再び大に興つた。これより儒教は支那の政教の基準となり、我が國にも傳はつて、大なる感化を後世に及ぼした。

古文　篆書　隷書　楷書　行書　草書

文字の變遷

漢代の名高い學者としては董仲舒・鄭玄などがあり、文學には司馬相如などが著はれた。司馬遷・班固（班超の兄）も亦史學を以て聞えた。

文字は、周代の古文より篆書・隷書と次第に發達して、漢代には隷書が多く用ひられたが、この時代（和帝の時）に蔡倫が麻屑より紙を製造すること

美術・工藝

を發明したので、筆寫が至便となり、楷書・行書・草書の諸體も漸次行はれるやうになつた。

美術・工藝も亦著しく進歩して、漆器・磁器・銅器・織物等にも、精巧なものが多く造り出された。近年朝鮮の樂浪を始め、諸方より發見された銅鏡・漆器及びそれに畫かれた見事な繪畫などを見ても、當時の工藝の發達が窺ひ知られる。

阿育王

カニシカ王

佛教漢に傳來す（六七）

**佛教の東傳**　釋迦の滅後凡そ二百年を經て、印度に阿育（アショカ）王が出で、Asoka 全印度を統一し、篤く佛教を信じてその弘通（グツウ）に努めたが、それより又凡そ三百年を經て、中央亞細亞に興つた大月氏國にカニシカ王が出て、Kanishka 印度の西北部を取り、深く佛教に歸依（キエ）してその傳播に努めた。

この頃、漢と西域との交通が開け、彼我の往來があつたので、佛教も大月氏國より漢に傳はつた（後漢の明帝の時。）。これより西域の佛教徒が相次いで支那に來り、その布教に努めたために、佛教は益〻流行するに至つた。

**佛教の傳來**　佛教は、漢に傳來した後、凡そ三百餘年にして朝鮮に傳はり、

道教

三國

晉の統一（二六五）

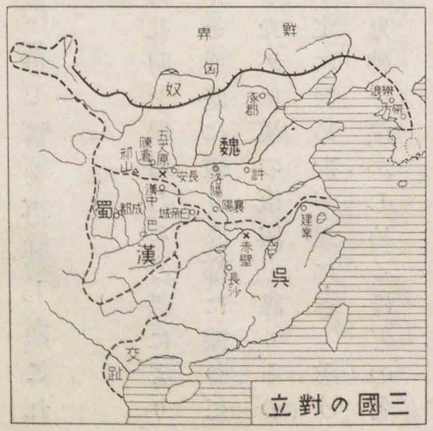
更に百六十餘年を經て我が國にも傳へられた。

**道教**　佛教の流行につれ、後漢の末に、民間の信仰に老・莊の說を加味した道教と稱する宗教が起つて、次第に佛教と勢力を競ふやうになり、後には儒教・佛教と對立して支那の三大教と稱せられた。

## 第六章　三國　晉　南北朝

### 三國の鼎立と晉の統一

漢末に支那は大に亂れて、一時、魏・吳・蜀漢の三國に分裂したが、蜀漢が先づ滅び、次いで魏の權臣司馬炎（エン）が魏・吳を滅し、天下を一統して國を晉（シン）と稱した。これが晉の武帝である。然るに、武帝は徒に太平を夢みて武備を怠つたために、蠻族がこれに乘じて侵入し、晉を滅して揚子江以北の北支那の大半を占領するに至つた。この時、晉の遺族司馬



三國の對立

東晉の創始（三一七）

南北朝（四三九―五八九）

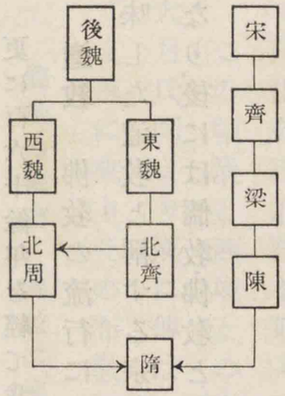
十六國　漢・成・後趙・前涼・前燕・前秦・後燕・後秦・西秦・後涼・南燕・西涼・南涼・北涼・大夏・北燕

淝水の戰（三八三）

睿は、江南の南支那の地に據つて建康（今の南京）に都し、晉を再興した。これより以後を東晉といふ。

**諸葛孔明**　漢末の亂に、漢の王族劉備は諸葛孔明を擧用し、その謀により江南（後の吳）の孫權と力を合せて江北（後の魏）の曹操を赤壁に破り、成都に據つて蜀漢の國を建て、天下を三分した。孔明は劉備のために漢の復興を謀り、その死後もよく後主を扶け、智略を盡して天下の平定に努めたが、遂に志を遂げないで歿した。その後主に上つた出師表は、忠烈鬼神を泣かしめるほどの名文と稱せられた。

**南北朝**　晉が江南に遷つた後、江北には匈奴・羯（共にトルコ族）・鮮卑（蒙古族）・氐・羌（共にチベット族）の五蠻族が交ゝ國を建てて、凡そ百三十年間に十六國が興亡した。その中、氐族の建てた前秦の王符堅が、一時殆ど江北を一統したが、東晉の謝安と淝水に戰つて敗れた以後は、再び混亂に陷り、遂に鮮卑の建






後魏の建國（四二四）

宋の建國（四二〇）

陶淵明

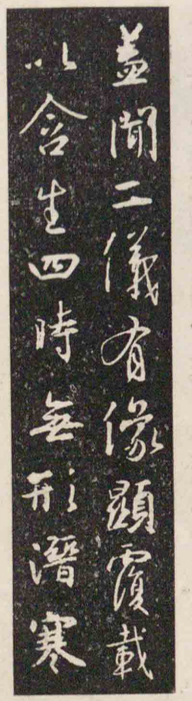
謝靈運

王羲之

顧愷之

てた後魏によつて統一された。その頃江南に於ては、東晉が既に亡びて、宋が興り、漢族の國と蠻族の國とは南北に對立することとなつた。その後、隋が南北を併せて天下を一統するまでの凡そ百五十年間を南北朝といふ。

**晉・南北朝時代の文化**　南方と北方とは自ら風尚を異にし、南方は華美を好み、北方は質實を重んじ、北方には儒學が榮え、南方には老・莊の學が行はれた。從つて文學・美術の如きも南方に發達して、晉の陶淵明、宋の謝靈運は文學を以て名高く、書聖と尊ばれた王羲之、畫聖と仰がれた顧愷之は、共に東晉の代に著はれた。佛教もこの頃南北を通じて大に流行し、經典の飜譯、佛寺の建立等が盛に行はれ、梁の武帝の如きは佛教の信奉者として殊に名高く、その都の建康には佛寺が甍を並べて互に盛榮を競つたといふ。




王羲之の書

**石窟の石佛**　佛教の

隋の統一（五八九）
煬帝（六一六歿）

隆盛につれて、佛像彫刻も大に流行し、雲岡（山西）及び龍門（河南）の石窟は後魏時代に造られ、その中に奉安された石佛には、我が奈良の大佛にも劣らぬ巨像もあつた。これ等は印度のアジャンタ（Ajanta）の石窟寺院に摸したもので、實に我が奈良時代の藝術の源流をなすものである。

## 第七章　隋　唐

**隋の南北統一**　隋は南北を併せて天下を一統したが、煬帝（文帝の子）が盛に土木を起して、宮殿を造り、運河を開き、遊幸を事として豪奢を極め、且つ屢〻外征を企てて國帑を濫費し、人民の困苦を顧みなかつたために、遂に叛亂が四方に起り、隋は僅に三十年に充たないで唐に滅された。

雲岡の石佛

**大運河**　大運河はもと運漕が目的で、既に文帝の時にその一部が開かれたが、煬帝はこれを繼續して、たゞに運漕の用のみでなく、自らの遊幸の便に供するために、江南より河北に至る大規模の運河を開いた。秦の長城と、隋の運河とは、支那の二大工事と稱せられてゐる。

唐の建國（六一八）
太宗（六四九歿）
高宗（六八三歿）

**我が國の遣使**　我が國の推古天皇が、小野妹子を遣はして始めて支那と國交を開かれたのは、煬帝の代であつた。これより唐代に及んで我が國の遣使は屢〻行はれ、留學生・留學僧の彼の地に渡るものも多く、彼の文明は盛に我が國に輸入されるに至つた。

**唐の強大**　唐の建國は實に太宗の力であつた。太宗は高祖の次子で、文德武功共に世に優れ、よく房玄齡・杜如晦・李靖・李勣などの賢臣・名將を用ひて善政を施し、天下を太平ならしめた。唐の制度・律令の定められたのもこの時である。太宗は又外に向つても大に國威を輝かし、その子高宗の代に亙つて、唐は北夷の突厥及び朝鮮・安南をも征

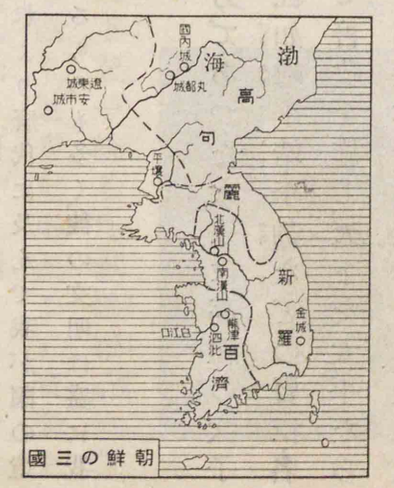
唐の太宗

服し、その勢の及ぶところ、東は朝鮮半島より西は、中亞に至り、北は蒙古より南は印度に達した。

朝鮮の三國

**朝鮮の三國と渤海**　隋・唐時代の始め、朝鮮は高句麗・百濟・新羅の三國に分れて、高句麗（滿洲）は今の南滿洲より北朝鮮を領し、屢、隋の煬帝の軍を破り、新羅（元の辰韓の地）は朝鮮の東南部を領し、任那（元の弁韓の地）を滅して勢強く、百濟（元の馬韓の地）は朝鮮の西南部を領し、日本に賴りて新羅に抗し、互に對立してゐた。唐の太宗の頃、百濟が高句麗と結んで新羅に當つたので、新羅は救を唐に求めた。太宗は兵を出して高句麗を伐つたが、その功がなく、高宗に至つて遂に百濟を滅し、次いで高句麗を降した。百濟の亡んだ時、我が天智天皇は援兵を出し給うたが、利がなかつた。かくて新羅は威を半島に振ひ、次第に唐の勢力をも驅逐して、その地を併するに至つた。その頃朝鮮の北方、南滿洲の地に渤海國が起り、唐に通じてその文化を入れ、一時國勢が榮えたが、唐末に至り、渤海も

百濟の滅亡（六六三）
高句麗の滅亡（六六八）
渤海の建國（七一三）








新羅も共に國運が衰へて、群雄が並び起つた中に、王建（ワウケン）といふものが五代の始に開城に都して高麗を建て、新羅を併せて半島を統一した。

高麗の建國（九一八）
朝鮮半島の統一（九三六）

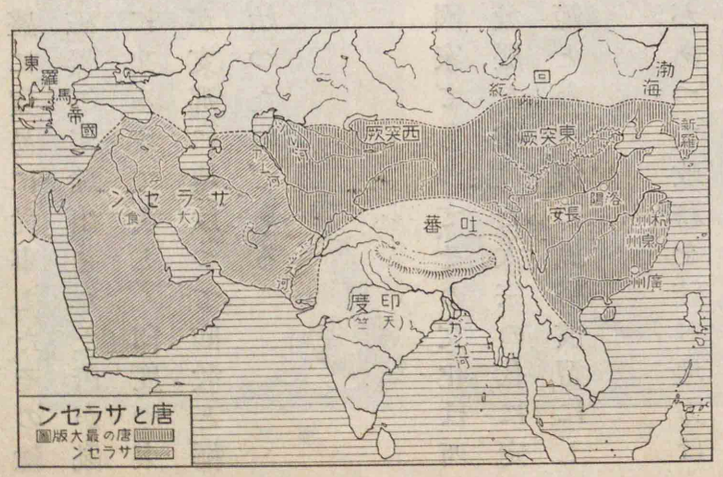
**唐の衰亡**　高宗以後、唐の國勢は次第に傾き、玄（ゲン）宗の世に安祿山（アンロクザン）の大亂があつて、國礎も殆ど危かつた。その後武將の跋扈（バッコ）が甚しく、恣に土地を横領して朝命に從はず、加ふるに、内は宦官の專横に惱み、國威は全く地に墮ちて、賊亂が諸方に起つた。時に一武將朱全忠（シュゼンチュウ）は宦官を誅滅し、勢に乘じて帝位を簒ひ、開封（カイホウ）に都した。これが後梁の太祖である。

安祿山の亂

唐の滅亡（九〇七）

**大食との交通**　唐の盛であつた頃、その西方に雄視した大食人（タージンサラセン）は、直接に唐と交通するに至り、支那の南海地方に

唐と大食との交通



來て、廣州(廣東)・泉州(福建)・杭州(浙江)の諸港に於て盛に貿易に從事した。その輸入品は犀角・象牙・香料等で、唐よりは絹・茶・磁器等が輸出された。唐が亂れた後も、なほ大食人は、葡萄牙(ポルトガル Portugal)人が東洋に來るまで、久しく印度や東亞に於ける貿易を支配した。イスラム(Islam)教が支那に傳はつて回教と稱せられたのは、これ等の大食人の來往に始つたのである。

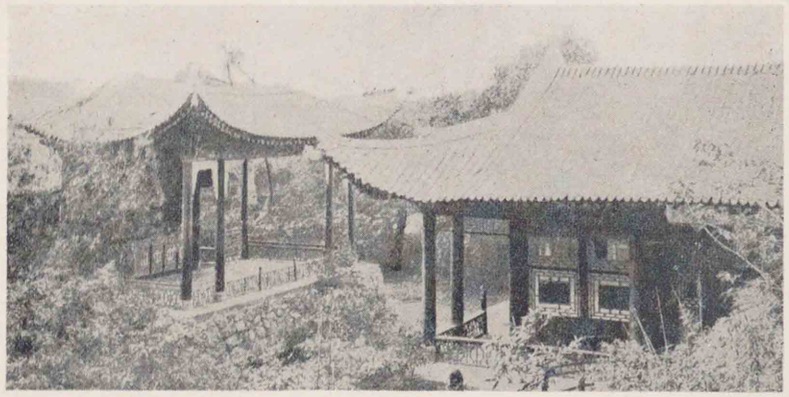
唐の文化

## 第八章　唐の文化

**唐の文化**　唐は漢族の建てた最大の國家であつて、その文化は西域・印度等の文化をも採り入れて、空前の發展を遂げた。太宗の代に定められた諸制度は、我が國の大寶律令の範となり、唐の風俗・慣習にして我に移し摸されたものが少くない。

諸制度

**制度**　中央に三省(尚書・中書・門下)・六部(吏・戶・禮・兵・刑・工)があつて政務を統べ、地方はこれを十道に分ち、後に十五道とし、道の下に州・縣を設けて施政に當らしめ、新附の領土には別に都護府を置いてこれを治めしめた。又、土



華清宮の故趾

歐陽詢筆

顏眞卿筆

唐代の石佛

吳道玄筆

華清宮の故趾

唐の玄宗の離宮の遺跡で、陝西省驪山の北麓に在る。この地は古來溫泉を以て著名な所で、秦の始皇帝は初めてこゝに離宮を營み、閣道を造つて西の方咸陽に通じた。唐の大宗も亦こゝに離宮を營んで輪奐の美を盡し、溫泉宮と名づけたが、後に華淸宮と改稱された。玄宗は楊貴妃を伴つて屢〻こゝに行幸した。今なほ貴妃湯と名づくる浴槽がある。

歐陽詢筆

大宗が書の愛好者であつたために、初唐の書道は甚だ盛であつたが、中でも歐陽詢は當時に於ける代表的大家として名高く、後世に於ても、その書風を慕ふものが少くない。

顏眞卿筆

顏眞卿は中唐の忠臣として知られてゐるが、又詩文を能くし、特に書に巧みであつた。王羲之以後の名書家として知られ、我が國の書道に及ぼした影響も頗る大きい。

吳道玄筆

道玄は名を道子といひ、初め書を學んだが、後に畫に轉じて、遂に支那百代の畫聖となつた。畫は人物、草木、鬼神その他いづれも得意であつたが、特に道釋の畫に妙を得てゐた。たゞ眞蹟の今に遺存するものは極めて少い。

唐代の石佛

雲岡、龍門等の石窟の佛像彫刻は今日に於てもなほその規模の宏壯、技術の優秀なのに驚かされるが、その中でもこの盧舍那佛は、唐の高宗の作つたもので、支那の石像彫像中隨一とも稱さるべきものである。

學術・文藝
孔穎達
李白
杜甫
白樂天(白居易)
韓退之(韓愈)
柳宗元
歐陽詢
褚遂良
顏眞卿
吳道玄
王維
李思訓

地はすべて官有とし、民の戸籍を定めて均田の法を布き、年齢・男女の別によつて人毎に均一の田地を授け、稅法としては、その收穫の中より一定の穀物を納めしめ、これを租といひ、又土地の產物を納めしめ、これを調といひ、別に國家のために勞役に服せしめて、これを庸といつた。その他、兵制・學制・刑制等に至るまで、よく整うてゐた。

**稅法の改廢**　租・調・庸の稅法は漸次廢れて、安祿山の亂後は全く滅び、その後は、人民の貧富、土地の肥瘠によつて課稅する兩稅の法に變つた。

**學藝**　儒學は南北によつてその說を異にしたので、太宗は孔穎達等に命じて五經正義を作らしめ、經義を一定して、官吏の考試も專らこれに據らしめた。これより儒學は愈〻盛行し、殊に詩文の發達が著しく、李白・杜甫・白樂天・韓退之・柳宗元等の大家が輩出して、名聲を轟かした。又、書には歐陽詢・褚遂良・顏眞卿などが出で、畫には吳道玄・王維・李思訓などが現はれて、各〻その天才を發揮した。

**宗教**　佛教は益〻隆盛を極め、名僧も多く輩出し、玄奘・義淨の如きは

宗教
玄奘（六六四歿）
義淨（七二三歿）

遠く印度に遊學して經典を携へ歸り、その飜譯に努めて佛典を完成した。支那佛教の諸宗派（三論・法相・律・華嚴・天台・眞言・禪・淨土）もこの間に完成された。道教も亦廣く流行し、殊に道教の教主と仰ぐ老子が唐と同姓であつたために、唐歷代の天子の尊崇する所となり、一時は佛教を凌ぐ勢を示して、諸宗教を壓迫した。この頃また景教・回教・祆教・麻尼教等の、西方より傳はつた諸宗派も行はれてゐた。

工藝・產業

**工藝と產業**　工藝も大に進歩し、後世に誇るべき染織・刺繡・陶磁器などが作り出されて、著しい產業の發達を見るに至つた。殊に佛教の隆盛につれて、佛像彫刻の如きは妙技を極め、我が天平時代の美術に大なる影響を與へた。又、隋代には五銖錢が鑄られ、唐代には開元通寶などの錢貨が造られて、商業の發達を促し、憲宗の頃には、京師の商人の間に、始めて飛錢（ヒセン）といふ一種の小切手・爲替手形の如きものも、貨幣に代用されて行はれた。これがために、商業上の信用取引が益〻擴大された。

飛錢

五代

十國
前蜀・後蜀・楚・荊南・吳・南唐・吳越・閩・南漢・北漢

宋の建國（九六〇）
宋の統一（九七九）

契丹の建國（九一六）
渤海國の滅亡（九二六）
契丹國號を遼と稱す（九三七）
西夏の建國（一〇三八）

# 第九章　五代　宋

**宋の統一**　唐が滅びた後、後梁・後唐・後晉・後漢・後周の五朝が興亡した。これを五代といふ。五代の諸朝は、その勢力の及ぶところ僅に黃河を挾む中原の地に限られ、西南北の三方には、群雄が割據して十國に及び、五十餘年紛亂を極めた。その後、後周の節度使趙匡胤（テウキヤウイン）は後周を簒つて宋（ソウ）を建て、汴京（ベンケイ）（開封）に都した。これが宋の太祖である。その弟太宗の時に至つて、よく一統の大業を成就した。宋は國運三百年を保つて、漢・唐に次ぐ燦然たる文化を發揚したが、常に北方蠻族の壓迫に苦しめられて、國威は振はなかつた。

**遼・西夏の興起**　宋が起るに先立ち、內蒙古より起つた契丹（キツタン）（蒙古族）が、東隣の渤海國を滅して支那の北邊に據り、國號を立てて遼（レウ）と稱し、東亞の强國となつたが、宋の太宗の頃より頻に宋を寇したので、宋はその防衛に苦しんだ。その頃又、西方に西夏と稱する國が起つて屢〻宋に

神宗（一〇八五歿）
王安石（一〇八六歿）
王安石の新法

司馬光（一〇八六歿）
歐陽修（一〇七二歿）

王安石

入寇した。この時に當つて、宋の神宗は國勢を回復せんと欲し、王安石を用ひて富國强兵の策を講ぜしめ、種々の新法を施行した。

**王安石の新法**　新法には青苗・均輸・市易・募役・保甲・保馬等の諸法があつた。(一)青苗法は、春の植付時に政府より錢を貸し、秋の收穫時に利を附して返納せしめるもの。(二)均輸法は、一地方に多く產する物を政府に納めしめ、これを乏しき地方に移送して利益を收めるもの。(三)市易法は、市價の下落した時に物資を政府に買ひ上げ、騰貴した時に賣り拂つて、利益を收めるもの。(四)募役法は、賦役を免ずる代りに錢を政府に納めしめて、無職の貧民を安い賃錢で傭ひ入れるもの。(五)保甲法は、農閑の時に人民に武藝を習はしめて、有事の日の徵募に備へるもの。(六)保馬法は、官馬を人民に貸し下げて、平時は農耕に役せしめ、事ある時にこれを徵發するもの。

然るに、新法は民情に副はなかつたために、その實績が擧らず、遼・西夏に對する外征も遂に失敗に終つた。當時の名士、司馬光・歐陽修等は





金の建國（一一一五）
遼の滅亡（一一二五）

宋の南渡（一一二七）
臨安の奠都（一一三八）

宋・金の和議（一一四一）
金の滅亡（一二三四）
宋の滅亡（一二七九）

盛に新法に反對したが、これより朝臣の間に新法・舊法の二派が生じて、互に政權爭奪に熱中し、宋の國勢は愈〻衰へた。

**金の興亡と宋の南渡**　宋が遼・西夏に惱まされてゐた時、滿洲より女眞（滿洲族）が起つて、國を金と號した。金は遼の衰微に乘じてこれを滅し、進んで宋に迫つた。宋はこれに敵しかねて、遂に國都は陷り、皇帝欽宗は、父徽宗と共に擒となつた。こゝに於て、欽宗の弟高宗は帝位に卽き、金軍を避けて江南に移り、都を臨安（杭州）に奠めた。この高宗の代より以後を南宋といふ。宋は南渡の後、忠勇無双の岳飛等が出で、屢〻金軍を破り、中原の回復を謀つたが、時の宰相秦檜は、主戰論者を斥けて遂に金と和を講じ、金に歲幣を納め、兩國の國境を定めて臣禮を執るに至つた。この後、宋と金とは或は戰ひ或は和し、共に國勢を弱め、次第に衰微して、遂に新

興の蒙古のために滅された。

**文天祥**　宋の滅びた時、勤王の兵を起した文天祥は、捕虜となつて遂に殺された。その作るところの正氣の歌は、後世我が國の志士の間にも愛誦されて、少からぬ感化を與へた。

文天祥（一二八二歿）

## 第十章　元

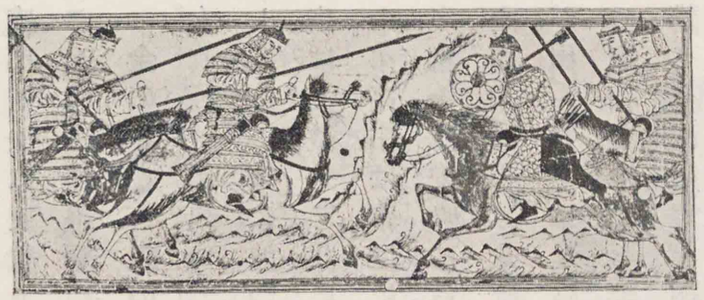
### 蒙古人の世界侵略

今の外蒙古の北部より起つた蒙古族は、もと金に屬してゐたが、その酋長に鐵木眞が出で、蒙古を一統して大汗となり、成吉思汗と號するに及んで、俄に強大となつた。これが蒙古の太祖である。成吉思汗は先づ西夏を降し、金を擊ち、進んで中亞を攻略して花剌子模國を滅し、印度を脅かし、別軍をして露西亞の南部までも遠征せしめて東に歸り、やがて西夏

蒙古の建國（一二〇六）

成吉思汗（一二二七歿）

西夏の滅亡（一二二七）



蒙古の兵士



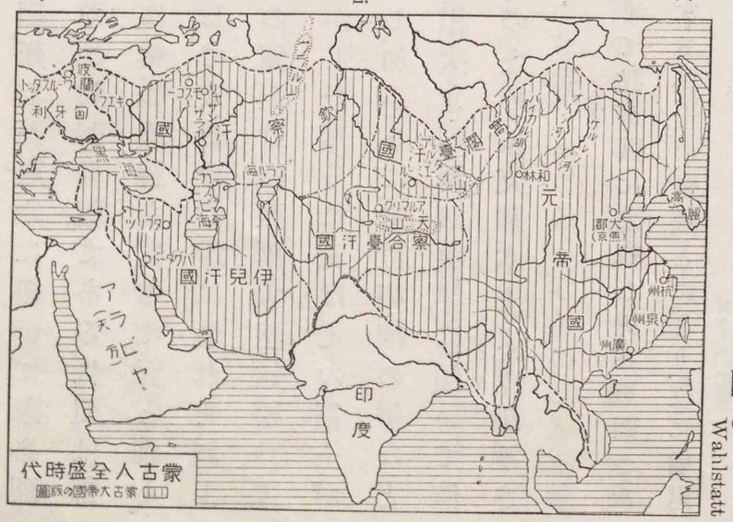


を滅し、更に金を侵さうとして途中に病死した。その子太宗は父の志を繼いで金を滅し、更に姪拔都をして歐洲に遠征せしめ、中歐のワールスタットに波蘭及び獨逸武士の聯合軍を破り、更に墺太利にまで兵を進めて歐洲諸國を震駭せしめた。偶太宗の訃に接したので、諸將は東歸したが、拔都は南露西亞に留つて欽察汗國を建てた。その後、憲宗の代に至り、弟の忽必烈と旭烈兀とをして又外征に當らしめたが、旭烈兀は進んでサラセン國のバグダードを陷れて、西南亞細亞に伊兒汗國を建て、忽必烈は大理・吐蕃を從へ、安南を降して、更に宋を攻めた。この時、憲宗は親ら來つてこれを援けたが、

金の滅亡（一二三四）

ワールスタットの戰（一二四一）

バグダードを陷る（一二五八）


ロシヤ
ヴォルガ
ウラル
カスピ海
黑海
ペルシヤ
ツバイ
ハルビン
ウラジオストク
ペキン
ゴビ
ウルガ
カラコルム
ヒマラヤ
ヒンドスタン
ガンジス
ベンガル
ボンベイ
ヒンドスタン
印度
アラビヤ
ペルシヤ
ツバイ
ハルビン
ペキン
ウルガ
カラコルム
ヒマラヤ
ヒンドスタン
ガンジス
ベンガル
ボンベイ

憲宗の病死（一二五九）
元の國號の始（一二七一）
宋の滅亡（一二七九）
元の滅亡（一三六八）

元の世祖（忽必烈）

途中に於て病死した。憲宗に繼いで忽必烈が位に卽いた。これが世祖である。世祖は都を燕京（今の北平）に奠め、國號を建てて元と稱し、再び兵を發して宋を攻め、遂にこれを滅した。かくてその領土は歐亞兩大陸に跨つて空前の大帝國を成し、武威を四方に輝かした。然るに、元はその領土が餘りに廣大に過ぎて、統治に困難を來し、加ふるに、帝位相續の爭などがあつて、遂に分裂するに至り、內亂が相次ぎ、國運が次第に傾いて、僅に九十餘年にして、漢族より興つた明のために支那本土より驅逐された。

**元寇**　元は世祖の時、高麗を歸服せしめて我が國に來寇し、併呑を圖つたが、鎌倉執權北條時宗の勇斷と我が忠烈なる將士の奮鬪とにより、遂に擊退されて、その野望を果し得なかつた。

**東西の交通**　蒙古人の歐亞掩有は大に東西の交通を容易ならしめ、彼我の貿易も盛に行はれて、南支那の泉州・杭州は一時繁盛の港となり、西人の支那に來るものも頗る多かつたが、中にもマルコ・ポーロ（Marco Polo）は最も名を擧げた。

マルコ・ポーロ（一三二三歿）

**マルコ・ポーロ**　マルコ・ポーロは伊太利（イタリヤ）のヴェニス（Venice）の商人で、十七歳の時、父と共に支那に來り、元の世祖に信任されて在留すること十七年に及んだ。歸國の後、有名な東洋見聞錄を著はしたが、その中に我が國をジパング（Zipangu）と呼び、黃金・珠玉を多く產することを述べて、大に西人の東漸に刺戟を與へた。

宋の文化

周敦頤（一〇七三）

## 第十一章　宋・元の文化

朱熹

**宋の文化**　宋は常に外敵に壓迫されて國勢は振はなかつたが、學術の發達には著しいものがあつて、漢・唐の學者が訓詁を主としたのに反し、究理に重きを置く風が行はれた。この學風は周敦頤（シウトヰ）によつて創めら

程顥
程頤
朱熹（一二〇〇歿）
朱子學
歐陽修
蘇東坡（蘇軾）
陸放翁（陸游）
米芾
牧溪
李龍眠
馬遠
宋の産業・貿易

れ、程顥・程頤兄弟がこれを承け、朱熹に至つて大成された。これを程朱の學、又は朱子學といふ。詩文も亦大に發達し、文には歐陽修・蘇東坡等があり、詩には、陸放翁の如き名家が出た。

美術・工藝も著しく進歩し、書には蘇東坡・米芾等の名手が著はれ、畫には牧溪・李龍眠・馬遠等の大家が輩出した。活版も、西洋よりは四百年も早く、既にこの時代に創められて、印刷術の發達を促し、書籍の刊行も容易に行はれるに至つた。

李龍眠の畫

**宋の産業・貿易**　宋代に於ては、磁器の製法が大に發達し、景德鎭（西江）の名は世界に聞えた。又、外國貿易は唐代より引き續いて大食人との間に行はれ、廣州・泉州には大食の商人が雲集した。これと同時に、支那



宋の宗教
元の文化

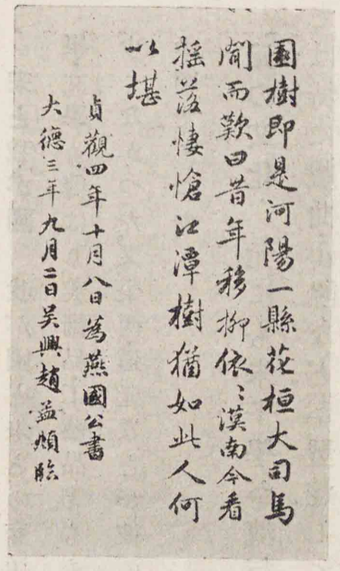
の商人も南洋より印度方面にまで進出するに至つた。商業上の通貨としては、古來殆ど錢貨に限られてゐたが、唐には飛錢が工夫され、宋に至つて始めて楮紙を以て交子と稱する紙幣が造られて、その流通を見るに至つた。金・元にも紙幣が盛に用ひられ、これを交鈔といつた。

**宋の宗教**　唐末に一時衰へた佛教は、宋に至つて又興隆し、殊に禪宗が盛行して、當時の學者にもこれを研究するものが多く、諸般の文化の上にも大なる影響を與へた。道教も亦上下に尊信されて、大に行はれた。

**宋と我が國**　我が國と宋との交通は主に僧侶や商人によつて行はれ、儒學・文學も傳はり、美術品・工藝品等ももたらされて、我が文化に影響する所が少くなかつた。又、榮西・道元などが彼の地に渡つて禪宗を傳へたのも、南宋の中頃であつた。

**元の文化**　元にも朱子學が流行し、詩文も盛であつたが、文學に於ては、特に戲曲・小說などが發達して、名作を出すに至つた。美術も亦盛

趙子昂
錢舜舉
王若水
元の宗教


園樹即是河陽一縣花桓大司馬
聞而歎曰昔年移柳依依漢南今看
搖落悽愴江潭樹猶如此人何
以堪
貞觀四年十月八日爲燕國公書
大德三年九月二日吳興趙孟頫跋

趙子昂の書

出た。

**元の宗教**　元には佛教の一派である喇嘛(ラマ)教が行はれ、喇嘛の學者パスパ(Paspa)の如きは、世祖に用ひられて帝師と仰がれ、歷代の天子が喇嘛教を信奉してこれを保護したために、喇嘛教は自ら元の國教の如くなつた。基督教も亦夙(ハヤ)く傳はつて、廣く行はれた。

で、書には趙子昂(ナウス)、畫には錢舜(センシュン)舉(キヨワウ)・王若水(ジヤクスイ)等が

喇嘛の風俗

## 第十二章　明　清



明の建國（一三六八）
燕京奠都（一四二一）
鄭和
明の北虜・南倭
朝鮮王朝起る（一三九二）
朝鮮の役（一五九二―一五九三）

**明の興起**　元の衰弊に乘じ、漢族より出た朱元璋(シユゲンシヤウ)は、兵を擧げて金(キン)陵(リヨウ)に卽位し、國號を明(ミン)と稱し、遂に元を滅して天下を一統した。これが明の太祖である。その後、成祖の代に都を燕京に遷し、（これより燕京を北京と稱し、金陵を南京と稱す。）內治外交共に大に振つて、鄭和(テイワ)の如きは南海の經略に遣はされ、成祖以後三代の間に七度も南洋に航するなど、著しく國威を輝かしたが、やがて北は瓦剌(オイラート)・韃靼(タタール)の蒙古人(Oirat Tatar)に侵略され、南は倭寇に惱まされて、その防禦に苦しんだ。明はこれを北虜・南倭と稱して大に恐れた。

明の成祖

**李氏の朝鮮**　先に高麗は元の屬國となつてその威令に服してゐたが、明の初に將軍李成桂(リセイケイ)が倭寇を擊退して功を建て、遂に王位を簒つて朝鮮國王と稱し、漢陽（今の京城）に都した。これが朝鮮の太祖である。その後五世を經て宣祖の時、我が豐臣秀吉は明を伐たんとして先づ朝鮮に攻め入つた。明の神宗は大兵を出して

奴爾哈赤

清の創始（一六三六）
明の滅亡（一六四四）
清の支那統一（一六六一）

聖祖（一七二二歿）

朝鮮を援けたが、我が軍と戰つて大敗し、これがために大に國力を弱めた。

**清の興起**　この時、滿洲に英傑奴爾哈赤（Nurhachi）が出て、滿洲の諸部を統一し、女眞の國を再興して後金の汗と稱したが、ついで都を瀋陽（今の奉天）に奠め、その子太宗の時に國號を清と改めた。太宗の子世祖の時、賊魁李自成が明を滅したのに乘じ、討つてこれを破り、都を北京に遷して、北支那を平定した。この時、明の諸王は江南に據つて回復を圖つたが、事成らずして滅び、清は遂に支那を統一した。

清の聖祖（康熙帝）

**鄭成功**　明の遺臣鄭成功は魯王を厦門に奉じて回復を謀つたが、清軍に破られて臺灣に退き、子孫三代に亙つて清に抗した。その母は我が平戸の人で、明の滅びた時、節に殉じて名を揚げた。

**清の隆盛**　世祖の子聖祖（康熙帝）の代に、三藩（雲南の吳三桂、廣東の尙可喜、福建の耿繼茂）の亂を平げて威權



高宗（一七九五歿）

露國の東方經略

清の高宗（乾隆帝）

を南支那に確立し、それより臺灣を取り、蒙古を併せ、次の世宗の代に西藏・青海を從へ、高宗（乾隆帝）の代に至つて、更に天山南北兩路を平げ、緬甸（Burma）・安南・暹羅（Siam）を降し、益〻領域を擴張して、漢族の外に滿洲・蒙古・西藏・土耳古の五大族を併せ、葱嶺以東の大版圖を統治した。聖祖・高宗の二帝は共に希世の英主で、大に國威を外に輝かしたのみでなく、又內政を整へ、制度を定め、學術を勵まし、よく漢人を畏服せしめて、國運を隆昌ならしめた。

**清・露の交涉**　露西亞は十六世紀の中頃より西比利亞（Siberia）の侵略を始め、漸次東進して土人を服し、都邑を建て、十七

清國盛時の版圖及び露清關係

ネルチンスク條約（一六八九）

明の文化
方孝孺（一四〇二歿）
王陽明（王守仁）（一五二八歿）
陽明學
宋濂
高青邱

世紀の中頃には、東の方太平洋岸に達する廣土を併せ、更に南下して黑龍江畔を侵した。清の聖祖は怒つてこれを擊破し、書を露西亞のペートル大帝に送つて境界を議定せんことを求め、兩國の間にネルチンスク（Nertchinsk）條約を結んで、外興安嶺を以てその境界と定めた。されど露西亞はなほ南下の志を收めず、兩國の交渉は年と共に愈〻頻繁となつた。

## 第十三章　明・清の文化

王陽明

**明の文化**　明にも朱子學が一般に行はれて、方孝孺（ハウカウジュ）の如き大家が現はれたが、その中頃に王陽明（ワウヤウメイ）が出で、知行合一の說を立てて、大に世に行はれた。これを陽明學といふ。朱子學と陽明學とは我が國にも傳はつて、江戸時代に盛に行はれた。その他、文には宋濂（ソウレン）、詩には高青邱（カウセイキウ）などの名家を出し、小說も流行して、西遊記などが現はれた。又、畫に

仇英筆

文徵明筆

惲南田筆

文徵明筆

文徵明は號を衡山といつた。沈石田に師事して、文人畫興隆の先蹤をなした名家で、又書にも堪能であつた。こゝに掲げた山水圖も紙本水墨の小品ながら、筆致は極めて雄健で、徵明の特色を窺ふに足りる逸品である。

仇英筆

仇英は十州と號した。明代に於ける風俗畫の第一人者としてその名が高い。こゝに示したものは、京都の知恩院に藏する金谷園、桃李園の双幅の中の桃李園の方で、李太白が春夜諸士と共に長安の桃李園に酒宴を催し、詩を賦してゐる圖である。筆致の非常に精秀なもので、人物の描寫など纖細華麗を極めた堂々たる大作である。

惲南田筆

南田は號で、名は壽平といつた。詩文を能くし、又書にもすぐれてゐた。この菊花圖は北宋の花鳥の大家趙昌の畫を臨摸したものと題されてはあるが、その筆力の凡常ならぬ清新さが、よく窺はれる。

呂紀
沈石田
仇英
文徵明
董其昌
マテオ・リッチ（一六一〇歿）
西洋學術の輸入
清の文化
顧炎武（一六八一歿）
考證學

は呂紀・沈石田・仇英などが著はれ、文徵明・董其昌は書・畫共に巧であつた。陶磁器などの工藝品も愈〻發達した。

殊に神宗の代に、ジェスイト派の僧マテオ・リッチ（利瑪竇 Matteo Ricci）が北京に來て會堂を建て、上下に尊信されてより、同派の宣教師が相次いで明に來り、布教のかたはら曆學・數學・砲術等の西洋の新學術を傳へたので、各方面にその影響を與へた。

**日・明の貿易**　明の惠帝の時、我が足利義滿は明と國交を開き、遣明船を送つて貿易を行つた。この貿易は幕府の財政を助け、利益する所が多かつたので、諸侯・寺院及び商人も、幕府に請うてその貿易に從事した。これがために明の永樂錢が盛に我が國に輸入され、通貨として流通するに至つた。

顧炎武

**清の文化**　清初には、西洋學術の影響を受けて事證を重んずる風を生じ、顧炎武の唱へた考證學が大に行はれた。これより史

方苞
王漁洋
王石谷
惲南田
アダム・シャール（一六六六歿）
フェルビースト（一六八八歿）
清の制度

學・地理學・文字・音韻等の諸學が發達した。殊に聖祖・高宗が學術を奬勵し、學者を優遇したので、學術・文藝の進歩が著しかつた。詩文には方苞・王漁洋などが著はれ、戲曲・小說なども愈〻盛行した。畫には王石谷・惲南田などの名家が出で、陶磁器の發達は、その頂點に達した觀があつた。

西洋學も亦次第に發達し、世祖はアダム・シャール（湯若望）を、聖祖はフェルビースト（南懷仁）を厚遇して、これを信任したので、これ等の宣教師の手によつて、曆法の改正、地圖の製作、大砲の製造等も行はれ、西洋文明は潮の如く流入して、大に世に歡迎された。

**清の制度**　明は唐制に倣つて六部を置き、上に內閣を設けて主腦とし、その政務を總べたが、清も亦內閣と六部とを置いて政務に當らしめた。然るに、後に軍機處が置かれるに及んで、その大臣が天下の政務を總攬するに至つた。又、別に理藩院があつて、藩部（蒙古・西藏・青海・天山南北路等）を管理した。地方は支那本部を十八省に分ち、大抵二省每に總督、一省每に巡撫を置いて、文武の政務を統轄せしめた。但し滿洲は清朝の起つた地であるので、特別な政治を行つて、將軍を置いた。これ等の內外の官吏は、成るべく滿人・漢人を併せ用ひて、兩民族の融和を圖つた。又、兵制には八旗と綠旗との別があつた。八旗は清朝の近衞兵で、主に滿人を以て編成され、父子共に兵役に服せしめた。これを旗人といふ。綠旗は專ら漢人を以て編成されて、支那本部の常備軍に當てられた。

チムール（一四〇五歿）

## 第十四章　西洋諸國の亞細亞經略（一）

**チムールの興起**　先に元が衰亡した頃、西方の諸汗國も亦衰へた。その時、中央亞細亞に成吉思汗の疎族と稱される英傑チムール（帖木兒 Timur）が出て、諸汗國を統一し、南は印度を侵し、西は波斯（ペルシヤ Persia）・小亞細亞を從へ、殆ど亞細亞の西半を略取して大帝國を建て、世界統一の志を遂げんとしたが、チムールが病死するに及んで、間もなく內亂のためにその帝國は分裂した。

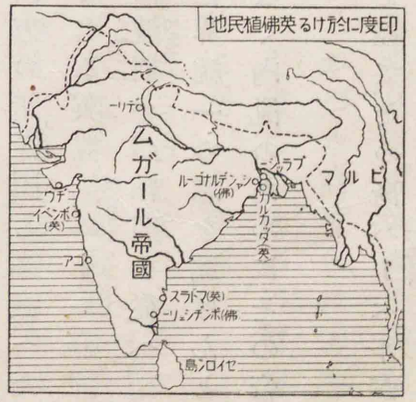
**ムガール帝國**　チムールの死後百餘年を經て、その裔バーベル（Baber）が

ムガール帝國の建設（一五二六）

西力の東漸

北印度にムガール（Moghul）帝國を建て、孫アクバル（Akbar）に至つて北印度の大半を征服し、更にその曾孫アウラングゼブ（Aurangzeb）の時、南印度を略取して、殆ど全印度を統一したが、その後、印度教徒の叛亂などあつて、國勢は次第に傾いた。

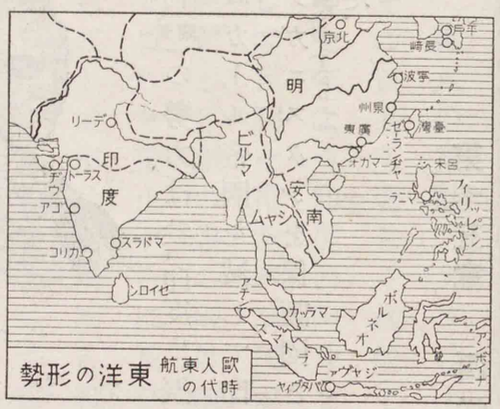
**西力の東漸**　この頃、既に印度の沿岸要地は歐洲諸國の植民地となり、夙にこの方面に植民地を開いた葡萄牙人・和蘭（オランダ）（Holland）人は次第に勢力を失つて、英蘭（イングランド）（England）人・佛蘭（フランス）（France）西人がこれに代り、英蘭人はマドラス（Madras）・ボンベイ（Bombay）・カルカッタ（Calcutta）等を取り、佛蘭西人はシャンデルナゴル（Chandernagor）・ポンヂシェリー（Pondicherry）等を得て、互に勢力を競ひ、商權を爭つた。




**西洋諸國の東洋進出**　元代に一時盛であつた東西の交通は、間もなく土耳古人に遮られて中斷されたが、マルコーポーロの見聞錄に刺戟された歐洲人は、別に東洋に通路を求めて貿易の利を收めんとし、競つて新航路の探險



ゴア葡萄人の根據地となる（一五一〇）
マカオ葡領となる（一五五七）
ルソン西領となる（一五六九）
マニラ西人の根據地となる（一五七一）
バタヴィヤ蘭人の根據地となる（一六一九）
蘭人の臺灣占領（一六二四）
蘭人の日本との通商（一六三九）
マドラス英人の根據地となる（一六三九）
ボンベイ英領となる（一六六一）
カルカッタ英領となる（一六九〇）
ポンヂシェリー佛領となる（一六七四）




いで我が國とも通商した。英蘭人は始め和蘭人と共に葡萄牙人の排斥に當つたが、後には互に爭つて、和蘭人のためにモルッカ（Moluccа）諸島より驅逐され、その後、專ら印度との貿易に力を盡し、マドラスを根據地として、清が支那を統一した頃、ボンベイを取り、次いでカルカッタを收めて、次第に勢を伸ばした。佛蘭西人も亦英蘭人と同じ頃、印度の貿易に從事し、ポンヂシェリーを根據地とし、次いでシャンデルナゴルを得て、大に勢力を張つた。

に從つた。中にも葡萄牙人は、夙く明の中頃に、印度に至る新航路を開き、ゴア（Goa）を取つて根據地とし、次いで支那の阿瑪港（マカオ）（Macao）を取り、東洋貿易に從事した。西班牙（イスパニヤ）（Spain）人も亦、亞米利加（America）大陸を發見した後、更に太平洋に進出してルソン（Luzon）島を取り、マニラ（Manila）を根據地とした。然るに兩國に次いで東洋に進出した和蘭人・英蘭人に攻略されて漸く衰へ、和蘭人はマレイ（Malay）諸島及びセイロン（Ceylon）島を取り、ジャヴァ（Java）のバタヴィヤ（Batavia）を根據地とし、更に臺灣を占領し、次

シャンデルナゴル佛領となる（一六八八）

佛人マドラスを攻略す（一七四六）

クライヴ（一七七四歿）

プラッシーの戰（一七五七）

ムガール帝國の滅亡（一八五七）

印度英國王の直轄となる（一八五八）

アフガニスタン英國の保護國となる（一八八一）

ビルマ英領となる（一八八五）

**印度に於ける英・佛の衝突**　會(タマタマ)本國に起つた英・佛兩國の不和は印度にも波及し、互に兵を動かして相爭ふに至り、佛蘭西の印度總督デュプレックス(Dupleix)は、巧に印度諸侯を操縱して印度全土に勢力を張らんとし、一時英領マドラスを占領したが、間もなく回復された。その後、英國東印度會社のクライヴ(Clive)大佐は、佛蘭西及びベンガル(Bengal)の聯合軍とプラッシー(Plassey)に戰つてこれを破り、遂に佛蘭西の勢力を印度より驅逐するに至つた。これより英吉利(リス)(英蘭)の勢力は益〻印度に振ひ、その統治を喜ばぬ土兵の叛亂を平定し、ムガール帝國を滅して印度を英吉利王の直轄となし、その後更にアフガニスタン(Afghanistan)を保護國とし、緬甸をも併せて、英領印度帝國を完成した。

ヴイラク

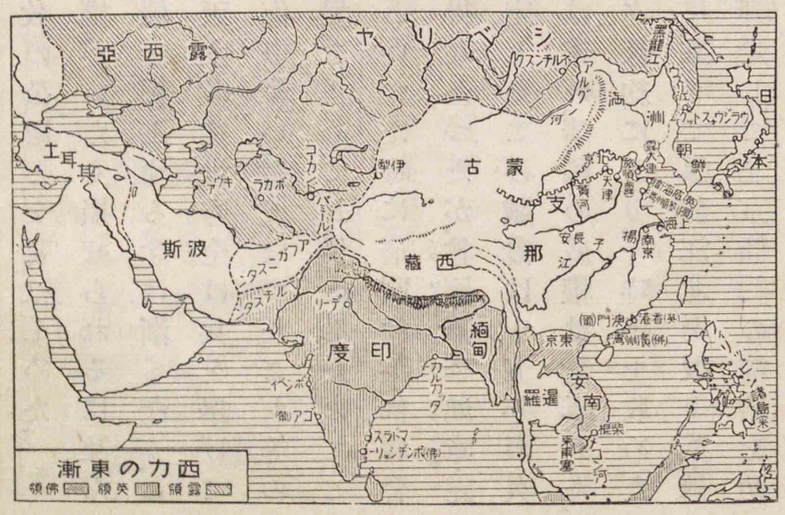
## 第十五章　西洋諸國の亞細亞經略(二)

阿片戰役（一八三九―一八四二）

南京條約（一八四二）

北京條約（一八六〇）

**英人の東進**　プラッシーの役後、英吉利の印度經略の基礎は愈〻固く、その貿易も著しく進展して、清の聖祖の晩年より、印度の阿片を清國に輸出して巨利を得たが、清國が阿片吸飲の惡習と巨額の銀の國外流出とを憂ひて、これを禁止するに及び、貿易保護を名として出兵し、清國と戰つてこれに勝ち、南京條約によつて香港を割讓せしめ、且つ上海・廣東等の諸港を開かしめた。その後、英吉利は國旗侮辱事件に藉口して、會〻その宣教師を殺害された佛蘭西と共に、清國に向つて再び戰を開き、北京を陷れて北京條約を締結し、清國をして、償金を出し、漢口・天津等を



長髮賊の亂（一八五〇―一八六四）

浦鹽斯德港の建設（一八六〇）

開かしめ、且つ公使の北京駐在と基督教の公認とを誓はしめた。

**長髮賊の亂**　阿片戰役後、清國の威權がいたく損ぜられるに及んで、漢人の清朝を輕んずる念は漸く深く、この時に當り、天主教徒洪秀全は兵を擧げて南京に據り、侮り難い勢となつた。これ等の亂民は皆辮髮を止めて長髮としたので、これを長髮賊といつた。時に清國は英・佛聯合軍に迫られて力をその鎭定に盡すを得なかつたが、曾國藩・李鴻章・左宗棠等が義勇兵を以て漸くこれを平定した。この賊亂は十五年の久しきに亙り、地方は甚しく荒廢し、財政は紊れ、清國の威權は愈〻衰へた。

洪秀全

**露人の東進**　露西亞はネルチンスク條約により、一時手を收めたが、再び滿洲の侵略を企て、清國の內亂に乘じて黑龍江北を取り、英・佛聯合軍の北京侵入の際、清國のために奔走して北京條約の締結を助け、更に烏蘇里（Ussuri）江東を讓り受けて浦鹽斯德（Vladivostok）港を建設し、次いで我が國

樺太露領となる（一八七五）

露國の中亞侵略

露軍の伊犁地方占領（一八七一）

佛軍の柴棍占領（一八五九）

東甫寨佛國の保護國となる（一八六七）

越南國佛國の保護國となる（一八八三）

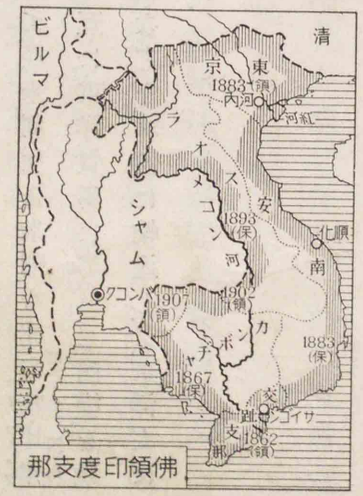
清佛戰役（一八八四―一八八五）

老過佛國の保護國となる（一八九三）

と交渉して樺太を收めた。

露西亞は又中央亞細亞に進出してボカラ（Bokhara）・キヴァ（Khiva）・コーカンド（Khokand）を手に收め、天山南北路に回教徒の亂が起つた際、伊犁（イリ）地方をも占領し、更に南下して英領印度に迫つた。

**佛人の東進**　佛蘭西人は英吉利人のために印度より逐はれたが、十九世紀の初より漸く安南に勢を伸べ、この地に建國された越南國と事を構へて柴棍（サイゴン）（Saigon）を取り、次いで柬甫寨（カンボジヤ）（Cambodia）を保護國となし、更に東京（トンキン）（Tongking）地方に兵を入れてこれを奪ひ、遂に越南國をも保護國とした。こゝに於て、清國はこれに抗議して佛蘭西と戰を交へたが、程なく和議が成つて、清國は佛蘭西の東京地方を領有することを承認するに至つた。その後、佛蘭西は老撾（ラオス）（Laos）を保護國となし、暹羅（シヤム）を壓してメコン（Mekong）河以東の地を收めた。



米國の布哇及び比律賓領有（一八九八）

清國の衰運

日清戰役（一八九四―一八九五）

歐洲列强の要地租借

義和團の蜂起（一八九九）

**歐米人の東洋貿易**　西力の發展に伴つて、亞米利加合衆國も亦布哇（ハワイ）・比律賓（フィリピン）Hawaii Philippine を領有して、東洋に進出し來り、歐米人は互に東洋貿易に努めて商權を競ひ、東洋の產物たる絹・陶器・磁器・茶・香料・砂糖などを本國に輸送し、又、東洋人に必要なる物資を運び來つて巨利を占めた。

## 第十六章　清の衰亡

**歐洲列强の壓迫**　東亞の覇者を以て自任した清國は、高宗の死後、外は歐洲列國に侵略され、內は內亂に禍されて次第に衰運に向つた。その後、朝鮮の獨立に關し我が國と戰を交へて大敗し、臺灣を我に割讓し、朝鮮は獨立國となつて韓國と改稱するに及び、清國はその弱勢を暴露して、列强の侮る所となり、鐵道敷設權・鑛山採掘權などの利權を强請された上に、獨逸には膠州灣を、露西亞には旅順口及び大連を、佛蘭西には廣州灣を、英吉利には威海衞を租借されるに至つた。

**義和團の蜂起**　こゝに於て、清國人の排外心は大に高まり、遂に義和團と稱する亂民の蜂起となり、北京の各國公使館はこれ等の暴徒に襲擊されて、一時危急に陷つたが、やがて我が軍を中心とする各國聯合軍によつて鎭壓され、これより清國は益〻列强の制壓を蒙るに至つた。

日英同盟（一九〇二改訂一九〇五）

日露戰役（一九〇四―一九〇五）

孫文（一九二五歿）

革命黨の擧兵（一九一一）

**日・露の戰**　この時に當り、露西亞は大兵を滿洲に入れて、滿洲占領の勢を示し、且つ韓國の獨立を脅かすに至つたので、我が國は日英同盟を結び、遂に露西亞に向つて宣戰し、大に勝つてその野心を挫折せしめた。この戰役によつて、遼東半島の租借權及び南滿洲鐵道は我が國に歸し、韓國は我が保護國となり、後に我が國に併合されて、東洋の形勢は一變した。

孫文

**清の衰滅**　清國は我が國の興隆に刺戟されて大に自覺し、專ら國政の改革に努め、憲政を實施せんとしたが、時既に遲く、孫文を盟主とする革命黨は兵を武昌に擧げ、忽

清國の滅亡（一九一二）

中華民國の建設（一九一二）

袁世凱（一九一六歿）

世界大戰の始（一九一四）

ち南京を陷れて假政府を建て、孫文を迎へて臨時大總統とした。この時、清朝はこれを鎭壓する力なく、遂に共和政を認めて、宣統帝は位を退くに至つた。こゝに於て、清は滅びて新に支那共和國が起つた。

## 第十七章　中華民國　滿洲帝國

**中華民國の建設**　支那共和國は中華民國と稱し、袁世凱（エンセイガイ）が新に大總統に就任して、政府を北京に置いたが、間もなく袁世凱は自ら帝位に登らうとした。こゝに於て、革命黨は直ちに討袁軍を起し、盛に共和擁護を唱へてこれに反抗した。列國も亦その中止を勸告したので、袁世凱は遂にその目的を達しないで、憂悶の中に病死した。

袁世凱

**政局の動搖**　袁世凱の歿後、黎元洪（レイゲンコウ）が推されて大總統となつた。これより先、歐洲に世界大戰が起つたが、これに參戰す

張勳の復辟運動（一九一七）

廣東政府の創立（一九二一）



るの可否について、政府と國會と意見を異にし、紛議を生じた。この時、張勳（チャウクン）は調停に藉口し、北京に兵を入れて國會を解散させ、突然復辟（清朝再興）を圖つて、これに成功した。然るに諸方よりの反對を蒙つて、忽ち失敗に終り、これがために黎元洪は責を引いて職を辭し、總理段祺瑞（ダンキズイ）が時局の收拾に當つて參戰問題を決し、漸く共和政治の基礎を固めた。

段祺瑞

**國民政府の成立**　革命以來、政權は常に舊官僚・軍閥の手に歸して、舊革命黨は絶えずこれに壓迫されたが、先に國會の解散された時、廣東に走つた舊革命黨員は、その地に軍政府を建て、間もなく國民政府と改稱し、孫文を大總統に擧げて北京政府に對抗した。

**北方軍閥の爭鬪**　北方に於ては、その後、直隷派と安徽派との軍閥の間に絶えず政權の爭奪が行はれ、互に兵を動かし、大總統もこれ等

張作霖（一九二八歿）
中華民國の統一（一九二八、六月）
五院制度

の軍閥に擁立されて屢〻交迭したが、段祺瑞が執政政府を建てて難局打開に努め、南北の和平合一を圖るに及んで、南方の孫文も段祺瑞の懇請を容れて北京に至り、双方の融和に盡さんとした。然るに會〻孫文が北京の客舍に於て病死したので、その功を奏しなかつた。

## 國民政府の南北統一

孫文の死後、國民政府は全く北方と絶ち、蔣介石を總司令として北伐軍を起し、南京を陷れて政府をこゝに遷した。北方では、この時、滿洲を根據とせる張作霖が、漸く勢を得て大元帥に任じ、總司令となつて南方に當つたが、蔣介石の北上して北京に迫るに及んで、張作霖は滿洲に逃れ、途中に於て不慮の死を遂げた。こゝに於て、中華民國は始めて國民政府の下に統一されるに至つた。これより國民政府は南京を國都とし、北京を北平と改め、五院制度（行政・立法・司法・考試・監察）を定めて、蔣介石が政府の首席となり、孫文の唱へた三民主義

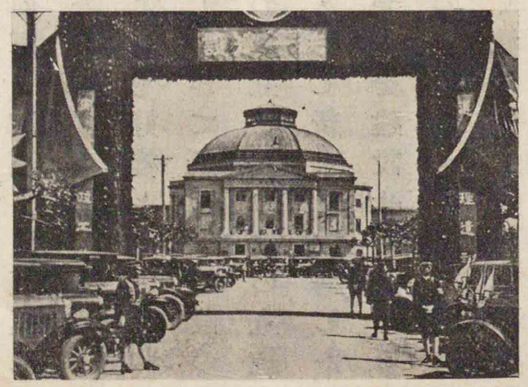
蔣介石

日支條約（一九一五）
巴里講和會議（一九一九）
華盛頓會議（一九二一）

（民族の平等・民權の平等・民生の平等）によつて、內外の政務を總べることとなつた。されど國民政府は、その後も內訌の止む時なく、且つ共產黨軍に禍されてその鎭壓に惱み、政情は容易に安定しなかつた。

## 日支條約と排日運動

先に世界大戰の起つた時、我が國は東洋平和のため獨逸に宣戰し、膠州灣を占領し、支那に交涉して、（一）山東省に於ける獨逸の利權を我に繼承し、（二）遼東半島の租借期限を延長し、（三）南滿洲及び東部內蒙古に於ける我が優越權を認めしめ、大戰終了後膠州灣を支那に還附すべきことを約した。然るに支那は、巴里（Paris）講和會議の際、獨逸より直接膠州灣の還附を受けんとして成らず、遂に排日運動を起すに至つた。その後華盛頓（Washington）會議に於ける九國條約の結果、支那の主權尊重・領土保全が約され


國民政府統一祝賀式

て、膠州灣は我が國より支那に還附されたが、國民政府の統一と共に、排日運動は日を逐うて愈〻激しくなつた。

滿洲國の成立（一九三二）

**滿洲國の成立**　排日の氣勢は滿洲にも及び、張作霖の死後、その子張學良（チヤウガクリヤウ）は國民政府と通じて抗日侮日の擧に出で、遂に我が南滿洲鐵道を破壞して我に挑戰した。こゝに於て、我が國は自衛上直ちにこれに應戰し、張學良の軍を滿洲より驅逐してその治安に努めた。多年暴政に苦しめられた滿洲の民衆は、これを好機として平和の樂土を築かんとし、やがて新國家建設の議が熟して滿洲國の成立となり、清の宣統帝溥儀（フギ）は迎へられて執政となり、長春を國都として新京と改稱した。我が國はその王道政治によつて五族協和の樂土を建設せんとするを見て、これに援助を與へ、列國に先んじてその獨立を承認し、共同防衛に當るべきことを約した。かくて希望に輝く滿洲國は着々國礎を固め、帝政を布くこととなり、溥儀執政を推して皇帝に仰ぎ、滿洲帝國を完成した。

滿洲國皇帝

滿洲帝國の成立（一九三四）

支那の現狀

**支那の現狀**　清末以來、支那は列强の投資によつて、鐵道の敷設、鑛山の開掘、諸工場の建設が行はれ、產業は著しく開發されたが、これがために各國の勢力は錯綜し、內治も外交もこれに制肘されて、政府の意の如くならなかつた。國民政府成立後は、社會の改造、國權の回復に努めたとはいへ、內は軍閥の抗爭、共產黨の跋扈によつて政爭は止む時なく、外は英・露に壓せられて、外蒙古・西藏などの邊疆地方はその保護の下に獨立自治の姿となり、民心の不安は一日も除かれなかつた。

支那事變

會〻滿洲事變の勃發によつて滿洲帝國の獨立を見るに及び、國民政府は我が國を嫉視して排日の氣勢を高め、軍備の充實に努めて抗日政策を取り、徒に歐米列强の勢力に依つて我を制せんとして、遂に今茲の支那事變を招くに至つた。今や我が國は海に陸に兵を進めて連戰連勝の戰果を收め、支那の迷夢を醒さんとしてゐる。

# 第十八章　現代の東洋

東洋の現勢

**東洋の情勢**　西力の東漸以後、亞細亞の大半は歐米諸國に占領され、西比利亞・印度・印度支那を始め、南洋諸島まで殆どその支配の下に置かれて、獨立國としては、我が國の外に、滿洲國・中華民國・暹羅・アフガニスタン・イラン(波斯)・土耳古等の數國を算へるのみである。露國は最近頻に支那の領土を侵して外蒙古・新疆に進出すると共に、滿洲國の國境を脅かし、英國は又印度より西藏に勢力を張つてこれに對抗し、佛國は印度支那に據り、和蘭は南洋諸島を占め、比律賓は最近米國の手を離れて自治を認められたとはいへ、なほその監督を免れない狀態であつて、國際關係は互に複雜し、東亞の現狀は前途測り知られない情勢である。

日本の使命

**我が國の使命**　この間にあつて、よく歐米列强に拮抗して東亞の安定勢力たるものは、獨り我が日本國あるのみである。我が國が東洋史の發展に鑑み、東洋平和の達成を使命として、先に滿洲國の成立を援け、更に支那と提携して東洋民族の發展とその文化の向上とを圖らんとするは、四圍の情勢に照らして當然の責務といはねばならぬ。

**我が國民の覺悟**　任は重く途は遠い。よく世界の大勢を知つてその進運に遲れることなく、國民各〻その業務を勵んで益〻國本を固うし、我が國體の精華を發揮して國威を宣揚すると共に、その大使命の達成に努めて、世界の平和と人類の幸福とに貢献せねばならぬ。

# 西洋史篇

## 第一篇　上代東方諸國とギリシヤ・ローマ

### 第一章　西洋史の意義

**西洋史**　西洋史は西洋文化の發展の跡をたづねて、今日の世界文明の由來する所を明かにするものである。

**西洋文化**　西洋文化の發源地はアフリカ(Africa)の東北隅とアジヤ(Asia)の西南部とである。それよりヨーロッパ(Europe)に伸び、アメリカ(America)に移り、更に東洋・南洋・アフリカ・大洋洲(Oceania)にまで及んで、こゝに東西兩文化の接觸融合して世界的發展をなすに至つた。

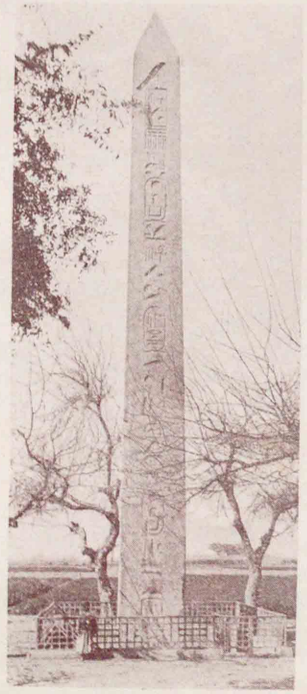
**西洋民族**　西洋文化を生んだ民族はハム・スメリヤ(Hamitics Sumerians)の兩民族で、スメリヤの文化を學んだものはセム民族(Semitics)である。ハム民族の文化をエ

ジプト文化といひ、セム民族の文化をバビロニヤ(Babironia)文化といふ。この兩文化を更に發展進歩せしめたものはアーリヤ(Aryans)民族である。アーリヤ民族中先づギリシヤ(Greeks)民族がこの兩文化を受けて優秀なギリシヤ文化を作り、次いでラテン(Latins)民族がこれを受けて更に擴大し、ラテン民族の一旦衰へるに及んで、ゲルマニヤ(Germans)民族がこれを受け、後スラヴ(Slavs)民族がこれを學んで、いよ〳〵世界的にその文化が普及したのである。

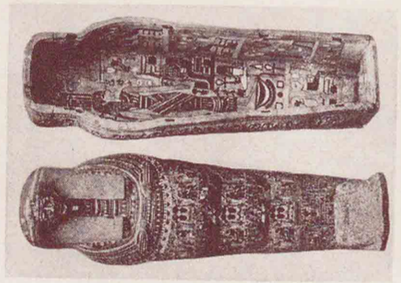
**我が國との關係**　西洋民族のアジヤ進出によつて、西洋文化は印度・支那等に及び、次いで我が國との交渉も始まり、明治維新後はその交渉殊に頻繁となり、これに伴つて西洋の文物制度が盛に我が國に輸入された。されば國史を理解するに東洋史を學ぶ必要のあるが如く、西洋史を學ぶことは、近世以降の我が國勢の進展を知ると同時に、よく世界の大勢を察する上に必要缺くべからざるものである。

## 第二章　古代東方諸國

ドッミラビとスクィフス



碑尖方



ミイラの外棺

楔形文字

スフィンクスとピラミッド

前二八〇〇年頃に造られたもので、共にエジプトのギゼーに現存する。ピラミッドは古代エジプト王の墳墓で、ギゼーには大小六基あるが、その最大なものは高さ約百三十六米もある。巨石又は煉瓦を以て造られ、その内部に納棺室があり、細いトンネル狀の參詣道で外部と通じてゐる。スフィンクスは日神を表したものとも、又は王を表象したもので、人首は王、獅身は王の威を表したものともいはれる。このスフィンクスは一巨巖より成つて、高さ約二十一米、長さ約四十五米ある。

方尖碑

方尖碑はもと古代エジプト人が日神に奉納した石柱である。後には柱の面に寄進者の名又は功業を刻して神殿の前に一對づつ建立し、神殿の裝飾とすると共に、寄進者の名を後世に遺す記念物となつた。この圖はラメス二世の方尖碑で、エジプトのヘリオポリスに在る。

ミイラの外棺

圖は第二十一王朝(前十一世紀)アモンラー神の巫女ターアフチのミイラの外棺で、現にロンドン博物館に所藏されてゐる。古代エジプト人は死體を保存すれば他日それが甦生するといふ信仰を持つてゐた。

楔形文字

楔形文字は、初め象形文字より起り、バビロニヤ人、アッシリヤ人、ペルシヤ人等に使用されて音符文字となつた。この圖は石灰石面に刻された前四〇〇〇年頃のもので、現にロンドン博物館に所藏されてゐる。



ハム族

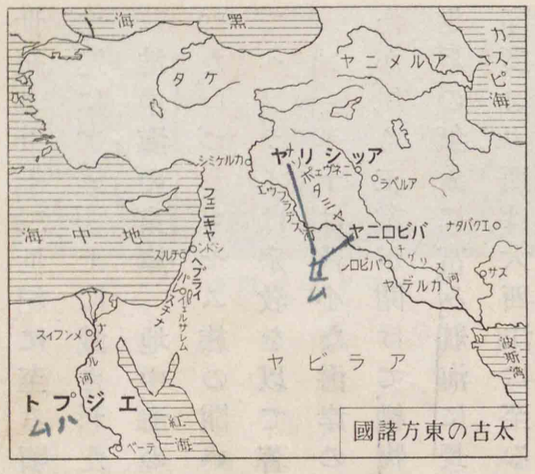
宗教

ミイラ

金字塔
人首獅身像
方尖碑

太陽曆
象形文字

**エジプト**　エジプト(埃及)は支那・印度と同じく世界最古の文明國の一で、今を距ること凡そ五千年前に、ハム族によつて開かれた。この國は氣候が暖かな上に、ナイル河が時を定めて氾濫するので、土地がよく肥え、農耕に便であつて、小麥・大麥・亞麻などが夙(ハヤ)くより多く產したからである。



太古の東方諸國

國王は神と崇められて專制政治が行はれ、人民は多神教を信じ、特に太陽を崇拜した。又、靈魂の轉回を信じて、屍體をミイラとなし、永くこれを保存する風があつた。建築・彫刻の術も大に進み、金字塔(ピラミッド)・人首獅身像(スフィンクス)・方尖碑(オベリスク)及び神殿・王宮の遺跡など今に存して、その雄姿を誇つてゐる。又、學術も發達し、太陽曆・象形文字などの發明もあり、パピルス紙も製された。前十五

Pyramid　Sphinx　Obelisk　Papyrus

エジプトの隆盛時代（前一五〇〇—前一三〇〇頃）
セム族
フェニキヤ
音符文字
ヘブライ
一神教

世紀より十三世紀に至る頃がエジプトの最盛期で、その後漸く衰へて、遂にアッシリヤ（Assyria）に滅された。

**地中海の東岸**　地中海の東岸にはフェニキヤ（Phoenicia）・ヘブライ（Hebrew）の二國が起つた。いづれもセム族の開いたもので、フェニキヤは商業及び植民に秀で、ヘブライは宗教を以て著はれた。

フェニキヤは狹小な海岸の砂地であつたために、農業は興らなかつたが、夙く工業が開けて、織物・硝子・染料などの製産があり、人民は冒險進取の氣象に富み、航海に長じ、シドン（Sidon）及びチルス（Tyrus）を首府として、東は印度より西は大西洋に至る間を往來して貿易に從ひ、地中海沿岸に數多の植民地を開いた。なほフェニキヤ人の名を不朽ならしめたものは、現今の西洋文字の基である音符文字を發明したことである。

ヘブライ人はアブラハム（Abraham）を國祖とし、メソポタミヤ（Mesopotamia）よりパレスチナ（Palestine）に移り、更に又エジプトに轉じ、再びパレスチナに歸つて永住の國を建てた。宗教は四圍の諸國民と異なつて一神教を奉じ、後世のキリ



ヘブライの隆盛時代（前一一〇〇—前一〇〇〇頃）
楔形文字
古バビロニヤ
アッシリヤ

スト教の源をなした。初め高僧が上に在つて、神意によつて政治を行つたが、後には統一ある王政となつた。前十一世紀より十世紀に至るダヴィッド（David）王及びソロモン（Solomon）王の時代は、ヘブライの最盛期で、イェルサレム（Jerusalem）を首府とし、國土も大に膨脹した。

アッシリヤ王の遊獵

**チグリス・エウフラテス兩河の流域**　この流域はナイル河流域の如く、土地が肥えて農業が發達し、エジプト・支那・印度と同じ頃より開けて、古バビロニヤ（Babylonia）・アッシリヤ及び新バビロニヤの三國がこゝに興亡した。三國は共にセム族に屬し、天體を崇拜し、天文・曆學に長じ、建築にも巧みで、楔形（クサビガタ）文字を使用してゐた。古バビロニヤは始めエウフラテス河の下流に起つたが、後にその植民地であつたチグリス河上のアッシリヤに滅された。アッシリヤは國俗が武を尚（タフト）び、諸國を從へて大帝國を建て、ニネヴェ（Nineveh）に

アッシリヤの滅亡（前六一二）

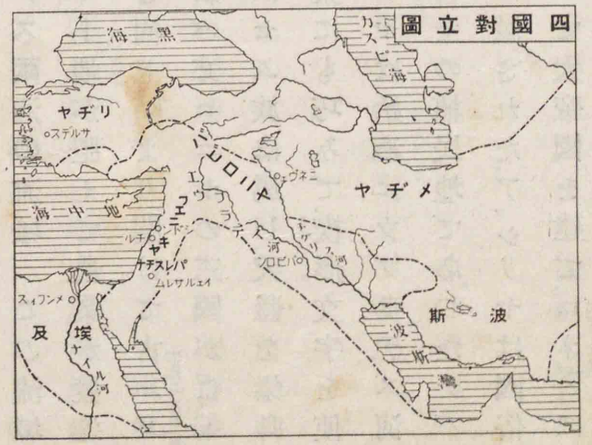
四國對立

エジプト
リヂヤ
新バビロニヤ
メヂヤ

都したが、その盛運は久しからずして、遂にメヂヤ及び新バビロニヤに滅された。アッシリヤの滅後、エジプトが又獨立し、リヂヤが新に起つて、新バビロニヤ・メヂヤ（Media）と對立し、四國は互に相爭つた。（Lydia）

**ペルシヤ**　四國の中、新バビロニヤが最も強かつたが、ペルシヤ（波斯）（Persia）が新に起つて、これ等の諸國を滅し、東は印度河より、西はエーゲ海（Aegean）にまで及ぶ大帝國を建てた。第三代の王ダリウス（Darius）は經世の才に富み、大に治績を擧げた名君であつた。ペルシヤ人はアーリヤ族

ダリウス王（前四八五歿）








ゾロアストル教

一市一國の制

イオニヤ族とドーリヤ族

に屬し、資性寛大にして樸實の風があり、又ゾロアストル教（Zoroaster）を信じ、その感化を受けて正義清淨を尚んだ。

**ゾロアストル教**　ゾロアストル教は、前八世紀頃ゾロアストルの開いたもので、宇宙間に善惡の二神があつて常に鬪爭し、善神の勝利は幸福を生み、惡神の勝利は災害を生じ、最後に善神が勝利を得るものと信ぜられた。拜火教はこれに基づいたものである。

## 第三章　ギリシヤ

**ギリシヤの都市**　ギリシヤ（希臘）（Greece）半島には夙くギリシヤ人が移住して、到る處に都市を建て、その都市は皆一つの獨立國家であつた（ギリシヤ人は自らヘレネスといひ、（Hellenes）その國をヘラスといつた。（Hellas））ギリシヤ人は自由獨立の精神に富み、協和一致の心が薄かつたが、その風俗・言語・宗教などが共通であつた上に、諸國間に神事同盟があり、オリンピヤ（Olympia）の大祭などが行はれたので、民族的團結がよく保たれた。ギリシヤ人の中最も優れてゐたのはイオニヤ（Ionians）及

スパルタ

スパルタの教育

アテネ

びドーリヤの二族であつた。

**スパルタ** Dorians ドーリヤ族は多くペロポネスス半島に住した。その建てた都市の中最も著はれたのはスパルタ Sparta であつた。市民は皆先住者を屬民とした武士で、二人の世襲の王を戴き、質朴剛健を旨とし、體育を重んじ、武藝を磨き、奉公の精神に富んでゐた。かくてスパルタは次第に強盛となり、前六世紀頃には隣國を併呑して、威をペロポネスス半島に振つた。

ギリシヤの兵士

**スパルタの教育**　スパルタでは、男兒は七歳に至れば、國立の教養所に入つて共同生活をなし、武を練り體を鍛へて、專ら質實剛健の氣を養つた。女子の教育も、亦勇俠なる婦德と強健なる身體とを養ふにあつた。

**アテネ**　アテネ Athens はイオニヤ族の建てた都市で、スパルタの勃興した頃、中部ギリシヤに勢を張つてゐた。アテネ人はスパルタ人とは異



ソロンの制度（前五九四）

ペルシヤ戰役（前四九二―前四四九）

デルス同盟（前四七七）

ギリシヤとペルシヤとの和成る（前四四九）

ペリクレス（前四二九歿）

なつて、優美を愛し、自由を尚び、學術技藝に秀でてゐた。初は王政であつたが、後に貴族政治に變じ、貴族が政權を握つて平民を苦しめたので、兩者の爭が絶えなかつた。前六世紀の初にソロン Solon が出て、平民をも政治に與ら（アヅカ）しめたが、その後、民權は著しく伸張して、國勢が益〻振つた。

**ペルシヤ戰役**　この時ペルシヤが強國の勢を以て、前後三回に亙り、大擧してギリシヤに攻め入つたので、アテネ・スパルタの二國は協力してこれに當り、陸に海に奮戰して遂にこれを擊退した。その後、アテネはデルス同盟 Delus を組織して強盛の海軍を作り、ペルシヤを威壓したので、兩國の和議は遂に成つた。

**列國の爭覇**　この頃、アテネにペリクレス Pericles

アテネの覇業

ペロポネスス戰役（前四三一―前四〇四）

スパルタの覇業

テーベの覇業

フィリップ（前三三六歿）

ペリクレス

クレスといふ大政治家が出で、政權を握つて民主政治を完成し、デルス同盟諸國を屬領化せしめ、大に學藝を奬勵したので、文化は燦然として輝き、國運が隆昌を極めた。史にこの間を「ペリクレス時代」と稱する。

然るに、スパルタはアテネの隆昌を嫉み、ペロポネスス戰役を起してこれを屈せしめ、遂にギリシヤの覇權を握つた。その後、テーベにエパミノンダス・ペロピダスの兩雄が出て、スパルタの横暴を憤り、これ（Epaminondas, Pelopidas）を破つてその覇權を奪つたが、この二名士の死後は、テーベも勢が振はないで、ギリシヤの諸市は互に抗爭を事とし、共に衰へた。

**アレクサンドル大王**　ギリシヤの北に、ギリシヤ人が未開國として侮つたマケドニヤ國（Macedonia）があつたが、英傑フィリップ王（Philip）が出でるに及んで、盛にギリシヤの文物を輸入し、國力を養ひ、ギリシヤの衰へたのに乘じて、遂にこれをその權下に服さしめた。その後フィリップ王はギリシヤ

アレクサンドル大王（前三二三歿）

ペルシヤの征服（前三三四）

大王の凱旋（前三二四）

大王の東西統一策

帝國の分裂

アレクサンドル

列國の兵を率ゐてペルシヤを征せんと企てたが、部下に弑せられてこれを果さなかつた。その子アレクサンドル大王（Alexander the Great）は智勇絶倫の英雄で、歳二十にして王位に卽き、父の志を繼いでペルシヤ遠征の師を起し、遂にこれを滅し、更に進んで印度に入り、やがてバビロン（Babylon）に凱旋した。かくて大王は東西の文化の融合に心を用ひ、ギリシヤ人を新征服地に移し、自らはペルシヤ王女を娶り、將士にもペルシヤの婦人を娶らしめて、人種・文化の混一を圖つたが、その業の半ばにして、病んで歿した。時に三十三歳であつた。

**帝國の分裂**　大王の歿後、その英志を繼ぐべき者がなく、部將は互に爭つて戰亂が久しきに

ギリシヤの文化

互り、遂にその大帝國はマケドニヤ、シリヤ(Syria)、及びエジプトの三王國と、他の二三の小國とに分裂したが、後にいづれもローマ(Rome)に併せられた。

## 第四章　ギリシヤの文化

**ギリシヤの文化**　ギリシヤの文化は、エジプト及びバビロニヤの文化の影響を受けたとはいへ、元來ギリシヤ人は優秀な獨創性に富み、よく特殊の發達を遂げて、西洋文化の基礎を築き、後世にまで偉大な感化を與へた。アレクサンドル大王の東征以後、ギリシヤ文化は大王の廣大な領土に弘まり、東方文化と接觸して更に世界的となり、その影響は中央アジヤより印度・支那にまで及んだ。この世界的となつたギリシヤ文

アテネのアクロポリスの現狀

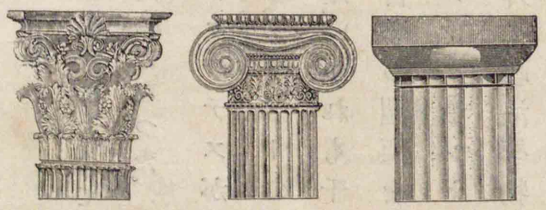
丘上の建物はパルテノン神殿、その下に立つ圓柱はオリンペイオンの神殿の廢址である。

ヘレニズム
宗教
ゼウス
オリンピヤ大祭
文學・美術
ホーマー
ヘロドツス（前四二五頃歿）
イクチヌス

化をヘレニズム(Hellenism)と稱する。

**宗教**　ギリシヤの宗教は、元來自然崇拜の多神教であつて、諸神は皆人間性を有し、人間と自由に談話したといはれる。その中に高位の神が十二柱あつて、オリンプス山(Olympus)に住み、その最上の神をゼウス(Zeus)といつた。オリンピヤ(Olympia)の大祭はこのゼウス神を祭つたもので、四年に一回行はれたが、その時全ギリシヤ人はこれに參拜して、種々の競技を演じた。これがためにギリシヤ人は精神的に結合された。

**文學・美術**　ギリシヤの文學・美術は多く宗教神話に因んで起り、古今獨歩と稱せられる。詩人には古英雄の事蹟を歌つた詩聖ホーマー(Homer)があり、歴史家には「歴史の父」と稱せられるヘロドツス(Herodotus)があり、建築家にはパルテノン(Parthenon)の神殿を營んだイクチヌス(Ictinus)があり、彫刻家には同神殿内のアテネ神像を造



ドリヤ式　イオニヤ式　コリント式

ギリシヤ建築の柱頭樣式

フィヂヤス
ギリシヤ建築の三樣式

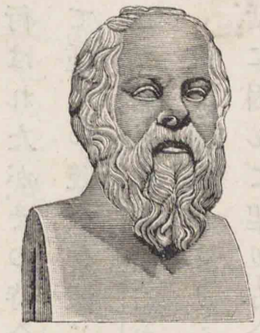
哲學
ソクラテス（前三九九歿）
プラトー（前三四八歿）
アリストートル（前三二二歿）

農・工・商業

つたフィヂヤス(Phidias)があつた。

**ギリシヤの建築樣式**　ギリシヤの建築には、その柱の樣式によつてドーリヤ式(Doria)・イオニヤ式(Ionia)・コリント式(Corinth)の三種があつて、後世の模範となつた。

**哲學**　哲學には、哲學者の師表と仰がれる大聖ソクラテス(Socrates)があり、その高弟にプラトー(Plato)があり、プラトーの門下にアリストートル(Aristotle)があつた。いづれも千古の碩學として推稱され、西洋哲學の淵源を成した。アリストートルは英傑アレクサンドル大王の師であつたが、哲學の外に政治學・物理學等にも優れ、近世科學の基を開いた。


ソクラテス

**農・工・商業**　ギリシヤは海に沿うた山地で、平野が少く、農作地が乏しかつたので、大麥・葡萄・オリーブ等の產出はあつたが、食料としての小麥は多く外國よりその補給を仰がねばならなかつた。從つて海上活動が盛に行はれて、商業は大に發達し、貨幣も物々交換の媒介とし



ローマの建國（前七五三）

共和政の創始（前五一〇）

貴族と平民との軋轢

て造られ、銀貨も既に用ひられ、金貸を業とする者さへ起つた。工業は大理石の產出が多かつたために、彫刻及び建築が著しく發達し、後世の模範となる精巧なものが多く造られた。その他築城・築港の術も大に進んだ。

アテネの古錢

## 第五章　ローマ

**ローマの建國**　ローマ(羅馬)(Rome)は、もとイタリヤ(伊太利)(Italy)の中部を流れるチベル河畔にラテン人(Latins)の建てた小都市であつたが、後、次第に盛運に向ひ、遂にヨーロッパの大部分とアジヤ・アフリカとに跨る空前の大帝國となつた。

**政體と社會**　政體は、初は王政であつたが、後に共和政となり、毎年二人の統領(コンサル)(Consul)が選ばれて國政を執つた。社會には貴族と平民との二階級があつて、その軋轢(アツレキ)が久しく續いたが、後に平民も漸く權利を伸張

伊太利半島の征服

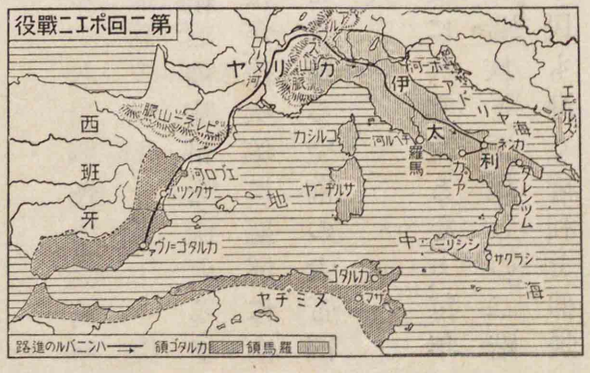
して、貴族と同地位を占めるに至つた。

**版圖の擴張**　ローマ人は、一致してよく外民族と戰ひ、遂にイタリヤ半島をその權下に服せしめたが、更に海外に勢を展べんとし、進んで對岸のカルタゴ（Carthage）と戰端を開いた。カルタゴはフェニキヤの植民地で、當時西部地中海上に覇を稱へてゐた。この兩國の戰は前後三回に亙り、これをポエニ（Punic）戰役といふ。第二回戰に於て、カルタゴの名將ハンニバル（Hannibal）はアルプス（Alps）の嶮を越えてイタリヤに侵入し、大にローマを惱ましたが、ローマ人はよく苦戰に堪へ、遂にカルタゴ軍を擊破して和を請はしめ、その後又カルタゴを攻略して全くこれを滅した。この年ローマはマケ

ポエニ戰役（前二六四―前一四六）

ハンニバル（前一八三歿）

ハンニバル




カルタゴの滅亡（前一四六）

マケドニヤ・ギリシヤの征服（前一四六）



貧富の懸隔と内爭

第一三頭政治（前六〇）

ドニヤ・ギリシヤを征服して大に版圖を擴張し、地中海は殆どローマの領海となつた。

**内爭と三頭政治**　ローマは諸外國を征服して富强となつたが、富の分配が宜しきを得なかつたために、富豪と貧民とに分れ、富豪は奢侈に耽り、貧民は生計に苦しんだ。既にして兩階級に首領が現はれ、互に私兵を養つて抗爭を續けたが、遂に貧民黨の首領ケーザル（Caesar）は、武將ポンペイウス（Pompeius）及び富豪クラッスス（Crassus）と三頭政治（Triumvirate）を組織し、爭亂を制壓して全國を分治した。ケーザルはローマ第一の偉人で、ガリヤ（Gallia）（今のフランス・ベルギー）の蠻民を征服し、ゲルマ（Germania）

ケーザル

ケーザルの凱旋

ケーザルの大權掌握（前四五）

ケーザルの死（前四四）

第二三頭政治（前四三）

オクタヴィヤヌス（後一四歿）

アントニウス（前三〇歿）

アウグスツス

ニヤ（今のイツ）・ブリタニヤ（今のイギリス）にも侵入し、これ等の地にローマの文化を移植した。クラッススの死後、ケーザルはポンペイウスと爭つてこれを仆し、自ら文武の大權を握り、大に庶政を改め、曆法を正し、貧民を救濟し、植民を奬勵するなど、頗る治績を擧げたが、遂に一部反對黨のために暗殺の厄に遇うた。かくて國内は再び亂れたが、ケーザルの甥オクタヴィヤヌスは、ケーザルの部將アントニウス Antonius 及びレピヅス Lepidus と第二三頭政治を行つた。然るに、間もなくレピヅスはオクタヴィヤヌスに逆つて降服し、アントニウスはエジプトの女王クレオパトラ Cleopatra と結び、オクタヴィヤヌスに破られて自殺したために、政權は全くオクタヴィヤヌス一人に歸した。

アウグスツス

**アウグスツスと帝政**　オクタヴィヤヌスはローマに凱旋して、元老院の奉つたアウグスツス Augustus（尊嚴者の義。）の尊號を受け、文武の要職を一身に兼ねて、共和政の名の下に帝政の實を行つた。これをローマ帝政の始とする。

ローマ帝政の始

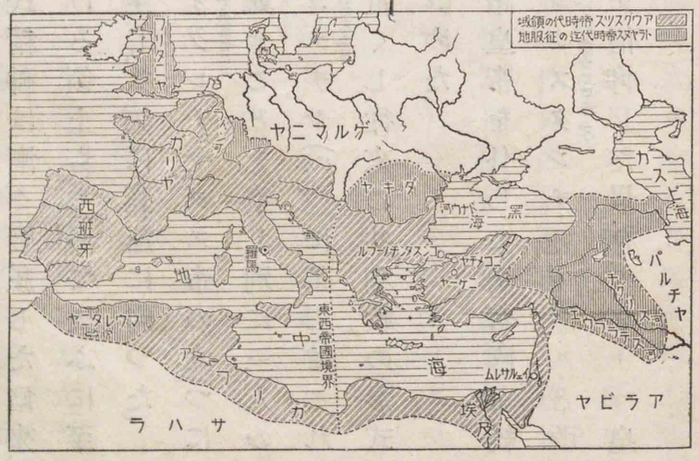
アウグスツスはよく意を政治に用ひ、國防を嚴にし、土木を起し、又、大に學藝の奬勵に努めたので、ローマの黃金時代を現出した。

ローマの黃金時代

**ローマの最大版圖**　アウグスツスの時、ローマの領土は、東はエウフラテス河より西は大西洋に至り、南はアフリカ・アラビヤの砂漠より、北はライン河 Rhine・ドナウ河 Danube 及び黑海 Black Sea に達したが、その死後、十數代を經てトラヤヌス Trajan 帝の代に至り、東北はドナウ河下流の北、ダキヤ Dacia を併せ、東はエウフラテス河を越えてカスピ海 Caspian Sea にまで及び、その版圖は

ローマの最大版圖

トラヤヌス（一一七歿）



ディオクレチヤヌス（三一三歿）

帝國の分治（二九二）

著しく擴大した。かく版圖の擴張するに連れて、國内は幾多の異民族に分れ、從つてギリシヤ文化とローマ文化とは對立し、加ふるにローマ人は淫逸に流れて剛健の風を失ひ、國民精神は漸く廢頽した。爾來、ローマの邊境は多事となり、アジヤに於ける領土もやがて失ふに至り、内には又軍隊の跋扈によつて内亂を生じ、次第に衰運に向つた。

**帝國の分治と帝都の東遷**　その後、ディオクレチヤヌス（Diocletianus）帝の立つに及び、一人にて全帝國を統治することの難きことを察し、別に三人の皇帝を立てて帝國を分治せしめ、己はニコメディヤ（Nicomedia）（小アジヤ）に都してこれを總管した。帝は大に尊嚴を裝ひ、儀式を重くし、從來の共和政の形式を廢して、これを純然たる專制君主政に改めた。

コンスタンチヌス（三三七歿）

帝國の統一（三二三）

次いで、コンスタンチヌス（Constantinus）大帝は他の諸皇帝を仆して、全帝國を統一し、都をビザンチウム（Byzantium）に遷して、これをコンスタンチノープル（Constantinople）と改め、中興の治を成した。帝は又キリスト教を信仰した最初のローマ皇帝であつた。

テオドシウス（三九五歿）

ローマ帝國の東西分裂（三九五）

西帝國の滅亡（四七六）

東帝國の滅亡（一四五三）

ローマ文化の特質

コンスタンチヌス

**帝國の兩分**　コンスタンチヌス大帝の死後、國内は又亂れて、テオドシウス（Theodosius）帝が一旦これを統一したが、帝は内外の形勢を察し、歿するに臨み、遺命して帝國を兩分し、東部を長子に、西部を次子に分治せしめた。その後、ローマ帝國は永く東西に分裂するに至つた。

後に、西ローマ帝國は、五世紀の末にゲルマニヤ人（Germans）に滅され、東ローマ帝國は、十五世紀の半頃にトルコ人（Turks）に滅された。

## 第六章　ローマの文化とキリスト教

**ローマの文化**　ローマの文化は、ギリシヤ文化を受け繼いだが、秩序を守り、實際を重んずるその民族性は、よく政治・軍事・法律の如き實踐的方面に特長を發揮して、著しい發達を遂げた。殊にその法律は西洋法學の軌範となつた。

土木・建築

實用を尚ぶ風は土木・建築の上にも現はれ、豪壯な宮殿・圓形劇場（コロセウム Colosseum）・凱旋門・浴場・水道等、今になほその遺趾を存して、人目を驚かしめてゐる。

農・工・商業

又、ローマ人は元來農業國民であつたが、國力の發展に伴つて商工業も次第に發達し、ギルド（同業組合 Guild）の組織をも見るに至つた。穀物はエジプト・アフリカ北岸及びシシリー島（Sicily）より、金銀銅鐵はイスパニヤ（西班牙 Spain）より盛に輸入されて、種々の奢侈品が、ローマ市を始めその他の都市に於て製造された。

文學

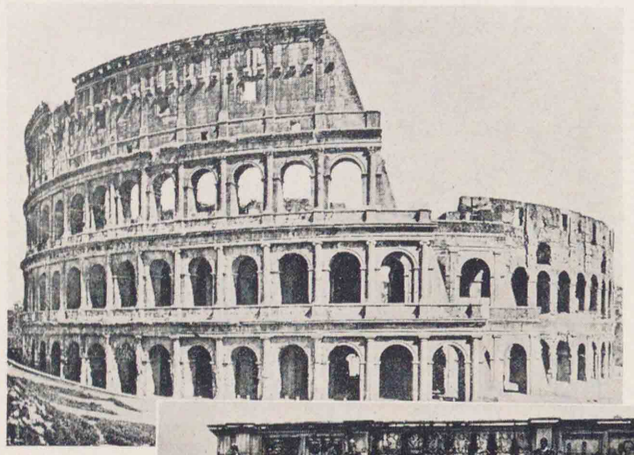
文學はアウグスツス時代に隆盛を極め、詩人にはヴァージル（Virgil）・ホラチウス（Horatius）、史學にはリヴィウス（Livius）、哲學にはセネカ（Seneca）等があつて、いづれも盛名を博した。

ヴァージル（前一九歿）
ホラチウス（前八歿）
リヴィウス（一七歿）
セネカ（六五歿）

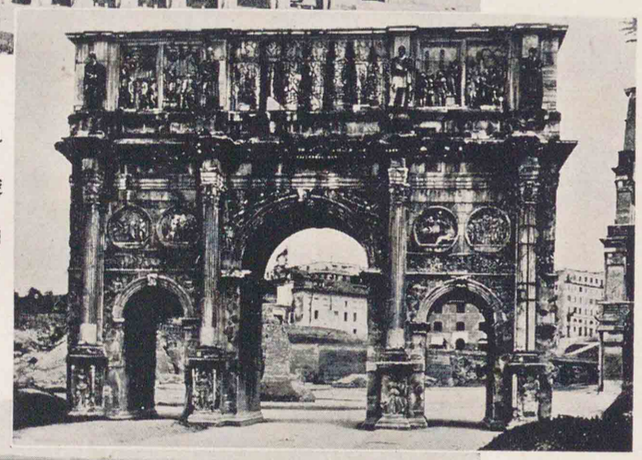
**キリスト教**

キリスト教の教祖イエス・キリストは、アウグスツスの代に、ユダヤ（Judaea）のイェルサレム附近に生れ、自ら神の子と稱し、ユダヤ教を改革して平等・博愛の教を開いたが、ユダヤ教徒に讒せられて遂に磔刑に處せられた。然るにその高弟等は各地に布教を努め、これをロ

キリスト教
イエス・キリスト（三〇頃歿）



圓形演技場



凱旋門

橋梁及び水道の遺跡

コロセウム

西暦七五年ヴェスパシヤヌス帝の代に起工し、八〇年チツス帝の代に竣工したローマの大演技場である。楕圓形四階造で、長徑約百八十五米、短徑約百五十米、高さ約四十五米で、觀客五萬人を收容し得たといふ。

凱旋門

紀元三一二年頃コンスタンチン大帝によつて建設された最も大規模な凱旋門で、羅馬凱旋門中の代表的のものである。表面の柱は壁より離れて立ち、柱の上の突出した所に立像が乘つてゐる。そのために建物の上部の額の部は、自ら横に三つに分たれ、中央に銘板があつて、その兩側に記念の意味を寓した高肉彫の彫刻がしてある。全体として非常に賑やかに配置してあるが、大きさの比例の取方は頗る優れてゐて、羅馬人の建築技倆の凡常でなかつたことを示してゐる。

水道架橋の遺址

フランスの東南、ニームの東北ガール河に架して、水道と橋梁とを兼ねたもので、水道はニーム市に給水するためであつた。アウグスツス帝の代に造られて、高さ約四十一米、長さ約二百七十米、三段のアーチ造より成つてゐる。

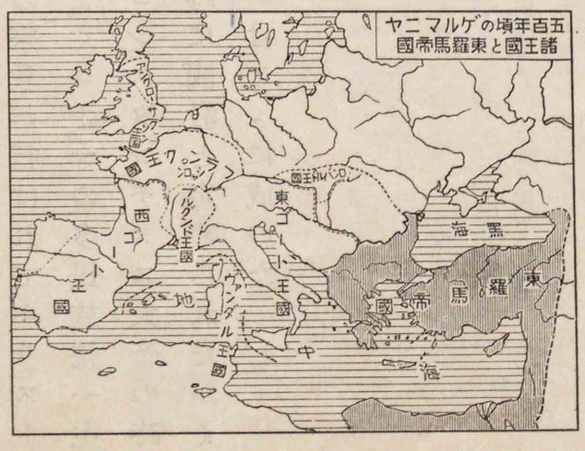
ーマに傳へた。當時ローマ國内には多數の宗教が行はれて、キリスト教は甚しく迫害されたが、その說く所がよくローマの多民族統一主義に適し、歸依者が益〻加はつたので、遂にコンスタンチヌス大帝の時に公認され、次いでテオドシウス大帝の時に、國教と定められた。かくてローマの政治的統一と共に宗教的統一はこゝに成つた。

# 第二篇　民族の大移動と中世のヨーロッパ

## 第一章　ゲルマニヤ民族の大移動

ゲルマニヤ民族の諸部落

**ゲルマニヤ民族**　ゲルマニヤ民族(Germans)はチュートン民族(Teutons)とも稱せられて、アーリヤ民族に屬し、夙くよりローマの北に住み、屢〻その邊境を騷がした蠻族であつて、ゴート(Goths)・フランク(Franks)・サクス(Saxons)・ロンバルド(Lombardians)・ブルグンド(Burgundians)・ヴァンダル(Vandals)以下の數十部族に分れ、勇敢にして戰を好み、農牧・漁獵を營んで、森林沼澤の間に散居してゐた。ローマは長城を築いてその侵寇を防いでゐたが、時を經るに從つて、中にはローマに歸服してその傭兵となるものもあつた。




ゲルマニヤ民族の大移動

フン族歐洲に侵入（三七五）

西ローマの滅亡（四七六）

ゲルマニヤ民族の諸王國

ユスチニヤヌス大帝（五六五歿）

**ゲルマニヤ民族の移動と建國**　ローマ帝國の衰へた頃、先に漢に逐はれて次第に西進したフン族(匈奴)(Huns)が黑海(Black Sea)の北に現はれるや、ゲルマニヤ民族は彼等に壓迫されて續々故地を離れ、ローマ帝國内に進入した。當時ローマ帝國は東西に分れてゐたが、西ローマ帝國は遂にゲルマニヤ民族のために滅された。かくてゲルマニヤ民族はなほも移動を續けたが、五世紀の終までに彼等の建てた主なる國々は、(一)イスパニヤの西ゴート王國(Visigoth)、(二)ローヌ河(Rhone)上のブルグンド王國(Burgund)、(三)ガリヤのフランク王國(Frank)、(四)ドナウ左岸のロンバルド王國、(五)イタリヤの東ゴート(Ostrogoth)王國、(六)北アフリカのヴァンダル王國(Vandal)、(七)イングランド(England)のアングロ-サクソン(Anglo-Saxon)王國などであつた。

**東ローマ帝國の盛衰**　東ローマ帝國は幸にゲルマニヤ民族の侵略を免れたが、内憂外患に煩はされて、勢が甚だ振はなかつた。然るに、ユスチニヤヌス(Justinianus)大帝が出でるに及んで、内は宗教の紛爭を鎭め、セントーソフィヤ(St. Sofia)大寺院を建て、ローマ法典を編み、養蠶業を支那より傳へる

ローマとペルシヤとの交戰

マホメット（六三二歿）

イスラム教

など、大に治績を擧げ、又、外は西ローマの舊領回復のために、將を遣はしてヴァンダル・東ゴートの二王國を滅し、西ゴート王國を侵して領土を擴め、一時舊ローマ帝國再興の觀があつたが、當時東にペルシヤ（ササン朝）があつて外患をなし、帝の歿後も多年これと抗爭したので、兩國は共に疲弊した。この時サラセン國が新にアラビヤ（Arabia）に興つた。

## 第二章　サラセンの勃興

**マホメット**　サラセン（Saracen）はもとアラビヤの住民で、遊牧や隊商を業とし、偶像を信じてゐたが、七世紀の初に、偉人マホメット（Mahomet）が出て、自ら豫言者と稱し、イスラム教（Islam）（支那では回教といふ。）と稱する一神教を開き、武力を以てこ

ギリシヤの僧侶竹杖内に靈種を祕して支那より歸國す





下位の文字はイスラム教經典の一部である。

ヘジラ（六二二）

サラセンの東西侵略

カリフ

れを弘め、アラビヤ全半島を征服した。これをサラセン國といふ。

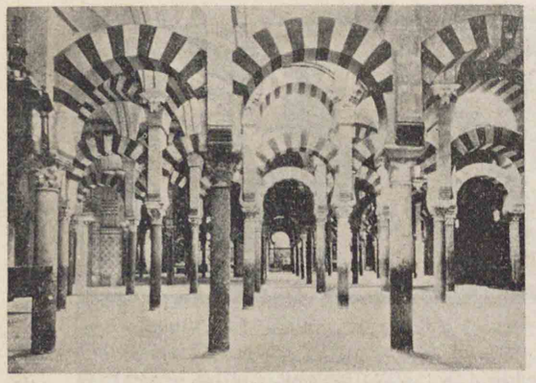
**マホメット**　マホメットは五七一年アラビヤのメッカ（Mecca）市に生れた。夙に隊商に加はつて四方に行商し、四十歳の頃發心してイスラム教を開いたが、國人の迫害を蒙つて、六二二年難をメヂナ（Medina）に避けた。イスラム教徒はこれをヘジラ（Hegira）と名づけて、紀元の歳としてゐる。マホメットは後にメヂナを出で、教のために戰死するものは天國に生れ、永久の幸福を受けると說いて、その教徒を激勵し、武力を以てメッカを取り、遂に全半島を征服した。

天使マホメットに現はる

**サラセン國の强大**　マホメットの繼承者をカリフ（Caliph）といひ、政教の主權を掌握した。歷代のカリフは盛に外國を侵略して、マホメットの歿後百年にも足らぬ間に、東はペルシヤを滅し

て印度に及び、又、唐と境を接し、西はエジプト及びアフリカの北岸を經てイスパニヤに入り、西ゴート王國を滅して、東西よりキリスト教國を脅かしたが、東はコンスタンチノープルの堅塞に阻められ、西はフランク王國の宮宰チャールス・マルテル Charles Martel に破られて、その壯圖は挫折した。

西ゴート王國の滅亡（七一一）

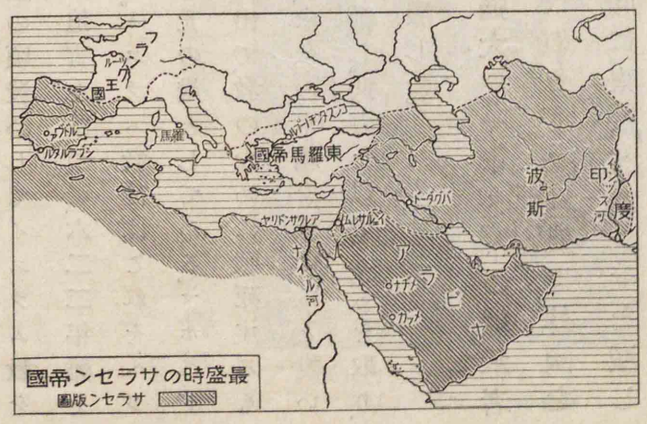


コルドヴァの回教寺院の内部

やがてサラセン國は東・西に分裂し、東はバグダード Bagdad に、西はコルドヴァ Cordova に都した。

サラセンの分裂（七五六）
東サラセンの滅亡（一二五八）
西サラセンの滅亡（一四九二）

**サラセンの文化**　東・西サラセンには名君が輩出し、競うてギリシヤの學術を奬勵したために、地理學・數學・天文學・醫學・博物學等の諸科學が大に進歩した。又、航海・通商の業も振興して、サラセンの商船は、地中海・カスピ海・印度洋より遠く支那海にまで往來して、廣く貿易を行つた。建築・彫刻等の發達も亦著しく、その寺院の如きは、殊に壯麗の美を極めた。




かくサラセンの文化は、その分裂後、九・十世紀に亙つて燦然たる光を放つたが、これに反して、當時の西ヨーロッパ諸國はゲルマニヤ民族に蹂躙されて、ギリシヤ・ローマの文化は荒廢し、いはゆる暗黑世界と化した。

西ヨーロッパの二大勢力

## 第三章　ローマ法皇と神聖ローマ皇帝

**西ヨーロッパの二大勢力**　ゲルマニヤ民族が西ローマの故地に國を建てるに及んで、西ヨーロッパに二大勢力が勃興した。一はローマ法皇であり、他は神聖ローマ皇帝である。

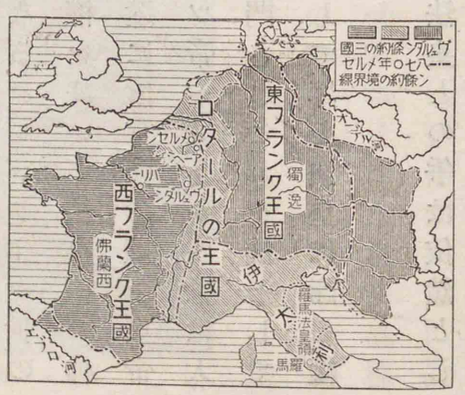
偶像禁止令（七二六）
法皇領の創始（七五五）
東西教會の分離（一〇五四）
フランクの建國（四八一）
チャールス・マルテル ピピンの簒位（七五一）

**ローマ法皇**　キリスト教の發展に伴つて、五つの大本山（ローマ・コンスタンチノープル・アンチオキヤ・イエルサレム・アレクサンドリヤ）が出來たが、その一なるローマの大僧正は、五・六世紀の頃法皇と尊稱されるに至つた。八世紀の初め、東ローマ帝レオ三世（Leo）が布教の方便たる偶像禮拜を禁止した時、法皇はこれに從はず、フランク國王の後援を賴んで獨立し、同國王より領地を受けて一國の主となつた。その領地を法皇領といふ。

チャールス大帝とその戴冠式

かくてローマ教會とギリシヤ教會とは、その後遂に東・西に分離するに至つた。

**フランク王國**　ゲルマニヤ諸王國の中、最も強大となつたものはフランク王國である。サラセンがイスパニヤより北進した時、これを挫いたのはその宮宰チャールス・マルテル（Charles Martel）であつた。その子ピピン（Pipin）は法皇の承認を得てフランクの王位を簒ひ、法皇に酬ゆるに領地の献納を以てした。ピピンの子チャールス大帝（Charles The Great）は、英邁にして武略に富み、大に領土を擴張して西ヨーロッパを統一し、西ローマ滅後の大王國を築いた。こゝに於て法皇は、チャールスに授くるにローマ皇帝の帝冠を以てし、西ローマ帝國を復興した。帝は深く意を内政に用ひ、學校・寺院を建て、產業を奬勵するなど、大に治績を擧げたので、西ヨーロッパの暗黑世界には再び文明の光が輝いた。帝の歿後、その三孫（ロタール・ルイ・チャールス）の代に至り、帝國は遂に三分されて、後のドイツ（獨逸）（Germany）・イタリヤ・フランス（佛蘭西）（France）の三王國となつた。




西ローマ帝國の復興（八〇〇）
帝國の三分 ヴェルダン條約（八四三）メルゼン條約（八七〇）
オットー大帝（九七三歿）

オットー大帝の璽

**神聖ローマ皇帝**　その後、十世紀の初め、ドイツに於ては、オットー大帝（Otto the Great）が王位に卽き、外は蠻族を破

神聖ローマ帝國の創建（九六二）

り、内は諸侯を壓し、進んでイタリヤを征してその王位を兼ね、更に法皇を援けてその敵を降し、法皇より神聖ローマ皇帝の冠を授けられた。これよりドイツ王は法皇の戴冠によつて皇帝となるを常例とし、十九世紀の初にまで及んだ。

グレゴリー七世（一〇八五歿）

**皇帝と法皇との衝突**　初め皇帝と法皇との間は親密であつたが、後に次第に不和となり、豪邁なるグレゴリー七世の法皇となるや、帝權を凌いで法皇權の伸張を圖らんとし、遂に僧官任命權を皇帝より奪つた。ドイツ帝ヘンリー四世は大に怒つて、法皇を廢したが、却つて法皇より破門され、これを機として帝に反する諸侯が多かつたので、帝は遂に窮して、罪を法皇に謝し、纔にその破門を許された。

グレゴリー七世

ヘンリー二世（一一〇六歿）

**帝權の衰微、法皇權の强盛**　その後、皇帝と法皇との爭は依然とし



て解けず、皇帝黨と法皇黨とが對立して抗爭を續け、帝權は次第に衰へて、ドイツには帝王のなき大空位時代を生ずるに至つたが、法皇權は益〻その勢力を加へ、法皇インノセント三世（Innocent）の時には、權威殆ど全ヨーロッパを壓して、各國君主はその頤使（イシ）に甘んずることとなり、世は宗教萬能の觀を呈した。

大空位時代（一二五四―一二七三）

インノセント三世（一二一六歿）

## 第四章　十字軍

**十字軍の原因**　西ヨーロッパの國民が法皇權の下に宗教心に燃え、又、封建制度の發達によつて武力を養つてゐた時、會〻西アジヤのイスラム教徒と戰を開くに至つた。これを十字軍（Crusade）といふ。當時、西アジヤに勃興したセルヂュック-トルコ（Seljuk-Turks）人がイエルサレム（キリストの墓の所在地）を占領して、これ

十字軍（一〇九六―一二七二）

セルヂュック-トルコ人の勃興

ペートルの熱辯を揮つて聖地回復を唱ふ

ウルバン二世（一〇九九歿）クレルモンの大集會（一〇九五）

第一回十字軍（一〇九六）

十字軍の出發

に詣でる西ヨーロッパのキリスト教徒を虐待したので、法皇ウルバン二世はこれを憤り、クレルモン（フランス）に大集會を開いて聖地の回復を說き、翌年イスラム教徒征討のために第一回十字軍を發した。

**クレルモン大集會**　法皇は親しくクレルモンの大會議に臨み、トルコの征伐、聖地の回復を力說し、出征將士は罪障の消滅を得、その家族・財產は教會によつて保護せらるべきことを宣言した。會衆は感激して「これ神意なり」と絕叫し、爭つて軍に加はらんことを願ひ、肩上に赤十字の徽章を附け、勇躍して出發した。十字軍の稱はこれに起つた。

十字軍の名稱

イェルサレムの回復（一〇九九）

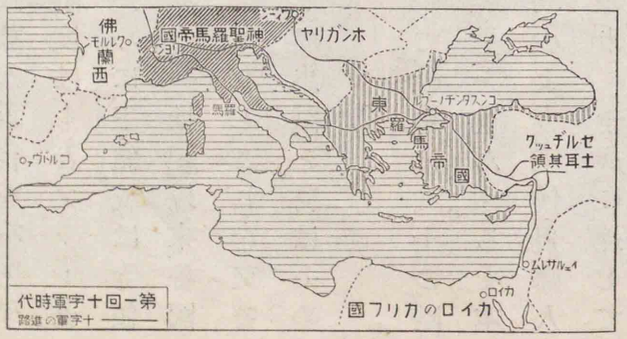
イェルサレム王國の滅亡（一一八七）

**十字軍の經過**　第一回十字軍はゴドフリー（フランスの諸侯。）を主將とし、大軍を進めて聖地に向ひ、これを占領してこゝにイェルサレム王國を建てた。然るに幾くもなくしてトルコ人に迫られ、王國も遂に滅されたので、更に數回十字軍を起してその回復に努めたが、遂に失敗に終つた。

十字軍の失敗

十字軍の影響

**十字軍の結果**　十字軍は前後凡そ二百年に亙つて多大の犧牲を拂ひ、遂にその目的を達し得られなかつたが、その西ヨーロッパ諸國に及ぼした影響は、各方面に亙つて甚大であつた。出征の當初こそ、法皇權の伸張を促し、宗教的武士團も生れ、英氣天を衝く勢であつたが、遂に失敗に歸するに至つて、法皇の威信は失墜し、諸侯は征戰の間に多く滅びて、封建制度の衰頽を招いた。これに反して、軍隊の輸送と東方貿易とによつて巨利を得たイタリヤの諸市は、俄に隆運に向ひ、東方諸國の見聞によつて人智は啓發され、アラビヤ（Arabia）の學術が輸入されて、西ヨーロッパの文藝復興に大なる助をなした。



## 第五章　封建制度と都市の勃興

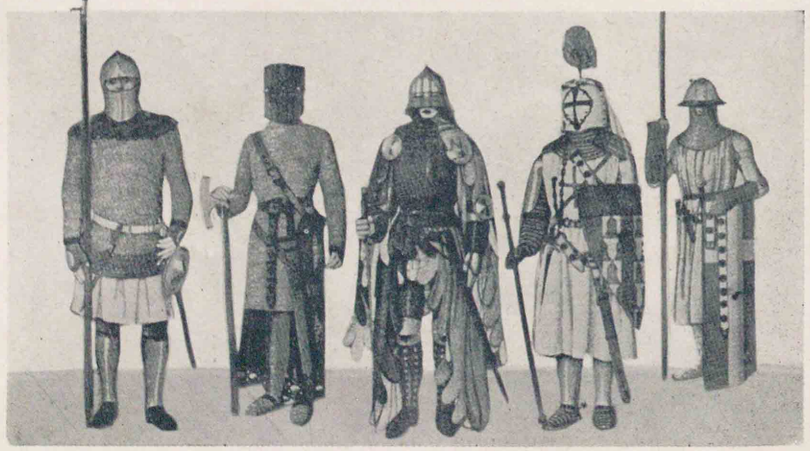
**封建制度**　西ローマを蹂躙したゲルマニヤ民族が、攻伐を事とするに至つて、その間に封建制度（Feudal System）は發達した。封建制度は、もとフランクのチャールス・マルテルがサラセンの侵寇を防ぐために、王領或は寺領を割いて、その部下に與へたのに基因するもので、十一世紀以來、各國とも皆この制度に則り、諸侯は國王の下に封土（Feud）を領有し、これを又その部下に分與して主從の關係を結び、主君に對して忠誠を誓はしめた。

封建制度の起原

**武士と武士道の發達**　封建制度の發達に伴つて、社會に武士（Knight）の階級が生じ、武士は敬神盡忠を旨とし、婦人を敬ひ、義勇を重んずるを本務とした。これを武士道といふ。武士となるには、幼少より王侯・貴婦人に仕へて禮節を習ひ、次に武士に從つて武藝を練り、二十歳に達して始めて嚴肅なる儀式を擧げ、武士道を遵奉すべきことを宣誓して、武

武士道の發達

中古の城塞



中古の武裝

### 中古の城塞

都市全體を包む城壁として巨大なものは、東歐コンスタンチノープルのそれであらう。コンスタンチノープルが中世に於てよく東方民族の來攻を防禦することができたのは、この堅塞の爲めだといはれてゐる。又武士の城郭と市の圍壁とを兼ね備へた例としては、南獨のニュルンベルヒ市、南佛のカルカッソンヌ市の如きが代表的であらう。特にこゝに掲げたカルカッソンヌは中世城郭の遺蹟として最も著名なものである。中世の城郭が半ば破壞したまゝになつてゐたのを、十九世紀後半に時の皇帝ナポレオン三世の命に依り、全部に亙つて復舊工事が施されたもので、今日に於ては城樓、城壁層々として相重りながら、第十三世紀頃の面目を完全に傳へてゐる。この地方に「カルカッソンヌを見ずに死んではならぬ」といふ諺がある。

### 中古の武裝

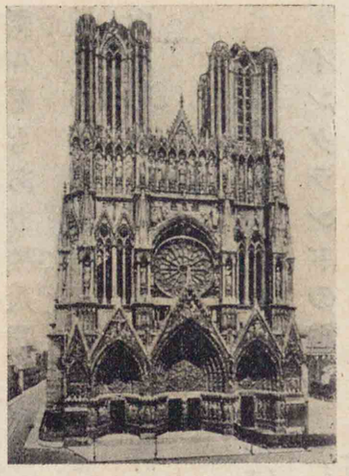
中古騎士の發達につれて武具も大いに發達し、それが單に戰場に於て重要視されたのみでなく、君主、貴人の面前で行はれる闘武會の際にも用ひられた爲めに、實用と同時に一つの裝飾ともなつた。圖に示す右端は佛國に於けるフィリッポ・ヴァロアの時代の騎士の風俗、その左は十三四世紀に於けるフランス騎士の服裝でルイ九世より百年戰役前に至る間のもの、その左は十二世紀のパリ民兵隊長、次は十二世紀末第三十字軍に從軍せるフランスの騎士、左端は英國ジョン王時代の歩兵の服裝である。

教會の勢力

十三世紀起工のゴヂック式

修道院

都市の發達



レンスの大寺院

士の列に加はるのであつた。

**教會の勢力**　封建制度が劍の力によつて社會の秩序を維持した時、キリスト教は愛の力を以て社會の人心を教化した。當時の人民はキリスト教に歸依することが殊に篤かつたから、教會の勢力は社會各般の事物に及び、從つて淨財の寄進も盛であつたので、壯大な寺院が各地に建設された。この頃又、勤行修學のために各地に修道院が建てられ、修道僧は勞働によつて生活し、操守を嚴にして困苦缺乏に堪へる範を示したので、一般社會も勞働を人生の修練として重視するやうになつた。

**都市の勃興**　當時の農民は、大小諸侯及び武士に虐使されて社會の下層に沈み、都市も亦その領主の重稅に苦しめられてゐたが、農民が舊態依然たる間に、都市は十字軍のために商業の繁盛を來して富

自由市の發生

ハンザ同盟

ギルド

裕となり、君侯に献金して自治權を得、又、中には傭兵の力を借りて獨立するものもあつて、自由市の發生を見るに至つた。

イタリヤのヴェニス(Venice)・ジェノア(Genoa)・フロレンス(Florence)等はその最たるもので、漸次諸國の都市も繁榮を來したが、後にはその自衛上互に同盟を結び、武士の横暴に備へるに至り、中にもドイツのハンザ(Hansa)同盟の如きは、八十有餘の都市より成つて、宛も一國の如く、その勢力は王侯を凌ぐものがあつた。

**ギルド**　都市の發達に伴つて、ギルド(Guild)(同業組合)の制度が起り、商人間のギルド(Merchant Guild)もあり、職人間のギルド(Craft Guild)もあつた。ギルドは商品の信用を保ち、價格の動揺を防ぐために、その數量と品質とに一定の制限を設け、自由に製造販賣することを許さなかつた。

## 第六章　中央集權の風潮

### イングランドの發達

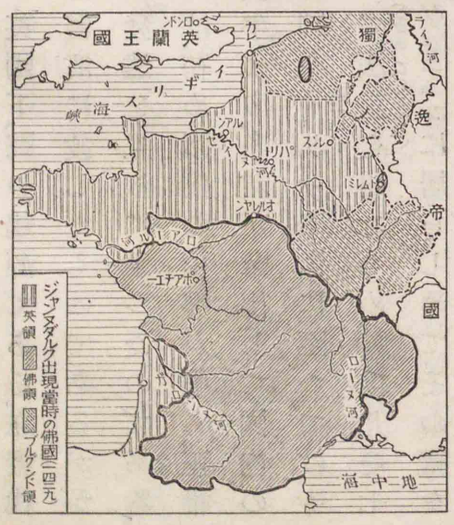
アングロ-サクソン(Anglo-Saxon)族の建てたイングランド(England)は、一時海洋を横行したノルマンに征服され、後にこれを驅逐したが、フランス(France)のノルマンヂー(Normandy)公ウィリヤム(William)が又來つてこれを征服した。これを「ノルマンの征服」(Norman Conquest)といふ。然るに、その王統が絶えるに及んで、親族たるヘンリー二世(Henry)がフランスより入つて王位に卽いた。王はフランスにも廣大な領土を有して、頗る權勢があつたが、その子ジョン(John)王は暗愚で失政が多く、外はフランスの領地を奪はれ、内は民心の離反を招いたので、貴族・僧侶等は王に迫つて大憲章(Magna Charta)を發布せしめて、臣民の生命・財産を安固ならしめた。これが後の英國憲法の基礎をなすものである。然るに次王ヘンリー三世の時、王が大憲章を無視して暴政を行つたので、貴族・僧侶等は更に州市の代表者と共に議會(Parliament)を開かしめて、國王

ノルマンの征服（一〇六六）

ヘンリー二世（一一五四卽位―一一八九歿）

大憲章の發布（一二一五）

議會開設（一二六五）



國會召集（一三〇二）
アヴィニョンの法皇廳（一三〇九―一三七六）
百年戰役（一三三九―一四五三）

の專横を制することとなつた。これが英國下院の起源である。立憲代議制度はもと源をゲルマニヤ民族の習慣に發したものであるが、かくしてイングランド人によつてその發達を見るに至つたのである。

**フランス王權の伸張**　フランスでは、初め諸侯の權勢が強く、王權は甚だ振はなかつたが、十二世紀の後半より、名君が輩出して國内のイングランド領を奪ひ、諸侯の跋扈を制し、フィリップ四世（Philip）に至つては、寺領に課税して法皇と爭ひ、國會（États Généraux (States General)）を開いて法皇を屈せしめ、爾後凡そ七十年間、フランス僧を法皇に擁立し、アヴィニョン（Avignon）に居らしめてその權を抑へた。

**百年戰役**　その後、フィリップ四世の姪、フィリップ六世が王位に卽くや、イングランド王エドワード三世（Edward）は、フィリップ四世の外孫であるとの故を以てフランスの王位を要求し、兵を率ゐてフランスに侵入した。こゝに所謂百年戰役が起つた。この役に於て、フランス軍は屢〻利を失ひ、一時國家の存立も危かつたが、一少女ジャンヌ・ダルク（Jeanne Darc）が救國の神命を受

ジャンヌ・ダルク（一四三一歿）
西ヨーロッパ諸國の中央集權

けたと信じ、フランス軍を指揮してオルレヤン（Orleans）の圍を解いたので、危機は漸く去り、その後士氣が盛になつて、遂に敵兵を國外に驅逐するに至つた。

ジャンヌ・ダルクオルレヤンの圍を解く

**ジャンヌ・ダルク**　ジャンヌ・ダルクは幼少より宗教心に篤く、十八歳の時、祖國の難を聞いて、一日神より救國の使命を受けたと信じ、父母の許を得てシノン（Chinon）の大本營に赴き、國王チャールス（Charles）七世に謁して一隊の兵を借り、雄雄しくも男裝して白馬に跨り、自ら陣頭に進んでオルレヤン城の圍を解き、敵軍を驅逐してチャールス王の戴冠式をレンス（Reims）に於て擧行し、大に國民を歡呼せしめた。その後武運拙く、年僅に二十歳で英軍に捕はれて焚殺されたが、その偉勳は永く後世に稱へられた。

**西ヨーロッパ諸國の中央集權**　百年戰役の後、イングランドには内

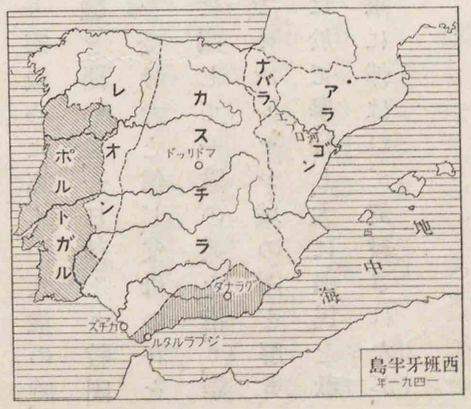
薔薇戰役（一四五五―一四八五）

イスパニヤ王國の建設（一四七九）

ハプスブルグ家の帝位世襲の始（一四三八）

亂によつて三十餘年に亙る薔薇戰役（War of Roses）があり、諸侯は次第に仆れて王權が益〻强大となつた。フランスに於ても、亦百年戰役のために、諸侯の疲弊が甚しく、戰後王權は著しく伸張して、十五世紀末には、兩國共に中央集權の實が大に擧つた。又、イスパニヤでは、カスチラ（Castile）・アラゴン（Aragon）の二王國が合併してイスパニヤ王國（Spain）となり、諸侯を服し、サラセンを逐うて、國内が統一された。これに反して、ドイツでは、大空位時代後、帝政に復したが、諸侯の權力が强く、オーストリヤ（Austria）（墺地利）のハプスブルグ家（Hapsburg）が帝位を世襲するに至つても、帝權は容易に伸びず、中央集權は行はれなかつた。

ハプスブルグ家の祖ルドルフ一世




オスマン・トルコの建國（一二八八）

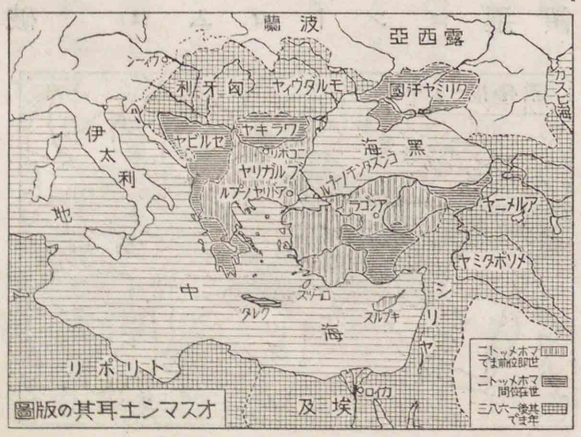
バヂャシッド一世（一四〇二歿）

チムール（一四〇五歿）

# 第七章　蒙古人及びトルコ人の侵入

## トルコの建國

十三世紀の中頃、蒙古軍は大擧してロシヤ（露西亞）（Russia）を侵し、ドイツの國境に入り、西ヨーロッパ人を戰慄せしめたが、その時カスピ海の東に住んだオスマン・トルコ人（Osman-Turks）は、蒙古軍に逐はれて小アジヤに移り、十三世紀の末に、酋長オスマンかこゝに一王國を建てた。これが今のトルコの始である。その後、次第に東ローマ領を蠶食し、バヂャシッド（Badjasid）一世の時には、既にバルカン半島（Balkan）の大部分を取り、コンスタンチノープルに迫つた。この頃中央アジヤにチムール（帖木兒）（Timur）が出でて大帝國を建てたが、東ローマ皇帝はこれに援を求めたので、チムールは大兵を發してバ



アンゴラの戰（一四〇二）

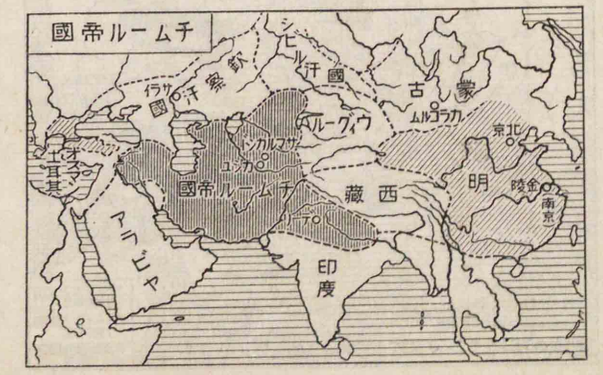
マホメット二世（一四八一歿）

コンスタンチノープル占領の記念牌

東ローマ帝國の滅亡（一四五三）

ギャシッド一世とアンゴラに戰ひ、大にこれを破つた。

**東ローマ帝國の滅亡**　これがために、東ローマ帝國は一時トルコの難を免れたが、チムールの死後、トルコは再び勢を回復して東ローマ帝國を侵し、マホメット二世の時、遂にコンスタンチノープルを陷れて東ローマを滅し、都をこゝに遷した。その後、トルコは益〻領土を擴張して、アジヤ・ヨーロッパ・アフリカに跨る大國となつた。




# 第三篇　新機運の世界と近代諸國家の發達

## 第一章　文藝復興と諸種の發明

文藝の復興

ダンテ（一三二一歿）
ペトラルカ（一三七四歿）
ボッカチオ（一三七五歿）

**文藝の復興**　先に、チャールス大帝が學藝を奬勵してより、西ヨーロッパの暗黑世界にも漸く文藝復興（Renaissance）の兆が現はれ、次いでサラセンの學術が輸入されて、人智も次第に啓發されたが、十字軍の結果、イタリヤの都市が繁榮し、東ローマよりギリシヤの學者等がトルコ人の難を避けて逃れ來たので、文藝の復興は先づイタリヤに起つた。

ダンテ

**古學の復興**　イタリヤのダンテ・ペトラルカ（Dante Petrarcha）・ボッカチオ（Boccacio）はギリシヤ・ローマの古學研究の先驅をなしたもので、これより古學の復興は愈〻盛となり、人心は漸く宗教の束縛を脫して自由討究の風に向ひ、眞理を究めんとする科學思想の發達を見るに至つた。この學風は、やがてフランス・ドイツ・イングランドの諸國にも

ミケランジェロ（一五六四歿）
ラファエル（一五二〇歿）
ブラマンテ（一五一四歿）

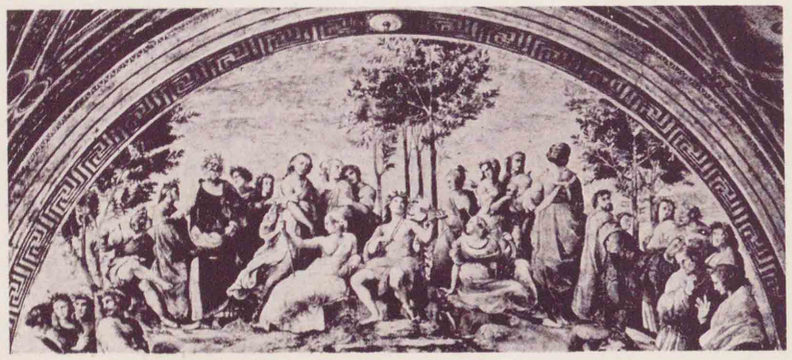
磁石
火藥
活版術

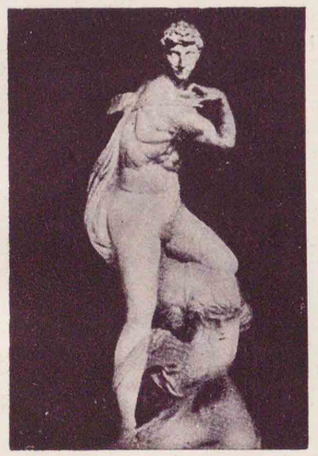
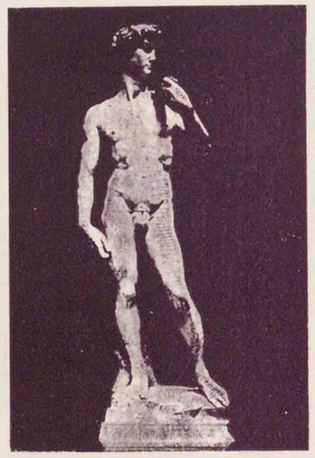
ラファエル

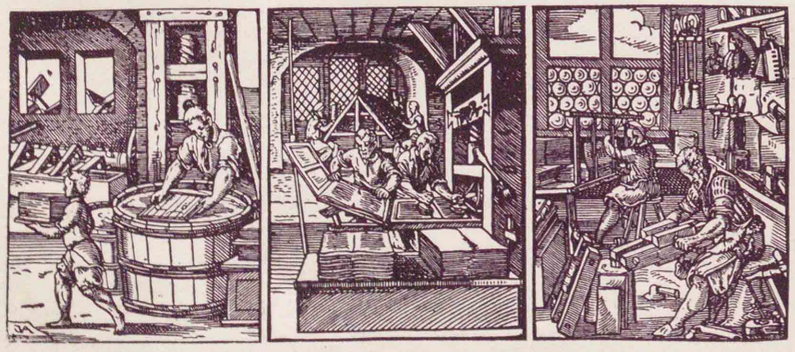
傳はり、近世の學術振興の基を開いた。

**美術の復興**　古學の復興と共に、美術も大に興隆し、イタリヤのミケランジェロ（Michelangelo）（繪畫彫刻）・ラファエル（Raphael）（繪畫）・ブラマンテ（Bramante）（建築）等は、古今の大美術家として、いづれも不朽の傑作を後世に遺した。

**諸種の發明**　文藝の復興と前後して諸種の發明が起り、社會の面目を一新した。中にも活版術・磁石・火藥は中世の三大發明と稱せられた。磁石と火藥とは支那より傳はつたものともいはれるが、西洋では、磁石は十四世紀の初頃フラヴィヨ・ジョーヤ（Flavio Gioja）（イタリヤ人）の發明とされ、火藥は十四世紀の中頃ベルトルド・シュワルツ（Berthold Schwartz）（ドイツ人）の發明とされてゐる。又、活版術は十五世紀の中頃グーテンベルヒ（Gutenberg）（ドイツ人）の發明したものである。火藥の使用は戰術に一大變化を與へて、封建制度の崩壞を促し、磁石の應用は遠洋航海を容易ならしめて、遂に地理上の大發見となつた。


ラファエル筆



ミケロ・アンジェロ作


初期の活版印刷術

ラファエル筆

ラファエルが法王ユリアス二世の命によつてヴァチカン宮に描いた壁畫の一である。この壁面は窓口である爲めに、その形狀を利用して山上を表し、多くの人物を配して調和の美を示し、數本の樹木の間から、南歐らしい明い空を大きく窺はせてゐるのである。

ミケローアンジェロ作

ミケローアンジェロはラファエルと同じく文藝復興期に於ける天才的巨匠の一人であるが、殊に彫刻に於て多くの傑作を遺してゐる。右のダヴィッド像は彼の壯年期の作で、青春の元氣に溢れた若者の力をよく表現し、觀る者をしてその石像であるかを疑はしむる程である。又左の勝利の像はロマンローランの傳記本に開卷第一の口實を寄與した程の傑作である。

初期の活版印刷術

西洋では十三世紀まで書籍の發行は凡て書寫によつてゐたが、マルコーポーロがその旅行記に東洋の印刷術を說明してから、これに刺激されて西洋に於ても漸くその技術が研究されるやうになり、一四五〇年グーテンベルヒが初めてラテン文法書を印刷した。併し印刷術は宗教の束縛を受けた爲めに一般に流布しなかつたが、後にこれも自由になつて急速の進歩を見るに至つた。

新航路・新大陸の發見

バーソロミュー！ディアズ喜望峰に達す（一四八六）

ヴァスコーダ・ガマ印度航路を發見す（一四九八）

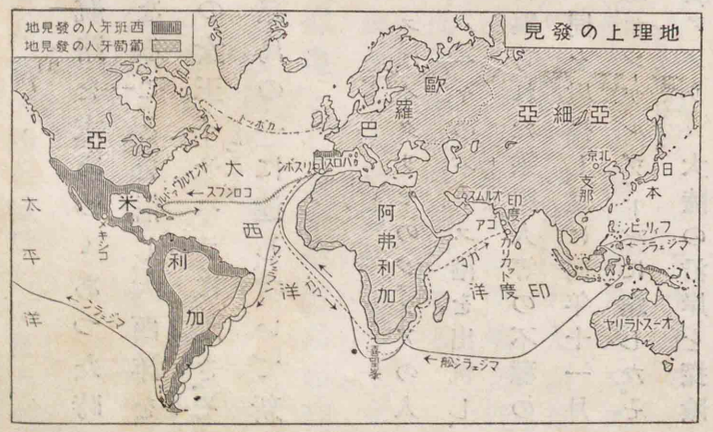
# 第二章　地理上の發見

## 發見の由來

十字軍の結果、サラセン人の東洋に關する知識が西ヨーロッパに傳はり、次いでマルコーポーロ（Marco-Polo）の東洋見聞錄が世に出でるに及んで、西ヨーロッパ人は大に商利を東洋に求めんとする念を起したが、トルコ人が通路を塞いだので、海路によつてその目的を達せんと欲し、遂に新航路・新大陸を發見するに至つた。

## 新航路の發見

十五世紀の初め、ポルトガル（Portugal）（葡萄牙）の王子ヘンリーは、盛に航海を奬勵し、屢〻アフリカの西岸を探檢せしめたが、王子の死後に至り、バートロミューディアズ（Bartholomew Diaz）は遂にアフリカの南端、喜望峰に達し、次いでヴァスコーダ・ガマ（Vasco da Gama）はこれを廻つて、始めて印度に

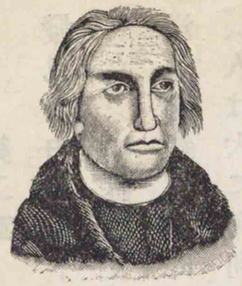

地理上の發見
西班牙人の發見
葡萄牙人の發見
歐羅巴
亞細亞
亞米利加
大西洋
太平洋
印度洋
阿弗利加
日本
支那
印度
ヤリラスーオ
ジャワ
ボルネオ
ニューギニヤ
ケープタウン
喜望峰
ロンドン
ポスリ
ロスボン
ケルンツ
ブルンツ
スフンロコ
ブラジル
ブラジル
ブラジル

通ずる新航路を發見した。

**新大陸の發見**　ポルトガル人が東方に航路を求めつゝあつた時に、イタリヤの人コロンブス(Columbus)は、地球の球形なることを信じ、大西洋を西航して印度に達せんと欲し、イスパニヤの女王イサベラ(Isabella)に說き、その贊助を得て西航の途に上り、遂に西印度諸島の一に達し、次いで新大陸を發見した。

コロンブス、アメリカを發見す（一四九二）

**コロンブスとアメリゴ・ヴェスプッチ**　コロンブスはイタリヤのジェノアの人で、一四九二年八月三日、三隻の舟を率ゐてイスパニヤのパロス(Palos)港を出帆し、大西洋上に浮ぶこと七十日、その間疑惧の念に驅られた乘組人等の不穩の擧動もあつたが、よく一同を慰撫し、遂に同年十一月十日西印度諸島の一島サン・サルヴァドル(San-Salvador)に達した。その後、コロンブスは三度アメリカ大陸の沿岸を探險したが、これを印度の一部と信じて、終身新大陸たることを覺らなかつた。その後、イタリヤのフロレンス



コロンブス

コロンブス（一五〇六歿）

アメリゴ・ヴェスプッチ（一五一二歿）

の人アメリゴ・ヴェスプッチ(Amerigo Vespucci)は、ポルトガル王の命を承けて南アメリカを探檢した。これよりこの新大陸は、アメリゴの名に因んでアメリカと名づけられた。

**世界周航**　その後、ポルトガルの人マジェラン(Magellan)は、イスパニヤ王の命によつて世界周航を企て、南アメリカの南端を廻り、太平洋に入つてフィリッピン(Philippine)諸島を發見し、不幸にしてその地の土人に殺害されたが、部下の艦隊はなほ航行を續けて印度洋を横ぎり、アフリカの南端を迂回して、無事にイスパニヤに歸つた。これが世界周航の始である。

マジェラン（一五二一歿）

世界周航の始（一五一九―一五二二）

**ポルトガル・イスパニヤの海外活動**　地理上の大發見によつて、ポルトガルは印度のゴア(Goa)を占領し、これを根據地として東洋貿易の利を占め、支那の澳門(マカオ Macao)を取り、我が國にも來つて通商に從ひ、イスパニヤは專ら新大陸の開拓に力を用ひて、大にその植民に努めた。これよりイタリヤ諸市を中心とした從來の地中海貿易は漸く衰へて、ポルトガル・イスパニヤ兩國の國勢は俄に興つた。

東洋に於けるポルトガル
新大陸に於けるイスパニヤ

地中海貿易衰ふ

**ブラジル・メキシコ・ペルー・チリ**　コロンブスが新大陸を發見した後、カブラル(Cabral)

ブラジル發見（一五〇〇）

メキシコ占領（一五二一）
ペルー征服（一五三三）
チリ攻略（一五三六）

ラル（ポルトガル人）は印度への航行中ブラジルを發見し、コルテス（イスパニヤ人）はメキシコを占領し、ピサロ（イスパニヤ人）はペルーを征服し、アルマグロ（イスパニヤ人）はチリを攻略した。

## 第三章　宗教改革

宗教改革

**宗教改革**　ローマ教會は十字軍の失敗以來その權威を失ひ、漸次內部の腐敗を見るに至つたので、改革の聲も夙に起つたが、時到らずして忽ち抑壓された。然るに、古學が復興し、人智の進歩するに及んで、改革の氣運は漸く熟し、教會は遂に新舊兩教派に分裂するに至つた。

起った理由、外經過、ドイツにて行はれた。

ドイツの宗教改革

ルテール

**ドイツの宗教改革**　十六世紀の初め、法皇レオ十世がペートル寺建立の資金を得るために、滅罪の符（Indulgence）をドイツに賣らしめるや、ウイッテンベルヒ大學教授マルチン・ルーテル（Martin Luther）は、大にその非を鳴らし、遂に法皇に破門されたが、斷乎として

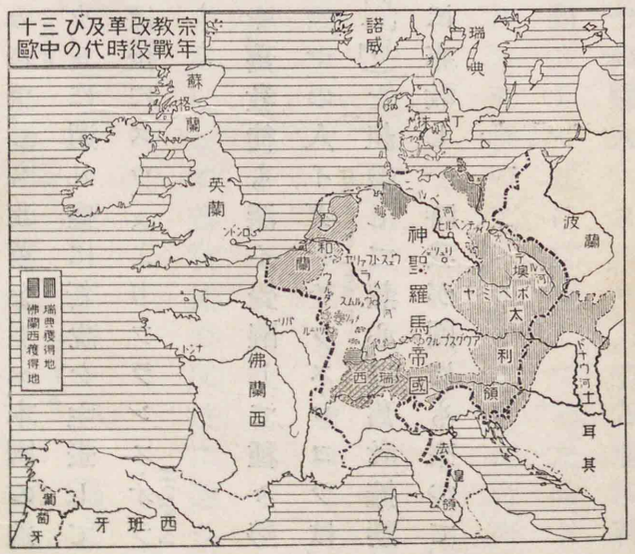
ルーテル宗教改革を叫ぶ（一五一七）
ルーテル（一五四六歿）



チャールス五世（一五五六歿）

所信を曲げず、益々その改革を高唱して新教義を主張した。これよりルーテルの新教義に歸依する者が多く、新教は忽ちドイツ國內に弘まつた。

時にドイツ帝チャールス五世は、教會の分裂が延いて帝國の統一を阻害せんことを恐れ、新教の禁壓に努め、サクソニヤ公（Saxony）等の新教諸侯と戰ふに至つたが、フランス王フランシス一世（Francis）が新教諸侯を援けるに及んで、遂にその不可能なることを覺り、




アウグスブルグの宗教和議（一五五五）

アウグスブルグ（Augusburg）の宗教和議に於て信教の自由を許した。この後ルーテルの新教は北ドイツを中心として、デンマルク（Denmark）・スウーデン（Sweden）・ノルウェー（Norway）等に弘まつた。

スウィスの宗教改革
ツウィングリ（一五三一歿）
ツウィングリ新説を唱ふ（一五一八）
カルヴィン（一五六三歿）

ロヨラ（一五五六歿）
耶蘇會の創立（一五四〇）
ザヴィエル（一五五二歿）
日本布教（一五四九）

カルヴィン

**スウィスの宗教改革**　ルーテルの宗教改革を唱へた翌年、スウィス（瑞西）Switzerland にもツウィングリ Zwingli が出て改革を唱へたが、舊教徒と戰つて戰死した。その後、カルヴィン Calvin フランスの人カルヴィンも改革を唱へ、本國の迫害を避けてスウィスに遁れ、盛に新説を主張して上下の尊信を得た。カルヴィンの新教は後にスウィスよりフランス・オランダ（和蘭）Holland・スコットランド（蘇格蘭）Scotland 等に傳播した。

**耶蘇會の設立**　新教の蔓延するや、舊教徒も深く覺醒して種々勢力の挽回に努めたが、中にもイスパニヤの人イグナチウス・ロヨラ Ignatius Loyola は、同志の士ザヴィエル Xavier 等と耶蘇會（ジェスイト門派ともいふ）を組織して、熱心に舊教擁護の任に當つた。ザヴィエルは遠く印度に布教し、一時我が國にも來つて、キリスト教を傳へた（我が天文十八年）。

## 第四章　宗教戰亂

フィリップ二世（一五九八歿）

オランダの獨立

ウィリヤム（一五八四歿）

フィリップ二世

**イスパニヤの强大**　ヨーロッパの各地に新舊兩教徒が對立して互に抗爭してゐた時、ドイツ帝チャールス五世の子、フィリップ Philip 二世が帝の讓を受けてイスパニヤ王となつたが、王はネーデルランド・アメリカ植民地及びイタリヤを領し、又フィリッピンを取り、トルコを破り、ポルトガル王をも兼ねて、その版圖は全世界に亙り、頗る富强を極めた。然るに、王は舊教を以てその領内を統一し、大に世界政策を施さんとして新教徒の反抗に遇ひ、遂にオランダの獨立を招くに至つた。

**オランダの獨立**　ネーデルランド Netherlands は今のオランダ・ベルギー（白耳義）Belgium の地で、夙に商工業がよく發達し、その南部諸州は舊教を奉じてゐたが、北部諸州にはカルヴィン派の新教が廣く行はれてゐた。然るに、フィリップ二世がこの地の新教徒を壓迫したので、人民は王に叛き、オレンジ Orange 公ウィリヤム William を將として、イスパニヤと戰ふに至つた。やがて南部十州

オランダの獨立宣言（一五八一）

オランダの殷富

ヘンリー八世（一五四七歿）

イングランド王イングランド教會の首長となる（一五三四）

エリザベス（一六〇三歿）

オレンジ公ウィリヤム

はイスパニヤに歸順したが、北部七州は頑強に抵抗を續けて、遂に獨立の實を擧げた。これがオランダである。オランダはその後、遠く東洋に進出して、ジャヴァ（Java）のバタヴィヤ（Batavia）を根據地とし、ポルトガル・イスパニヤ兩國の植民地を奪つて盛に貿易を營み、國勢が大に振つて、その殷富は一時天下に冠たるものがあつた。我が江戸時代に通商を獨占した西洋人は、このオランダ人であつた。

**イングランドの國教確立と海外雄飛**　イングランドでは、ルーテルの宗教改革を唱へた時、國王ヘンリー（Henry）八世はこれに反對したが、廢后の事より遂に法皇と斷つて、自らイングランド教會の首長となつた。その後エリザベス（Elizabeth）女王の時に至り、新に教義を確立して、舊教を加味した新教を以て國教とするに至つた。

然るに、舊教徒は、女王の新教徒なることを惡み、これを廢して、スコッ

メリーの刑殺

無敵艦隊の大敗（一五八八）

エリザベス女王時代の文化

シェークスピヤ（一六一六歿）

スペンサー（一五九九歿）

ベーコン（一六二六歿）

エリザベス

トランドの前女王メリー（Mary）を立てんとし、イスパニヤ王フィリップ二世も亦これを援けたので、エリザベスはメリーを殺し、次いでオランダの獨立を援けてイスパニヤに當つた。こゝに於て、フィリップ王は舊教擁護のために無敵艦隊（Invincible Armada）と名づける大艦隊を派遣してイングランドを襲つたが、遂に大敗して、イスパニヤの國力はこれより次第に衰へ、イングランドが代つて海上に雄飛するに至つた。

シェークスピヤ

かくてエリザベス女王の代に、イングランドの國勢は大に振ひ、植民・航海の業の興ると共に、文藝も亦隆盛を極め、絶代の文豪シェークスピヤ（Shakespeare）を始め、詩人スペンサー（Spenser）、哲學者ベーコン（Bacon）等の諸大家が輩出して、文運興隆の一時期を劃した。

ユグノーの亂（一五六二―一五九八）

ナントの勅令（一五九八）

三十年戰役（一六一八―一六四八）

ボヘミヤの反亂（一六一八）

ウェストファリヤ條約（一六四八）

**フランスの內亂**　フランスにはカルヴィン派の新教が行はれ、その信徒をユグノーといつた。Huguenots 然るに、歷代の國王が舊教を擁護してこれを壓迫したので、新教徒は遂に兵を擧げて叛亂を企て、內亂は凡そ三十年の久しきに亙つた。然るに、ヘンリー四世が王位に卽き、新舊兩教派の調和を圖つてナントの勅令を發布し、新教徒に信仰の自由を許すに及んで、多年の紛亂が始めて平穩に歸した。

ヘンリー四世

**三十年戰役**　ドイツの新舊兩教派の爭はアウグスブルグの宗教和議によつて一時鎭まつたが、その反目は依然として止まず、遂にボヘミヤ Bohemia の叛亂となつて破裂し、三十年戰役の端が開かれた。この時デンマルク・スウェーデン・フランスの三國が新教徒保護を名として、相次いでドイツに侵入したために、戰亂は益〻擴大されたが、新教派も漸く戰に疲れ、ウェストファリヤ Westphalia 條約を結んで、互に和を講ずるに至つた。

戰後のドイツの慘狀

ジェームス一世（一六二五歿）

チャールス一世（一六四九歿）

內亂（一六四二―一六四九）

この條約によつて、ドイツ國內の諸侯は殆ど皆獨立して、その自主權を認められ、新舊兩教徒は信仰の自由と對等の權利とを確認され、スウェーデンは北ドイツのポメラニヤ Pomerania を得てバルチック Baltic 海の制海權を收め、フランスはアルサス Alsace 等の地を併せて領土を東方に擴げ、スウィス・オランダもその獨立を確認された。

かくて多年の宗教問題は解決されたが、久しきに亙る戰亂のために、ドイツの疲弊は極度に達し、人口は減じ、田園は荒れ、學藝は衰頽して、帝國の統一は全く破壞された。これよりフランス・スウェーデンの二國は著しく興隆して、ヨーロッパの最強國となつた。

## 第五章　イングランドの革命と大ブリテン王國の成立

**イングランドの革命**　イングランドでは、女王エリザベスの後、ジェームス一世 James が位を繼ぎ、神權說を唱へて屢〻議會と衝突したが、次王チャ

クロンウェル（一六五八歿）
王の處刑（一六四九）
クロンウェルの武斷政治
王政復古（一六六〇）
チャールス二世（一六八五歿）

ロクルエウン

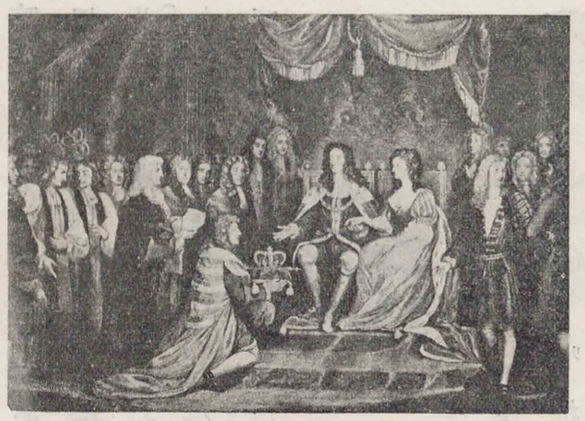
ールス一世も亦同說を固守して屢〻議會と抗爭し、八年に亙る內亂となつた。初は王軍の勢が盛であつたが、オリヴァー・クロンウェル（Oliver Cromwell）が議會軍を率ゐるに及んで、形勢は一變し、王は大敗して後に擒にせられ、議會の審判を受けて死刑に處せられた。こゝに於て、議會は王政を廢して共和政治を布き、クロンウェルがその實權を握つた。その後、クロンウェルは議會を解散して憲法を改め、自ら總監（Lord Protector）に任じて武斷政治を行ひ、內はよく風俗を改善し、外は航海條例（Navigation Act）を設けてオランダの海運業を抑へ、又、イスパニヤと戰つて領土を擴め、大に國威を發揚したが、國民はその峻嚴なる政治を悅ばず、クロンウェルの死後、間もなく王政に復して、チャールス二世（チャールス一世の子。）が位に卽いた。

**人民の國王處刑**　國王を裁判して死刑に處するが如きことは、我が國民の想像も及ばぬ所で、萬世一系の天皇を戴く我が國體の尊さは、眞に世界無

ジェームス二世（一七〇一歿）
ウィリヤム三世（一七〇二歿）
名譽革命（一六八八）

比といふべきである。

**名譽革命**　チャールス二世の次に、王弟ジェームス二世が位に卽いたが、兩王は共に專橫の行爲があつたので、議會はオレンジ公ウィリヤム（William）三世及びその妃メリー（ジェームス二世の女。）をオランダより迎へて王位に卽かしめた。この革命は少しも流血の慘を見ないで行はれたから、名譽革命（Glorious Revolution）といはれる。


ウィリヤム・メリー戴冠式

ウィリヤム三世及び后メリーは、卽位の初に議會の上つた權利の宣言（Declaration of Rights）を守るべきことを誓つた。これよりイングランドの憲政は確立し、民權も大に伸張した。

**外來の王室**　王朝が屢〻變革し、又、外國の王室が來つて王統を繼ぐが如きは、我が國には夢にもあり得ないことである。これによつて見ても、我が國體

の萬邦に卓越せる所以が知られる。

大ブリテン王國の成立（一七〇七）

**大ブリテン王國の成立**　ジェームス一世以來、イングランド王は同時にスコットランド王であつたが、議會は各別に設けられてゐた。然るに、アン女王（Ann）（王后メリーの妹。）の代に、兩國の議會は合同し、兩王國は合して大ブリテン王國（Great Britain）となつた（以降をイギリスと稱して、イングランドと區別する。）。アン女王が歿して後嗣がなかつたので、ドイツのハノーヴァー（Hanover）公ジョージ（George）一世（ジェームス一世の外曾孫。）は、迎へられて大ブリテン王となつた。これが今のイギリス王室の始祖である。

ジョージ一世イギリス王となる（一七一四）

リシュリュー

リシュリュー（一六四二歿）

## 第六章　フランスの強盛とルイ十四世

**リシュリューとマザレン**　イスパニヤが衰へ、ドイツが瓦解した後を承けて、ヨーロッパの覇權を握つたものはフランスである。ヘンリー四世の歿後リシュリュー（Richelieu）が永く宰相となり、内はよく諸侯を抑へて王權を盛にし、外は三十年戰役に干渉して國威を揚げた。次いでマザレン（Mazarin）が宰相となつてその遺策を繼ぎ、幼王ルイ十四世を佐けて益〻王權を強固にし、ウェストファリヤ條約により利を收めて領土を擴張し、國勢は愈〻隆盛となつた。

マザレン（一六六一歿）

ルイ十四世（一七一五歿）

コルベール（一六八三歿）

ユトレヒトの和約（一七一三）

**ルイ十四世**　ルイ十四世（Louis）は、マザレンの死後宰相を置かず、親ら政を行ひ、コルベール（Colbert）を擧げて財政を掌らしめ、よく商工業を保護し、大に海外植民地の發展に努めたために、國力は愈〻富强を增した。王はこの國力の强大を恃んで外國の侵略を企て、數十年に亙つてヨーロッパ諸國と戰を交へた。その中最も重大なものはイスパニヤ王位繼承戰役であつた。王はイスパニヤ王統の斷絶に乘じ、孫フィリップ五世をしてその王位を繼がしめんとして、イングランド・オランダ・ドイツの諸國と戰つたが、遂にユトレヒトの和約によつて、フランス・イスパニヤの兩國は永久に合同せざるべきことを條件として、フィリップ五世のイスパニヤ王たること

ルイ十四世

が承認された。

この和約によつて、イギリスは大に海外の領土を增し、サヴォイ(Savoy)は王國となつた。オーストリヤも亦その翌年フランスとラスタットの和約を結んで領土を擴張した。

ラスタットの和約（一七一四）

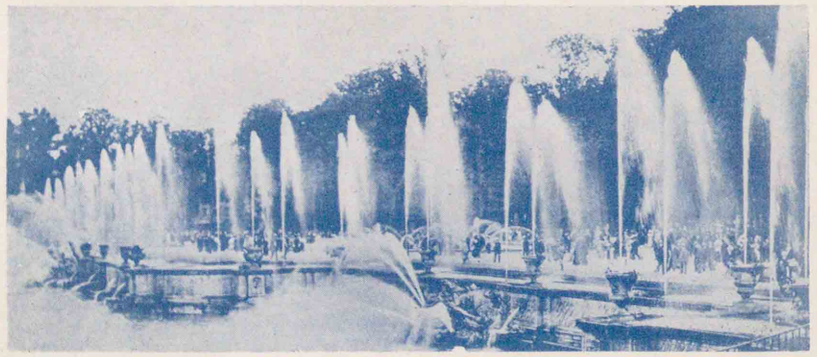
**兩條約による領土分讓**　ユトレヒト條約により、イギリスはジブラルタル(Gibraltar)・ミノルカ(Minorca)島・ニューファウンドランド(Newfoundland)等を得、サヴォイはシシリー(Sicily)島を得た。又、ラスタット條約により、オーストリヤはネーデルランド（今のベルギー）・ミラノ(Milan)・サルヂニヤ(Sardinia)島を得、後にサルヂニヤ島をサヴォイに與へてシシリー島と交換した。

ユトレヒト和約に得獲の國諸るれよ
ポルトガル
英吉利
ジブラルタル
ミノルカ
ニューファウンドランド
獨逸帝國
佛蘭西王國
西班牙王國
ヴェルサイユ宮殿
ルイ十四世の豪奢

**宮廷の豪奢と衰運**　ラスタットの和約の結ばれた翌年、王は歿した。王の代はフランス王政の極盛時代であつて、莊麗なヴェルサイユ宮殿(Versailles)は造營され、宮廷の豪奢は前古無比と稱せられた。文學も亦大に興つ

ヴェルサイユ宮殿

同上禁苑内にあるアポロの化粧



同上禁苑内にある噴水

ヴェルサイユ宮殿

ヴェルサイユはパリの西にある小市で、こゝにある大宮殿と大庭園とはルイ十四世の造營に係る。この造營に際して、木石、水利に乏しいこの地に、巨石を運び水道を引く爲めに、王は巨額の費用と莫大の數の人夫とを使用した。さればこの一木一石にも王の所謂「朕卽國家」なる思想と威力とが語られてゐる。この禁苑は規模の宏壯、美麗なるのみならず、庭園術の粹を蒐めた噴水や彫刻の豐富なる所に不滅の價値がある。彫刻は何れもギリシャ神話に關係のあるもので、「アポロの化粧」もその一である。神話に於けるアポロは日輪の光に象つた光明の神、知識、音樂及び純情の神である。而して王は自らをそれに擬し、又近臣も追從して王をアポロと呼んだとのことである。又王は「海王の泉」に於て或時は三千の宮女をその中に游泳せしめて女神に擬し、又或時はそこに飼養される巨大なる魚を釣つて日夜驕奢を極めた。實に王の君主萬能精神を遺憾なく發揮したものといふべきである。

コルネイユ（一六八四歿）
モリエール（一六七三歿）
ラシーヌ（一六九九歿）
國力の疲弊
ロシヤの勃興
ペートル大帝（一七二五歿）

て、コルネイユ・モリエール・ラシーヌ等の諸文豪を出し、フランス語はヨーロッパの上流社會の用語となり、宮廷の儀式・禮法は各國宮廷の模範となつた。されど、王の晩年は、豪奢と外征とによつて、政治は腐敗し、財政は亂れ、商工業はいたく衰へて、後年の大革命は既にこの時に胚胎した。

## 第七章　ロシヤの勃興とペートル大帝

フランスが威を西ヨーロッパに振つてゐる時に當つて、東ヨーロッパにロシヤが勃興した。

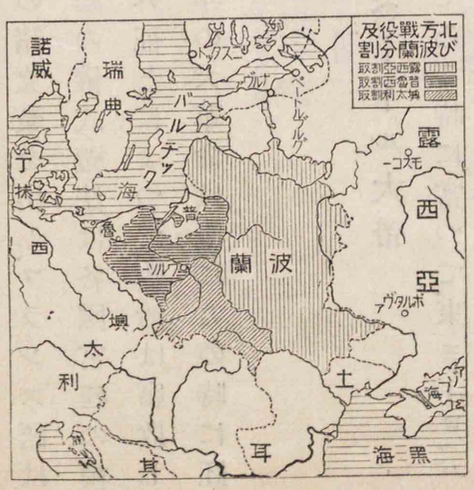
ペートル大帝

**ペートル大帝**　ロシヤは久しく蒙古人の支配を受けてゐたが、十五世紀の末に、モスコー大公が蒙古人を驅逐して全土を統一し、シベリヤ侵略の端を開いた。その後、十八世紀の末に、ロマノフ家のペートル大帝が卽位する

アゾフ海の獲得（一六九六）
ペートル大帝の西歐旅行（一六九七―一六九八）
北方戰役（一七〇〇―一七二一）
チャールス十二世（一七一八歿）
ニスタットの和約（一七二一）

に及んで、帝は自國に海港がなく、又、文化の大に後れてゐることを慨き、先づトルコを伐つてアゾフ海（Azov）を奪ひ、次いでドイツ・オランダ・イングランド等に遊んで、西ヨーロッパの文物・制度を視察した上、自ら造船術を學んで歸國し、盛にその文化を輸入したので、國勢は俄に榮えた。

**北方戰役**　この時、スウェーデンは北ヨーロッパに勢を振ひ、バルチック海岸を領有してゐたが、帝はその東岸を侵略せんと欲し、デンマルク・ポーランド（波蘭）（Poland）の二國と同盟してスウェーデンに向つて戰を開いた。スウェーデンは勇敢なるチャールス十二世王の奮戰によつて屢〻勝利を得たが、遂に敗れて、ニスタット（Nystadt）の和約によりバルチック海東岸の地をロシヤに割讓するに至つた。かくてロシヤはスウェーデンに代つて東ヨーロッパの強國となつた。




カザリン二世（一七九六歿）
ポーランドの滅亡（一七九五）
プロシヤの起原
フレデリック大王（一七四〇即位―一七八六歿）

カザリン二世

**ポーランドの滅亡**　ポーランドは、十四世紀の初に、スラヴ人の立てた王國で、一時國勢が振つたが、その後國運が次第に傾き、十八世紀に至つて大に衰へた。時にロシヤの女帝カザリン二世（Catherine）は、ペートル大帝の遺業を興し、大に國勢の伸張を圖り、プロシヤ（Prussia）・オーストリヤの二國と謀つて、前後三回に亙り、ポーランドを分割して、遂にこれを滅した。

## 第八章　プロシヤの勃興とフレデリック大王

**プロシヤの興隆**　プロシヤはもとドイツ武士團の領土で、後にポーランドに屬し、次いでブランデンブルグ（Brandenburg）選擧公の所領となり、十八世紀の初に、ドイツ皇帝よりプロシヤ王の稱號を賜はつて王國となつたが、フレデリック二世（Frederic the Great）（大王）が王位に卽くに及んで、プロシヤの國勢は勃然として興り、一躍ヨーロッパの強國となつた。

オーストリヤ繼承戰役（一七四〇―一七四八）
マリヤ-テレサ（一七八〇歿）
アーヘンの和約（一七四八）

フレデリック大王

マリヤ-テレサ

議を唱へて相續權を爭つてゐるのを見て、大王はこれを好機とし、急に兵を進めて突然オーストリヤ領シレシヤ(Silesia)を占領した。間もなくオーストリヤ繼承戰役は起り、マリヤ-テレサはバヴァリヤ(Bavaria)・フランス・イスパニヤ・サクソニヤ(Saxony)等の聯合軍と戰つたが、よく外敵に抗し、遂にアーヘン(Aachen)に和を結んで、その相續權を認めしめ、シレシヤをプロシヤに割き、各〻その侵地を返還することとなつた。

**オーストリヤ繼承戰役**　フレデリック大王は文武兼備の英主で、その即位の年に、會〻ドイツ皇帝チャールス六世が歿し、皇女マリヤ-テレサ(Maria Theresa)がオーストリヤ領を相續したが、その親戚に當るバヴァリヤ公等が、これに異

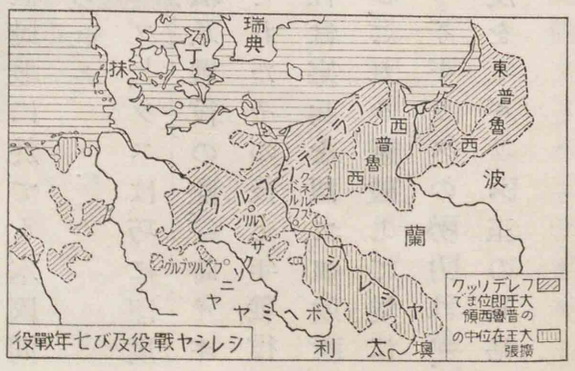
**七年戰役**　マリヤ-テレサはシレシヤを失つたことを深く遺憾とし、大に國政の改



オーストリヤ繼承戰役（一七四〇―一七四八）
マリヤ-テレサ（一七八〇歿）
アーヘンの和約（一七四八）
クネルスドルフの戰（一七五九）
フベルツブルグの和約（一七六三）
七年戰役（一七五六―一七六三）
ポーランドの分割（一七七二―一七九五）

革に努め、前の仇敵フランスと同盟を約し、又、ロシヤ・サクソニヤ等とも結んで、一意シレシヤの回復を圖つた。プレデリック大王はこれを知るや、機先を制して、直ちにサクソニヤを占領し、オーストリヤと戰つて大に威名を轟かしたが、クネルスドルフ(Kunersdorf)の一戰に大敗して頗る苦境に陷つた。然るに、ロシヤが同盟を脫してプロシヤに與みし、フランスも亦プロシヤと和するに及んで、オーストリヤは孤立し、遂にフベルツブルグ(Hubertsburg)の和約によつて、シレシヤのプロシヤ領たることを確認するに至つた。これを七年戰役といふ。

この戰役後、大王は益〻意を內政に用ひて國勢の發展を圖り、ロシヤ・オーストリヤとポーランドを分割してその領域を擴めたが、その後、プロシヤは二回三回のポーランド分割に與つて、益〻國勢を伸張した。


瑞典
東普魯西
西普魯西
波蘭
シレシヤ
ボヘミヤ
ザクソニヤ
ワルツブルグ
ハノーバー
ブランデンブルク
ポメラニヤ
ルツ
ツ
ツ

フランス人マドラスを攻略す（一七四六）
クライヴ（一七七四歿）
プラッシーの戰（一七五七）
ムガール帝國の滅亡（一八五七）
印度イギリス王の直轄となる（一八五八）

# 第九章　印度及びアメリカに於けるイギリス・フランス兩植民地の衝突

ヨーロッパにオーストリヤ繼承戰役及び七年戰役の起つた時、印度及びアメリカに於けるイギリス・フランスの植民地に於ても、本國間の衝突と植民地の抗爭とによつて戰が交へられた。

**印度に於ける衝突**　フランスの印度總督ヂュプレックス（Dupleix）は、巧に印度の土豪を操縱して領土を擴め、オーストリヤ繼承戰役の際、一時イギリス領マドラス（Madras）を占領したが、間もなく回復された。その後、七年戰役の起るや、イギリス東印度會社のクライヴ（Clive）大佐は、寡兵を以て、フランス及びベンガル（Bengal）の大聯合軍とプラッシー（Plassey）に戰ひ、これを擊破して、遂にフランスの勢力を印度より驅逐した。これよりイギリスの勢力は益〻印度に振ひ、次いでムガール（Moghul）帝國を滅して印度をイギリス王の直轄とした。



ウォルフ將軍ケベックを陷る（一七五九）

**アメリカに於ける衝突**　コロンブスの發見後、イスパニヤ・ポルトガルの兩國民は、先づアメリカに植民し、イスパニヤ人は南北アメリカの大部を占領したが、これに次いでフランス・イギリスの兩國民も、十六世紀の中頃より北アメリカに植民し、十八世紀の中頃には、フランス人はカナダ（Canada）及びルイジヤナ（Louisiana）地方を有し、イギリス人はその東南なる大西洋沿岸の地を占めた。

このイギリス・フランスの兩植民地は、本國間の衝突の影響を受けて激しく競爭したが、七年戰役の起るや、イギリス海軍はフランス艦隊を破つて、その本國と植民地との連絡を絶ち、イギリスの將ウォルフ（Wolfe）はケベック（Quebec）を陷れて全くフランス軍をカナダより逐ひ、又、イギリス艦隊はフランスを援けたイスパニヤ艦隊を破つて、フロリダ（Florida）及びキュバ（Cuba）島を占

パリー和約（一七六三）

領した。程なく兩國の間にパリー和約が成り、イギリスはフランスよりカナダ等を得て、印度に於けるシャンデルナゴル（Chandernagor）・ポンヂシェリー（Pondicherry）をフランスに還付し、イスパニヤよりはフロリダを取り、その代償としてフランスをしてルイジヤナ（Louisiana）をイスパニヤに與へしめた。かくてイギリスの植民地は俄に增大するに至つた。

## 第十章　アメリカ合衆國の獨立

**獨立の遠因**　アメリカのイギリス植民には、もと信仰の自由を得んとして移住したものが少くなかつた。從つて自ら自由獨立の精神に富み、孜々として開拓に從事し、夙に自治制が行はれてゐたが、本國政府は本國の商工業を保護するために、植民地との通商を制限したので、植民は漸く不平を抱いた。

印紙法の發布（一七六五）

**獨立の近因**　この時、本國政府は多年外戰に疲れ、財政の窮乏を來たしたので、印紙法を發布して植民地に課稅したが、植民は本國議會に代議士を出さゞるを理由として、總べての納稅に反對し、本國の强壓に遇つて、遂にこれと開戰するに至つた。

開戰（一七七五）

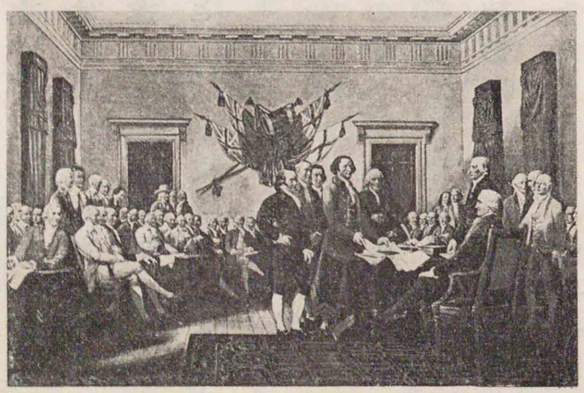
ワシントン（一七九九歿）

獨立宣言（一七七六）

十三州の植民はジョージ・ワシントン（George Washington）を總督に推して獨立を宣言し、翌年アメリカ合衆國を組織した。

ヨーロッパ諸國民の同情

**獨立戰役**　獨立軍は、初は甚だ振はなかつたが、やがてヨーロッパ諸國民の同情はこれに集つて、來り援けるものも多く、ワシントンの統



米國獨立の宣言

フランスとの同盟（一七七九）
ヨークタウンの大勝（一七八一）
ヴェルサイユの和約（一七八三）
憲法制定（一七八七）

率も亦宜しきを得て、植民の決心は益〻堅く、次いでフランスとの同盟の成るや、イスパニヤ・オランダもこれに加はり、他の列國も亦武裝中立に出でたので、獨立軍の勢は愈〻大に振ひ、遂にイギリス軍の根據地たるヨークタウン（Yorktown）を陷れて大捷を博した。こゝに於て、イギリスはヴェルサイユに和約を結んでその獨立を承認し、フランスにはトバゴ島（Tobago）を、イスパニヤにはフロリダを割讓した。

**戰後の合衆國**　戰後、合衆國は諸州分離の傾があつたが、憂國の士がその間を奔走して、新に憲法を制定し、聯邦制の共和政體によることとなつて、新にワシントンを第一代の大統領に選擧し、國礎をこゝに築いた。

## 第十一章　近古の西洋文化

文藝の復興以來、ヨーロッパの文化は俄に進み、十七世紀より十八世紀に入つては、驚くべき發達を遂げた。

コペルニクス（一五四三歿）
ニュートン（一七二七歿）
ラプラース（一八二七歿）
オイレル（一七八三歿）
ラヴォアジエー（一七九四歿）
リンネ（一七七八歿）
キュヴィエー（一八三二歿）
ワット（一八一九歿）
アークライト（一七九二歿）

ニュートン

ワット

**科學の進歩**　人智が啓發されて迷信の衰へるに連れ、科學の發達を促し、十六世紀の中頃、コペルニクス（Copernicus）（ポーランド人）及びガリレオ（Galileo）（イタリヤ人）は地動說を唱へ、十七世紀の末にニュートン（Newton）（イギリス人）は引力の大原則を發見し、十八世紀に入つて科學の研究は益〻進歩し、天文學にラプラース（Laplace）（フランス人）、數學にオイレル（Euler）（スウイス人）、化學にラヴォアジエー（Lavoisier）（フランス人）、植物學にリンネ（Linnaeus）（スウエーデン人）、解剖學にキュヴィエー（Cuvier）（フランス人）等の碩學が續々と輩出した。

**諸種の發明**　科學の進歩に伴つて諸種の發明も現はれ、既に十五世紀の終頃、時計・眼鏡等が發明されたが、十六・七世紀に及んで顯微鏡・望遠鏡等も發明され、十八世紀に至つて寒暖計・避雷針・蒸氣機關・紡績機・種痘法等の有益な發明が相次いで現はれ、特にワット（Watt）（イギリス人）の蒸氣機關、アークライト（Arkwright）の

産業革命
ベーコン（一六二六歿）
デカルト（一六五〇歿）
カント（一八〇四歿）
シェークスピヤ（一六一六歿）
ミルトン（一六七四歿）
コルネイユ（一六八四歿）
モリエール（一六七三歿）
レッシング（一七八一歿）
ゲーテ（一八三二歿）
シルレル（一八〇五歿）
自由平等の説
ヴォルテール（一七七八歿）
モンテスキュー（一七五五歿）

（イギリス人）の紡績機は、從來の家庭工業を一變して大規模の工場組織たらしめ、大に産業革命の氣運を促進した。

**哲學及び文學**　哲學も十六世紀の末頃より大に興り、ベーコン（Bacon）（イギリス人）に次いで、十七世紀にデカルト（Descartes）（フランス人）が出で、十八世紀にカント（Kant）（ドイツ人）が出でるに及んで、近代哲學の基礎を作つた。純文學も亦大に發達し、シェークスピヤ（Shakespeare）（イギリス人）に次いでミルトン（Milton）（イギリス人）・コルネイユ（Corneille）・モリエール（Molière）（以上フランス人）・レッシング（Lessing）・ゲーテ（Goethe）・シルレル（Schiller）（以上ドイツ人）等の大家が輩出した。

カント

ヴォルテール

**革新文學**　又、フランスには、十八世紀に入つて革新文學が起り、古來の制度・習慣を不合理となし、歴史・國情を無視して革新の必要を唱へ、貴族・僧侶の專横を攻擊して人民の自由・平等を主張した。その代表的文豪として、ヴォルテール（Voltaire）・モンテスキュー（Montesquieu）・ルソー（Rousseau）等が出で、大に時潮を動かして、遂に大革命を惹き起す一原因となつた。

ルソー（一七七八歿）
ルーベンス（一六四〇歿）
ヴァン・ダイク（一六四一歿）
レンブラント（一六六九歿）
ヴェラスケス（一六六〇歿）
ムリリョ（一六八二歿）
モツァルト（一七九一歿）
ベートーヴェン（一八二七歿）

**美術・音樂**　美術は文藝復興時代以後、著しい進歩は見られなかつたが、繪畫にはオランダにルーベンス（Rubens）・ヴァン・ダイク（Van Dijk）・レンブラント（Rembrandt）、イスパニヤにはヴェラスケス（Velasquez）・ムリリョ（Murillo）などの大家が出た。又、音樂はその後十八世紀に入つて空前の大進歩をなし、ドイツにモツァルト（Mozart）・ベートーヴェン（Beethoven）が出て、各〻不朽の名曲を遺した。

**産業**　中世以來ギルドの制度が行はれ、自由競爭が出來なかつたために、産業の發達は極めて緩慢であつたが、地理上の大發見以來、諸國に重商主義（Mercantilism）が唱へられ、政府は鑛山の發見や保護政策による外國貿易によつて、國内に多量の金銀を蓄積することに努めた。これがために、農業は輕んぜられ、農村は著しく疲弊したので、農村の振興

アダム・スミス

アダム・スミス（一七九〇歿）

を叫び、土地經濟の重んずべきことを說く重農主義者が現はれた。アダムスミス（イギリス人）Adam Smith は富國論を著はし、重商主義に反對して自由貿易說を唱へ、古來の經濟思想を一變して、近代經濟學の鼻祖となつた。Physiocrat

# 第四篇　フランス革命と自由主義及び國民主義の發展

## 第一章　フランス革命

フランス大革命

十八世紀の末、永くヨーロッパに隆盛を極めた專制政治の反動として、先づフランスに一大革命が起り、政治及び社會の狀態はこれがために一變し、延いてその影響は全ヨーロッパに波及した。

革命の原因

**革命の原因**　フランス大革命は、ルイ十四世の專制に胚胎し、貴族・僧侶が廣大な土地を領有しながら、免稅その他の特權に浴して驕奢を極め、國民の怨をかつたこと、矯激な自由平等說が叫ばれて、國民がこれに感化されたこと、及び會アメリカ合衆國が獨立して共和國を實現し、これが大に民心を刺激したことなどがその原因をなして、遂にルイ十六世の時の財政難によつて破裂したのである。

ルイ十六世（一七九三歿）

**革命の經過**　ルイ十六世は國費多端の後を承けて卽位し、財政の

國會の召集（一七八九）

バスチーユ襲撃（一七八九）

困難を救はんとしてチュルゴー（Turgot）等の理財家を登用したが、效果を擧げ得なかつたので、遂に一般國民にこれを謀らんとし、久しく中絶してゐた國會をヴェルサイユ（States general）に召集した。然るに、平民議員は貴族・僧侶の議員と分離して、別に國民議會（National Assembly）を組織し、新憲法の制定に努めたので、貴族・僧侶の議員も枉げてこれに加はつた。當時暴民は多くパリーに集り、盛に國民議會に聲援したが、王が兵力を以て國民議會を解散せんとするの風評が傳はるや、憤激してバスチーユ（Bastille）の牢獄を破壞し、暴行を逞しうした。これが革命の發端となつて、暴動は忽ち地方にも波及し、貴族・僧侶は爭つて國外に遁れた。國民議會はパリーに移り、自由平等主義による「人權の宣言」を發して民主主義の憲法を議決

國會の召集

新憲法制定（一七九一）

外國の干渉

國民公會開會（一七九二）

共和政公布（一七九二）

王の死刑（一七九三）

第一回大同盟（一七九二—一七九七）

ロベスピエール（一七九四歿）

し、新憲法によつて立法議會（Legislative Assembly）が開かれた。これより先、オーストリヤ・プロシヤの二國は大に王に同情し、兵を聯ねてフランスを侵したが、王がこれに內應したものとして、議會は直ちに王を幽閉し、更に憲法を變更するために自ら解散して、新に國民公會（National Convention）が召集された。國民公會は開會の始に於て、王政を廢して共和政治を布告し、翌年遂に王を裁判して死刑に處した。

**國王の末路**　國王の末路の悲哀を極めた例は、支那にも西洋にも少くないが、人民が王を裁判して處刑するが如きは、更に驚くべき狂暴といはねばならぬ。萬邦無比なる我が國體の尊さを顧みて、我等は日本國民として生れたことを深く光榮とすべきである。

**恐嚇政治**　ルイ十六世の處刑されるや、ヨーロッパ列國は大に不安を感じ、イギリスの首唱により、君主政治擁護のために、第一回大同盟を結んでフランスに迫り、勤王黨及び溫和黨も亦內に蜂起した。この時、過激黨は議會の全權を握り、ロベスピエール（Robespierre）・ダントン（Danton）及びマラー（Marat）

ダントン（一七九四歿）
マラー（一七九三歿）
恐嚇政治（一七九三―一七九四）
督政官政府の設立（一七九五）

等がその首領となつて、凡そ一年間に反對黨及びその疑あるものを多數殺戮した。これを恐嚇政治（Reign of Terror）といふ。かくして革命政府は國論を統一し、全國の壯丁を募つて同盟軍を擊退した。

**督政官政府**　されど狂暴なる恐嚇政治は、却つて國民に極度の不安を與へたために、溫和黨が代つて議會の大勢を支配することとなり、國民公會はロベスピエール等を刑に處して憲法を更新し、五名の督政官（Director）に行政權を委ねて自ら解散した。こゝに至つて革命の動亂は漸く鎭靜した。

ナポレオン（一八二一歿）
オーストリヤ征伐（一七九七）
オーストリヤと和す（一九八七）

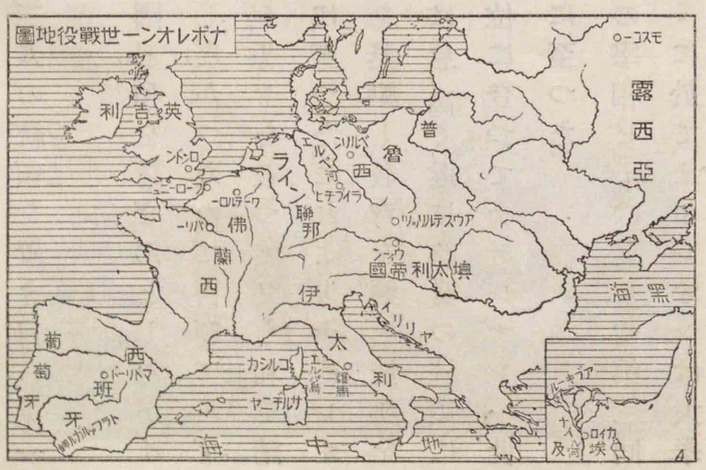
## 第二章　ナポレオンの出現

**ナポレオンの出現**　稀世の英傑ナポレオン・ボナパルト（Napoleon Bonaparte）は、少壯の身を以て督政官政府の軍將に拔擢されてオーストリヤに進擊し、忽ちこれを破つて和を請はしめ、更にイギリスの印度との交通を絕たんとし、エジプトに遠征してこれを平定したが、イギリスの提督ネルソン（Nelson）のために、その艦隊をアブーキル（Aboukir）に擊碎されて、本國との連絡を斷たれた。イギリスの宰相ピット（Pitt）はこの機に乘じて第二回大同盟を組織し、頻にフランスを破つたので、督政官政府は民望を失ひ、人心が大に動搖するに至つた。ナポレオンはこれを聞き、急にエジプトよ

エジプト遠征（一七九八）
ネルソン（一八〇五歿）
アブーキルの海戰（一七九八）
ピット（一八〇六歿）
第二回大同盟（一七九九―一八〇四）

馬上のナポレオン

小ピット



統領政府（一八〇〇―一八〇四）

オーストリヤ征伐（一八〇〇）

オーストリヤと和す（一八〇一）

イギリスと和す（一八〇二）

内治

ナポレオン終身統領となる（一八〇二）

ナポレオン皇帝となる（一八〇四）

ナポレオン、イタリヤ王を兼ぬ（一八〇五）

帝政

第三回大同盟（一八〇五）

り本國に歸り、督政官政府を仆して、新に三人の統領（Consul）を置き、自ら第一統領に選ばれて政治の實權を握つた。

**ナポレオンの帝政**　ナポレオンは列國と和を講ぜんとしたが、イギリス・オーストリヤの二國がこれに應じなかつたので、再びアルプス（Alps）の險を越えてイタリヤに入り、オーストリヤを破つて又も和を請はしめ、次いでイギリスとも和約を結ぶに至つた。これよりナポレオンは意を内治に用ひ、交通を開き、商工業を奬勵し、教育を興し、法典を編纂し、大に治績を擧げたので、その威名は愈〻高く、遂に終身の統領に選ばれ、次いで國民の推戴により、皇帝の位に登つてナポレオン一世と稱し、更にイタリヤの王位をも兼ねるに至つた。

**ナポレオンの覇業**　この時、イギリスの宰相ピットは、又もや第三回大同盟を組織してフランスに當つた。こゝに於て、ナポレオンは大擧してイギリスに侵入せんと企てたが、その艦隊はトラファルガル（Trafalgar）沖に於てネルソンの率ゐるイギリス艦隊に破られて、全く海上權を失つ

トラファルガルの海戰（一八〇五）

アウステルリッツの戰（一八〇五）

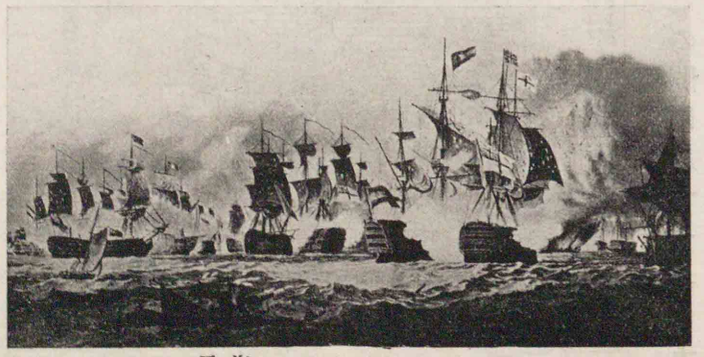
ライン聯邦成る（一八〇六）

神聖ローマ帝國の滅亡（一八〇六）

たので、轉じてオーストリヤに侵入し、又々オーストリヤに和を請はしめた。これよりナポレオンは全ヨーロッパを制壓し、西南ドイツ諸邦を糾合してライン（Rhine）聯邦を作り、自らその保護者となつて武威を輝かした。これがために、ドイツの統一は全く破れて、皇帝フランシス二世（Francis）は單にオーストリヤ皇帝と稱するに至り、オットー大帝以來の神聖ローマ帝國はこゝに亡んだ。

ネルソン

プロシヤは先にフランスと和し、久しく中立を守つてゐたが、ナポレオンはこれに戰を挑んで、その領地の半ばを奪ひ、更にこれを援



トラファルガルの海戰

プロシヤ・ロシヤ兩國と和す（一八〇七）

大陸封鎖令（一八〇六）

けたロシヤにも迫つて、兩國をして和を約さしめ、一方又經濟上よりイギリスを苦しめんと圖り、大陸封鎖令（Continental System）を發して、ヨーロッパ大陸諸國のイギリスと通商することを禁止した。然るに、ポルトガルが命に從はなかつたので、攻めてこれを占領し、又、イスパニヤ王を廢して我が兄ジョセフ（Joseph）をしてその國王たらしめた。この時、オーストリヤが又もナポレオンに反抗したので、ナポレオンは兵を進めてこれを破り、その皇女を娶つて后となし、以て家門を尊からしめた。この間に於て、ナポレオンは親族・功臣を諸國に封じて王となし、威權全ヨーロッパを掩ひ、イギリス・トルコの外は全くその威令に服するに至つた。

ナポレオンの時代の歐羅巴

ナポレオンの極盛時代

ナポレオンの同盟國　ナポレオンの附屬國　獨立國　フランス

ナポレオン、オーストリヤ皇女と婚す（一八一〇）

ナポレオンの全盛

ナポレオンのロシヤ征伐（一八一二）

モスコー占領（一八一二）

第四回大同盟（一八一三）

ライプチヒの戰（一八一三）

ナポレオンの配流（一八一四）

## ナポレオンの衰運

ロシヤは先にナポレオンと和したが、大陸封鎖の禁を守らなかつたので、ナポレオンは大にこれを怒り、親ら大軍を率ゐてロシヤに侵入し、モスコー（Moscow）を占領した。會〻火災が起つて全市は焦土と化し、フランス軍は宿舍・糧食を得るに苦しみ、飢寒に堪へずして退却を餘儀なくされた。これに乘じてロシヤ軍の追擊は愈〻急にして、さすがの大軍も殆ど潰滅し、ナポレオンは纔に身をもつて逃れ還つた。この敗報の列國に傳はるや、皆起つてフランスに背き、第四回大同盟を組織してフランスの國境に迫つた。ナポレオンはこれとライプチヒ（Leipzig）に決戰して敗れ、次いでパリーも聯合軍のために陷れられたので、大勢如何ともし難く、遂に帝位を退いてエルバ島（Elba）に

ナポレオンニルバよりの歸る

ウィーン會議（一八一四―一八一五）

流されるに至つた。こゝに於て、ルイ十六世の弟ルイ十八世が迎へられてフランス王となり、フランスは再び王政に復した。

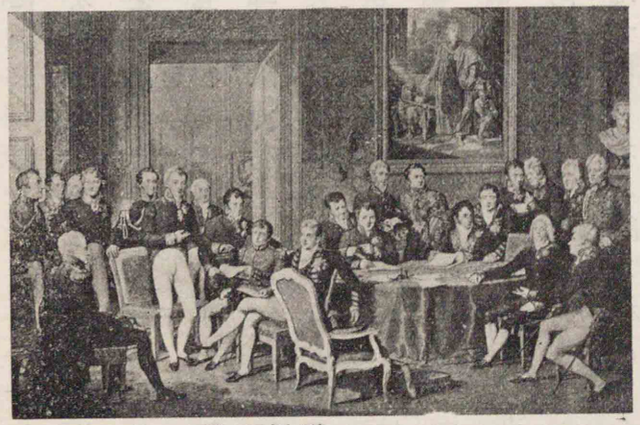
**ナポレオンの敗亡**　かくて列國は、戰後の國境を更定すべくウィーン（Wien）に會議を開いたが、容易にその商議が決しなかつた。この機に乘じ、ナポレオンは密かにエルバ島を脱して突然フランスに歸り、將士歡呼の間にパリーに入り、再び帝位に卽いた。列國は大に驚き、直ちに同盟軍を組織してこれを討ち、プロシヤの將ブリュッヘル及びイギリスの將ウェリントン（Wellington）は、ナポレオンとワーテルロー（Waterloo）に會戰して大にこれを破り、進んでパリーを占領した。ナポレオンは

ナポレオン、エルバ島を脱してパリーに入る（一八一五）

ブリュッヘル（一八一九歿）

ウェリントン（一八五二歿）

ワーテルローの戰（一八一五）



ウィーン列國會議

（英）ウェリントン　（露）デーロルセッネ　（普）トルボンフ
（墺）ヒニルテッメ　（佛）ンラレタ
（普）ヒルベンデルハ　（英）ーレルスッカ　（露）ヒルベルケッタス

ウィーン條約（一八一五）

力屈して遂にイギリス軍に降つた。こゝに於て、列國は相議してルイ十八世を王位に復し、ナポレオンを遠くセントヘレナ（St. Hellena）に流した。ナポレオンは再び帝位に在ること僅に約百日であつた。

**ウィーン條約**　この間に於て、ウィーン會議は互に讓歩して漸く議事を了し、ウィーン條約を締結して各國の新領域を決定した。

**ウィーン會議の結果**　（一）フランスはほゞ革命前の領域に復し、（二）ロシヤはワルソー（Warsaw）公國の大部を得、（三）スウェーデンはノルウェーを取り、（四）プロシヤはその領域を復し、（五）オーストリヤは今のベルギー地方を失つて北イタリヤを得、（六）ドイツは三十九邦の聯邦となり、（七）オランダは今のベルギー地方を合せてネーデルランド王國（Netherlands）となり、（八）スウィスは永世中立地となり、（九）イギリスは戰時に占領した多くの植民地を得、（一〇）その他イスパニヤ・サルヂニヤ（Sardinia）・ナポリ（Naples）・法皇領等は悉く舊主に還付された。

産業革命

**産業革命**　フランス革命及びナポレオン時代に、産業革命（Industrial Revolution）がイギリスに起り、漸次ヨーロッパ諸國に及んだ。十八世紀に於ける各種の機

械・機關の發明は、從來の手工業を機械工業と化せしめ、小規模の家庭工業は滅びて大工業が勃興し、生産は多量となり、販路は擴大し、經濟生活は驚くべき發展を遂げた。機械工業の發達は、延いて農業技術の上にも、又交通運輸の上にも、過去に見ざる急速の進歩を促し、社會は一變して資本家・勞働者の二階級を生じ、これがために貧富の懸隔は愈〻著しくなつた。この風潮は十九世紀に入つて全世界に擴まり、政治・經濟の上に大影響を與へた。

アレクサンドル一世（一八二五歿）

神聖同盟（一八一五）

## 第三章　神聖同盟と自由獨立運動

**神聖同盟**　ヨーロッパ諸國が大亂の後を受けて一意國家の安定を望んだ時、ロシヤ皇帝アレクサンドル一世の首唱により、ロシヤ・オーストリヤ・プロシヤの三國間にキリスト教の博愛主義によつて平和を維持せんとする同盟が結ばれた。これを神聖同盟（Holy Alliance）といふ。列國の中、イギリスを除く外は概ねこれに加はつた。當時各國の政府は革命の



メッテルニヒ（一八五九歿）

自由主義運動の抑壓

モンロー主義の宣言（一八二三）

メッテルニヒ

モンロー

再發を恐れ、保守制壓の政治を施して、革命前の政治の復活に努めたが、オーストリヤの宰相メッテルニヒ（Metternich）はこの神聖同盟を利用して、諸國に勃興した自由主義の運動を抑壓し、久しく列國間に勢力を振つた。

**アメリカ諸國の獨立**　先にナポレオンがポルトガル及びイスパニヤを併合するや、アメリカ大陸に於ける兩國の植民地は、一時本國より分離したが、ヨーロッパの平和が回復して舊に復するに至つても、なほ自由獨立を持續せんとして本國と交戰し、相次いで獨立した。この際、メッテルニヒは、神聖同盟の精神に反するものとして、同盟の力を以てこれを抑壓せんとしたが、時のアメリカ合衆國の大統領モンロー（Monroe）が、その獨立を承認して、ヨーロッパ列國がアメリカ大陸諸國に干渉するは

合衆國に敵意を表するものであると宣言し、これに制肘を加へたので、遂にその目的を達し得なかつた。次いでイギリスも亦その獨立を承認したので、神聖同盟の保守政策は遂に破れた。モンローの宣言はこの後永く合衆國外交の大方針となつた。

ギリシヤ獨立を企つ（一八二一）

**ギリシヤの獨立**　アメリカに於けるイスパニヤ・ポルトガルの植民地が獨立を圖つた時、ヨーロッパ大陸にあつても、久しくトルコの壓制に苦しんだギリシヤが亦獨立を企てた。ヨーロッパ諸國民の同情はこれに集り、イギリスの詩人バイロン（Byron）を始め、行いてこれを援けるものが多かつたが、エジプトの大守メヘメット・アリ（Mehemet Ali）の子イブラヒム（Ibrahim）が、トルコ帝の命を奉じて來り攻めるに及んで、ギリシヤは殆どこれに壓

バイロン（一八二四歿）
イブラヒム（一八四八歿）

ギリシヤの獨立承認（一八二九）
オットー王の即位（一八三二）
選擧區改正案通過（一八三三）

伏されんとした。この時、イギリス・ロシヤ・フランスの三國はメッテルニヒの主張をも顧みず、相同盟してギリシヤを援け、トルコ軍を破つて遂にこれを屈せしめ、トルコをしてギリシヤの獨立を承認するに至らしめた。こゝに於て、ギリシヤは獨立王國となり、ドイツのバヴァリヤ（Bavaria）の王子オットーが迎へられてその王位に即いた。かくて神聖同盟は全く崩壞して、各國は自國の利害に從つて自由の行動を取るに至つた。

## 第四章　イギリスの議會政治の發達

**選擧區改正と奴隷廢止**　イギリスに於ては、產業革命の結果大工業が興り、各地に盛衰を生じて、人口の密度にも大變化を來した。然るに選擧區は舊のまゝにして、代議士の多くは地主貴族より出で、頗る均衡を失したので、選擧區改正論が起り、遂にその改正案が議會を通過して、所謂腐敗選擧區（Rotten Borough）は廢止され、商工業によつて勃興した都市が新に選擧區となつた。これより商工業者は次第に政治上に勢力を得

舊教徒自由案通過（一八二九）
奴隷廢止案通過（一八三三）
ヴィクトリヤ（一九〇一歿）
リチャード・コブデン（一八六五歿）
穀物條令の廢止（一八四六）

るに至つた。選擧區改正案の通過した前後に、舊教徒自由案及び奴隷廢止案も議會を通過して、舊教徒も官吏となり、代議士となることを得るに至り、奴隷の使用も亦禁ぜられた。

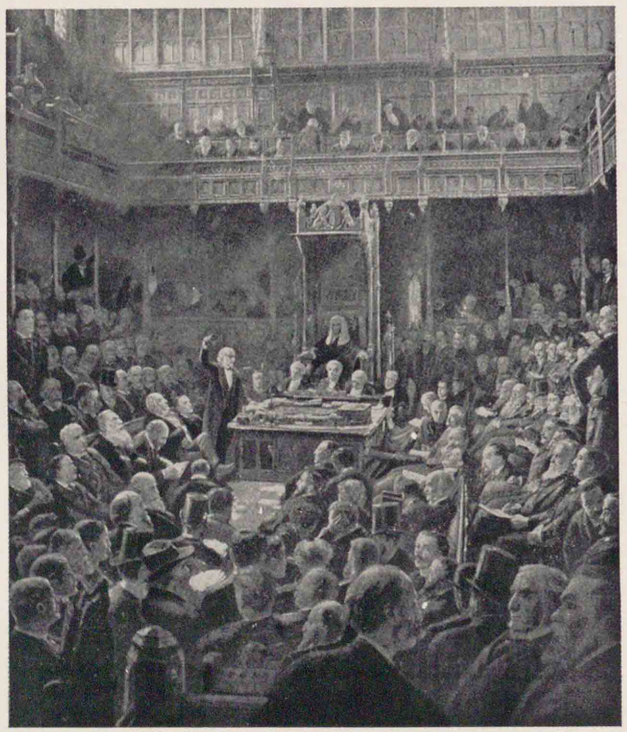
**穀物條令の廢止と自由貿易**　その後ヴィクトリヤ女王の代に、自由貿易論が盛に唱へられ、保護貿易の下にあつた穀物條令は、リチャード・コブデン（Richard Cobden）等の主張により、議會に容れられて廢止された。これよりイギリスは自由貿易をその政策として世界の市場に進出するに至り、商工業は益〻隆盛に赴いた。

ヴィクトリヤ女王

**海上勢力の發展**　イギリスは先にイスパニヤ・オランダ・フランスと戰ひ、海上交通の要地を占領して益〻その

リチャード・コブデン

英國國會議事堂


議會に於けるグラッドストーンの演說

英國國會議事堂

一二一五年、大憲章（マグナーカルタ）が發布せられ、ついで一二六五年國會が創設せられて憲政史上に光明を與へてより、英國の憲政は議會政治の母として世界の模範となつてゐる。議會は下院議長が討議に參加しないことは我が國と同じであるが、上院議長は發言權を有して、何時でも議席について熱辯を揮ふことが出來る。皇帝は議會を召集し、若しくはこれを解散せしむる權能を有し、下院議員の任期は七ケ年である。この圖はその國會議事堂で、ロンドンの建物中最も大きく最も美しく、テームス河畔に臨み、一八四〇年起工せられ、十七年の歳月を要して完成せられたゴチック風の建物である。左端に聳える塔がヴィクトリヤータワーで、その下に上院の議場があり、右端のクロックータワーの下に下院の議場がある。ヴィクトリヤータワーには國旗が揭げられ、クロックータワーにはグリニッチ中央測候所と連絡した直經六メートル程の大電氣時計がある。

議會に於けるグラッドストーンの演說

ウィリヤムーエワートーグラッドストーンは一八〇九年スコットランドの一商人の子として生れた。長じてトーリー黨員となり、盛に自由貿易主義を主張し、パーマストーンの死後自由黨の首領となり、一八六八年には初めて首相となり、それより前後四回この顯職に就いた。一八八〇年二度目に首相となつて內閣を組織した際には、アイルランド問題で失脚した。一八九四年老齡の故を以つて政界を退いたが、一八九八年ハワードの自宅に歿した。彼は政治家、財政家、雄辯家として傑出せる偉才を有し、その公生涯の歷史は直に最近の英國史ともいふべく、高潔なる志操と共に中外に賞揚せられてゐる。

ベコンスフィールド（一八八一歿）
ソルスベリー（一九〇三歿）
グラッドストーン（一八九八歿）

チャールス十世（一八三六歿）
パリーに暴動起る（七月革命）（一八三〇、七月）

勢力を海外に擴めたが、自由貿易政策によつて通商の利を獨占せんとし、世界の各地に領土を獲得して彼我の貿易を隆ならしめ、これを保護するために強大な海軍力を備へて、遂に海上王と稱されるに至つた。

**政黨政治**　議會政治はイギリスに於て最も發達し、議會に多數の議員を持つ政黨が內閣を組織してその政策を實行し、國政の改善に努めた。當時の政界には保守黨・自由黨の二派が對立し、十九世紀後半に於ける保守黨の首領ベコンスフィールド（Beaconsfield）伯・ソルスベリー（Salisbury）侯、自由黨の首領グラッドストーン（Gladstone）は大政治家として廣く名を知られた。

## 第五章　フランス再度の革命

**七月革命**　フランスでは、ルイ十八世が歿して、弟チャールス十世が位を繼いだが、頑迷にして極端な保守的舊政治を行ひ、大に民心を失つたために、パリーに暴動が起り、王はイギリスに出奔したので、王族

ルイ-フィリップ（一八五〇歿）

ベルギーの獨立（一八三〇）

社會主義の發生

又パリーに暴動起る（二月革命）（一八四八、二月）

ルイ-フィリップが迎へられて王位に登つた。これを七月革命といふ。

**七月革命の影響**　七月革命は大に各國の人心を動かし、ポーランド人は獨立を圖つてロシヤに反抗し、ドイツ人・イタリヤ人は統一運動を企てて叛亂を起し、いづれも鎭壓されて目的を遂げなかつたが、獨りベルギー人はその獨立運動に成功し、オランダより分離して列國間に永世中立地たることを承認された。イギリスに於ける多年の問題たる選擧區の改正も、この革命の影響によるものであつた。

**二月革命**　初めフランス王ルイ-フィリップは自ら「人民の王」と稱し、民心を收めるに努めたが、後、漸く專制に流れ、且つ外交にも失敗を重ねて、日々に民望を失つた。當時社會主義は工業地帶に於て貧困な勞働者の救濟のため唱へられ、これに伴つて國政の變革を叫ぶものが漸く多く、又もパリーに暴動が起り、王はイギリスに逃れて、遂に

ナポレオン三世

ルイ-ナポレオン大統領となる（一八四八、十二月）

メッテルニヒ、イギリスに遁る

非常處分（一八五一）

ナポレオン三世（一八七三歿）

フランスの第二

共和政府が設立さるゝに至つた。これを二月革命といふ。やがて新憲法が制定され、ルイ-ナポレオン（ナポレオン一世の甥。）が選ばれて大統領となつた。

**二月革命の影響**　二月革命の影響は忽ち各國に波及し、到る處に革命的動亂を生じたが、オーストリヤのウィーン（Wien）にも亦暴動が起り、宰相メッテルニヒはイギリスに遁れ、暴動は漸く軍隊の力によつて鎭定された。ホンガリヤ（匈牙利）（Hungary）人はこの機に乘じてオーストリヤより獨立せんと圖り、一時成功したが、ロシヤがオーストリヤを援けるに及んで鎭壓され、イタリヤの獨立運動も亦オーストリヤ軍のために討壓された。この時、ドイツにも統一運動が企てられたが、遂に行はれなかつた。

**フランスの第二帝政**　ルイ-ナポレオンは伯父大帝の志を繼いで帝位に登らんと欲し、鋭意民心の收攬に努めたが、遂に非常處分（クーデター）（Coup d'état）を斷行し、憲法を改めて大統領の任期を十年に延長し、更に翌年選ばれて帝位に登り、ナポレオン三世と稱した。フランスはこゝに再び帝政と

帝政（一八五二―一八七〇）
クリミヤ戰役（一八五四―一八五六）
ロシヤ、トルコに向つて開戰す（一八五三）
セバストポール陷落（一八五五）
パリー和約（一八五六）

なつた。

**クリミヤ戰役**　ナポレオン三世は帝位を鞏固ならしめるために、大に外に向つて國威を輝かさんとし、その機會を窺つてゐたが、會〻ロシヤがトルコの衰弱に乘じて、同國内のギリシヤ教徒の保護を名とし、トルコに侵入したのを見て、翌年イギリスと同盟してトルコを援け、ロシヤに向つて開戰し、海陸相應じてクリミヤ半島のセバストポール（Sebastopol）要塞を攻撃（Crimea）した。然るにロシヤはよくこれを防ぎ、同盟軍も一時苦境に立つたが、サルヂニヤ（Sardinia）軍の來り援けるに及んで大に勢を得、遂にこれを陷れた。ここに於て、ロシヤは關係列國とパリーに會して和約を結び、黑海を中立として各國戰艦の航行するを禁じ、ロシヤ・トルコ兩國はその沿岸に造兵廠を設けざるべきことを約し、ロシヤはトルコ國内のギリシヤ教徒の保護權の要求を撤回した。この戰役に於て、同盟軍の主腦はナポレオン三世であつたから、これよりその名聲は全ヨーロッパに轟いた。

英佛聯合軍セバストポール要塞のマコラフ砲臺を占領す

ナイチンゲール（一九一〇歿）
イタリヤの國民主義運動
ヴィクトル・エマニュエル二世（一八七八歿）
カヴール（一八六一歿）

**赤十字社の起因**　この戰役の際、イギリスの婦人ナイチンゲール（Nightingale）は、同志の婦人と共に戰地に赴いて傷病兵の看護に努めた。この彼女の博愛的事業は、後年赤十字社の創立される起因となつた。

## 第六章　イタリヤの統一

**サルヂニヤの統一運動**　イタリヤはウィーン會議後も多くの小國に分れてゐたので、これを統一せんとする國民的運動が屢〻企てられたが、オーストリヤがその北部を領してこれを抑壓したために、いつも失敗に終つた。サルヂニヤ王ヴィクトル・エマニュエル二世（Victor Emmanuel）は夙に國民的統一の大業を成就せんと欲し、賢相カヴール（Cavour）を用ひて内政を刷新

イタリヤ・オーストリヤ戰役（一八五九）

マジェンタ及びソルフェリノの戰（一八五九）

ヴィクトルエマニュエル二世

し、軍備を充實し、クリミヤ戰役にもイギリス・フランスを援けてその歡心を求め、次いでナポレオン三世と密約を結び、オーストリヤに向つて戰を開いた。

**イタリヤ・オーストリヤ戰役**　イタリヤ諸國の義勇兵は競つてサルヂニヤ王の軍に馳せ加はり、ナポレオン三世も亦約の如く兵を率ゐて來り援け、オーストリヤ軍とマジェンタ（Magenta）及びソルフェリノ（Solferino）に戰つて大にこれを破り、將にオーストリヤの勢

ルーヴカ

チューリヒの和約（一八五九）

イタリヤ王國の建設（一八六一）

力をイタリヤより一掃せんとした。然るにナポレオン三世がサルヂニヤの強國とならんことを惧れ、突然オーストリヤと和したので、サルヂニヤは已むことを得ず、オーストリヤとチューリヒ（Zurich）の和約を結び、ロンバルヂヤ（Lombardy）を得て戈を收めた。

**イタリヤ王國の統一**　既にして北部イタリヤの諸國は、サルヂニヤに併合せんことを熱望して、皆サルヂニヤ王の權下に屬し、愛國者ガリバルヂー（Garibaldi）は義勇兵を率ゐてシシリー島を征し、更にナポリ（Naples）をも攻略してこれをサルヂニヤ王に献じたので、王はヴェニス（Venice）及び法皇領を除く外、イタリヤ全土を統一して

ガリバルヂー

イタリヤ王の位に卽いた。その後、イタリヤはプロシヤ・オーストリヤ戰役の際、プロシヤと結んでオーストリヤよりヴェニスを得、次いで又プロシヤ・フランス戰役に際して法皇領を占領し、都をローマに奠め

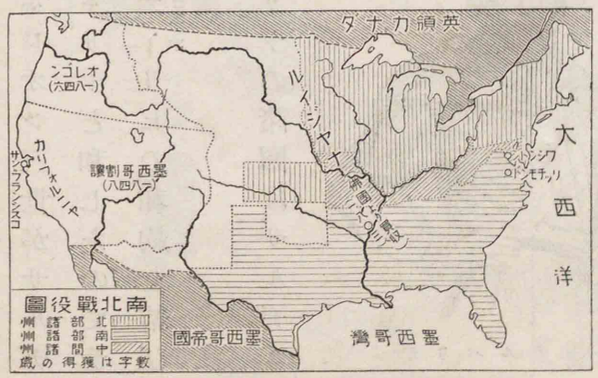
統一の完成（一八七〇）
南北の軋轢

て統一の大業を完成した。

## 第七章　アメリカ合衆國の南北戰役

**原因**　アメリカ合衆國は、獨立以來國勢駸々として進み、領土も次第に擴まつて、遂に太平洋岸にまで達した。然るに、その南部と北部とにては、自ら氣候・風土及び住民の生業を異にし、北部諸州が商工業を主としたのに反して、南部諸州は多く奴隸を使役して農業に從事したが、北部の人士は奴隸使役の人道に背くことを論じてその廢止を唱へ、南部の人士はその耕作に必要なるを以てこれに反

リンカーン




リンカーン大統領となる（一八六〇）
南北戰役（一八六一―一八六五）
リー（一八七〇歿）
グラント（一八八五歿）
リッチモンド陷落（一八六五）
奴隸廢止令の布告（一八六三）
ナポレオン三世の野望
メキシコの帝政（一八六三）

對し、多年に亙つて相爭ひ、且つ關稅問題についても南北は各〻その利害を異にした。當時奴隸廢止論者として知られたリンカーン（Lincoln）が大統領となるや、南部諸州は斷然北部と分離して獨立するに決し、別にアメリカ聯邦（Confederate States of America）を組織して、翌年北部と戰端を開いた。

グラント

**經過**　初め南軍の將リー（Lee）は頻に北軍を擊破したが、後に形勢は一變して北軍の勢日に振ひ、その將グラント（Grant）は遂に南部の首府リッチモンド（Richmond）を陷れて勝を制し、遂に南軍を屈せしめた。この間交戰四年に亙つて、南北は再び合一され、奴隸廢止令は全國に施行された。

**メキシコの帝政**　合衆國が內亂のために他を顧みる暇のなかつた時、フランス皇帝ナポレオン三世は、この機に乘じて兵を動かし、メキシコの黨爭に干涉して共和政治を廢し、フランスの保護の下に一帝國を建てた。然るに、メキシコ人はこれに反對し、合衆國も亦內亂の

共和政の再興（一八六七）

平ぐに及んで、モンロー主義により固くこれに抗議し、撤兵を迫つたので、ナポレオン三世も遂に屈してこれに從ひ、帝政は覆されて再び共和政となつた。

ウィリヤム一世（一八八八歿）
ビスマルク（一八九八歿）
モルトケ（一八九一歿）
プロシヤの軍備擴張

## 第八章　ドイツの統一

### 統一の計畫

ドイツはウィーン會議の決議により聯邦國となつたが、なほ諸邦割據の舊態を保ち、殊にオーストリヤ・プロシヤの兩國の反目は、その後屢〻起つた統一運動をいつも失敗に終らしめた。然るにプロシヤ王ウィリヤム（William）一世が王位に登るや、ドイツの國民的統一を志し、賢相ビスマルク（Bismarck）、良將モルトケ（Moltke）を用ひて大に軍備を擴張し、オーストリヤを打破してその統一を完成せんとし、徐に機の到るを待つた。

ウィリヤム一世

プロシヤ・オーストリヤ戰役（一八六六）
プラーグの和約（一八六六）

### プロシヤ・オーストリヤ戰役

會シュレスウィヒ・ホルスタイン（Schleswig Holstein）の二州がデンマルクより分離せんとし、援をドイツに求めたので、プロシヤ・オーストリヤの兩國はこれを援けてデンマルクを破り、二州を取つたが、その處分に關して兩國は意見を異にし、遂に開戰するに至つた。この時、ドイツの大半はオーストリヤに與みしたが、プロシヤはイタリヤと同盟し、且つモルトケの巧妙なる作戰によつて頻に敵軍を破り、遂にオーストリヤをしてプラーグ（Prague）の和約を結ばしめた。この和約によつて、シュレスウィヒ・ホルスタイン二州はプロシヤ領となり、オーストリヤは聯邦より離脫し、ヴェニスはイタリヤに割讓された。かくてプロシヤはマイン（Main）河以北の諸國を糾合し、北ドイツ聯邦を組織してその盟主となつたが、次いで

ビスマルク

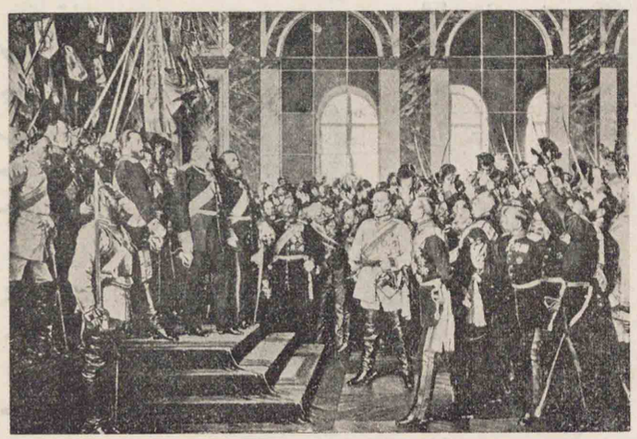
モルトケ

以南の諸國も亦別に聯邦を作つて、これと同盟を約するに至つた。

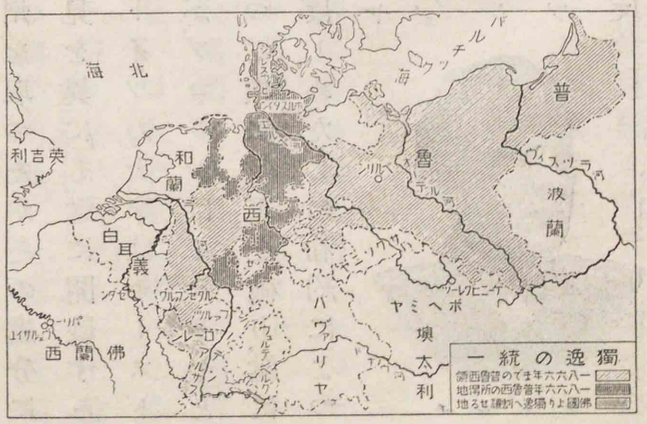
プロシヤ・フランス戰役（一八七〇―一八七一）

## プロシヤ・フランス戰役

プロシヤがオーストリヤを破つて國威を輝かすや、フランスはその成功を嫉むと共に、大に畏怖の念を抱くに至つた。時にメキシコ事件に失敗して民望を失つたフランス帝ナポレオン三世は、プロシヤを挫いて名聲を回



ドイツ皇帝の即位式






ナポレオン三世の降服（一八七〇）

ドイツ帝國の建設（一八七一）

復せんとし、會、イスパニヤに内亂を生じて、その革命政府がプロシヤの王族を迎立せんとすることを聞くや、これに抗議して、以後プロシヤの王族をイスパニヤ王たらしめざるべき誓約を要求し、プロシヤを激せしめて戰端を開いた。プロシヤはこの機に於てフランスを紛碎し、ドイツの統一を遂げんと欲し、南北聯邦諸國の援を得て直ちに大軍を發し、連戰して遂にナポレオン三世をセダン（Sedan）に降し、進んでパリーを包圍した。

**統一の成就**　この間に、ドイツ統一の機運は愈熟し、南北の聯邦諸國は議を定めて、プロシヤ王ウィリヤム一世をドイツの世襲皇帝に推戴し、敵國と砲火交はる間に於て、ヴェルサイユ宮殿にその即位式を擧げ、ドイツ統一の大業を成就した。

**ヴェルサイユの和約**　セダンの敗報の傳はるや、フランスは帝政を廢して共和政を布き、大に防戰に努めたが、パリーを包圍されて五箇月に及び、遂に城を開いて和を請ふの已むなきに至り、フランスの代

チエール（一八七七歿）
ヴェルサイユの和約（一八七一）

ロシヤ・トルコ戰役（一八七七—一八七八）

表チエール（Thiers）はビスマルクとヴェルサイユに會見し、アルサス・ローレン（Alsace-Loraine）の二州を割き、償金五十億法（フラン）を支拂ふことを約して局を結んだ。

## 第九章　ロシヤ・トルコ戰役

**戰役の原因**　トルコはギリシヤを失つた後も、なほ暴政を改めず、バルカン半島の諸民族を苦しめたので、領内のボスニヤ人（Bosnia）・ヘルゼゴヴィナ（Herzegovina）人等は叛亂を企て、次いで他の諸州もこれに應じて、勢が甚だ盛であつた。この時、クリミヤ戰役によつて一旦南侵の志を挫かれたロシヤは、これを好機としてトルコ領内のキリスト教徒を救ふを名とし、トルコに向つて戰を開いた。

露西亞
墺太利
匈牙利
ヤニスボ
ヤビルセ
ヤニマルカ
ヤリガルド
ヤリメル東
土耳其
伊太利
希臘
カニロサ
ルーマニア
ブルガリア
セルビア
モンテネグロ
ボスニア
ヘルツェゴビナ
ルーメリア
ブルガリア
ルーメリア
ブルガリアの境界
ルーメリアの境界
ルーマニアの境界
ルーマニアの境界
ルーメリアの境界
ブルガリアの境界
ルーメリアの境界
ルーマニアの境界
ルーメリアの境界
ルーマニアの境界
ルーメリアの境界
ルーマニ

ベルリン條約（一八七八）

諸發明
フルトン（一八一五歿）
スチヴンソン（一八四八歿）
ガウス（一八五五歿）
ベル（一九二二歿）

かれ、その結果サン-ステファノ條約に大修正を加へて、新にベルリン條約が結ばれ、ロシヤは僅に黑海東岸の地を得るに止り、セルビヤ（Serbia）・モンテネグロ（Montenegro）及びルーマニヤ（Roumania）は獨立を承認され、ブルガリヤ（Bulgaria）はトルコの朝貢國となり、イギリスはサイプラス島（Cyprus）の租借權を得て東地中海の制海權を鞏固にし、オーストリヤはボスニヤ・ヘルゼゴヴィナの行政權を握り、ギリシヤも亦テッサリヤ（Thessalia）を割讓された。

## 第十章　近世の西洋文化

**最近の文化**　十八世紀末より十九世紀を經て、今世紀に入り、各種の發明・發見は相次いで現はれ、物質文明は驚くべき進歩をなした。

蒸氣力と電氣力との應用によつて、既に十九世紀の初め、汽船はフルトン（アメリカ人）（Fulton）により、汽車はスチヴンソン（イギリス人）（Stephenson）によつて創造され、電信機はガウス（ドイツ人）（Gauss）によつて發明された。晩近ベル（アメリカ人）（Bell）は電話機を案出し、エヂソン（アメリカ人）（Edison）は蓄音機及び電燈を、マルコニー（イタリヤ人）（Marconi）は



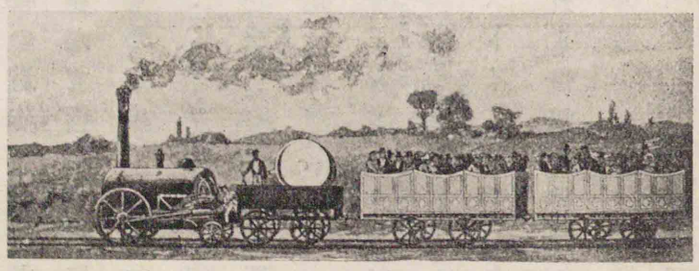
エヂソン（一九三一歿）
マルコニー（一九三七）

科學の發達
ヘルムホルツ（一八九四歿）
ダーウィン（一八八二歿）
レントゲン（一九二三歿）
キュリー（夫）（一九〇六歿）
キュリー（妻）（一九三四歿）
コッホ（一九一〇歿）
ラプラース（一八二七歿）
リッテル（一八五九歿）
ファラデー（一八六七歿）

無線電信を發明した。かくて交通・通信の便は大に開け、世界の各地は著しく隣接された。最近又、飛行機・飛行船・潛水艦・戰車等の發明があつて、新鋭の武器として威力を示すのみならず、飛行機・飛行船は平時の交通機關としても利用されるに至つた。

ダーウィン

科學に於ては、ヘルムホルツ（ドイツ人）（Helmholtz）は勢力不滅說を、ダーウィン（イギリス人）は生物進化論を唱へて、學界に偉大な影響を與へた。又、レントゲン（ドイツ人）（Röntgen）はX光線を、キュリー夫妻（フランス人）（Curie）はラヂウムを發見して名聲を博し、コッホ（ドイツ人）（Koch）は細菌學の研究によつてコレラ菌・結核菌を發見し、その高弟北里柴三郎はジフテリヤ血精療法を發見して醫學上に貢獻した。その他、天文學にはラプラス（Laplace）


初期の汽車

リービッヒ（一八七三歿）
フィヒテ・（一八一四歿）
ヘーゲル（一八三一歿）
ショペンハウエル（一八六〇歿）
スペンサー（一九〇三歿）
ミル（一八七三歿）
コント（一八五七歿）
ランケ（一八八六歿）
ゲーテ（一八三二歿）
シルレル（一八〇五歿）
バイロン（一八二四歿）
テニソン（一八九五歿）
カーライル（一八八一歿）

ラケン

ラース（フランス人）、地理學にはリッテル（ドイツ人）Ritter、物理學にはファラデー（イギリス人）Faraday、化學にはリービッヒ（ドイツ人）Liebig の如き大家が輩出して、諸學の進歩を促した。

**哲學及び文學**　科學と並んで哲學・文學に於ても不朽の名を留めたものが少くなかつた。哲學には、フィヒテ・ヘーゲル・ショペンハウエル（以上ドイツ人）Fichte Heger Schopenhauer・スペンサー（イギリス人）Spencer 等を出し、ミル（イギリス人）Mill の經濟學、コント（フランス人）Comte の社會學、ランケ（ドイツ人）Ranke の史學等は、いづれも學界の權威とされた。

ゲーテ

文學に於てもゲーテ・シルレル（以上ドイツ人）Goethe Schiller・バイロン・テニソン・カーライル（以上イギリス人）Byron Tennyson Carlyle・ユーゴー・ゾラ（以上フランス人）Hugo Zola・エマーソン・ロングフェロー（以上アメリカ人）Emerson Longfellow・トルストイ（ロシヤ人）Tolstoi 等の名家を出し、その作品はいづれも世界に傳誦された。

又、ミレー（フランス人）Millet の繪畫、ロダン（フランス人）Rodin の彫刻の如きも盛名があつた。

ユーゴー（一八八五歿）
ゾラ（一九〇二歿）
エマーソン（一八八二歿）
ロングフェロー（一八八二歿）
トルストイ（一九一〇歿）
ミレイ（一八七五歿）
ロダン（一九一七歿）
民主主義
國民主義
民族主義
帝國主義
國家主義
勞働問題
社會主義

**新思想と新主義**　物質文明の進歩と、フランス革命によつて喚起された自由思想とは、各方面に種々の影響を及ぼして、社會を一新せしめた。

十九世紀の初に於ては、國民は自由・民權を唱へ、君主は專制主義を執り、兩者の衝突が絶えなかつたが、民主主義は次第に優勢となつた。又、言語・風俗・種族等を一にするものが、相結合して國家を建設せんとする國民主義或は民族主義も强盛となり、更に又、弱國を威壓して自國の權益を擴張せんとする帝國主義も起り、これに抗して國家の獨立を維持せんとする國家主義も生ずるに至つた。産業革命の結果、資本家と勞働者との利害が相容れず、勞働爭議を生ずるに至つたことも、亦最近の趨勢であつて、これがために社會の改善を目的とする社會主義が叫ばれ、遂には常規を逸して極端な共産主義を唱へるものすら起つた。こゝに於て、各國政府はいづれも工場法、保險法、その他種

國家社會主義

種の施設によつて勞働者を保護し、貧富の懸隔を緩和して勞資協調を計らんとするに至つた。これを國家社會主義といふ。

**各種の文化施設**　一面交通機關の著しい發達に伴つて、國際關係は益〻親密となり、博愛・慈善の運動と共に種々の平和事業は企てられ、孤兒院・養老院・慈善病院等が到る處に設けられ、萬國赤十字社の如き大規模のものも、亦スウィスの人ヂュナン(Dunant)の主唱に基づいて、戰時の傷病者救護を目的として設立された。その他萬國郵便聯合・萬國電信聯合の如きも實現され、萬國博覽會、各種學術の萬國會議、オリンピック大會等も相次いで催されるに至つた。

ヂュナン（一九一〇歿）

# 第五篇　列强の世界政策と各國均勢の保持

## 第一章　列强のアフリカ經略

歐米に於ける國民主義の發展によつて、大小の國民的國家が建設されるや、列國は競うて國力の充實と軍備の擴張とを圖ると共に、廣く世界に向つて帝國主義的政策を採ることに力を用ひた。

**イギリスのアフリカ經略**　エジプトはトルコ領であつたが、十九世紀後半より殆ど獨立の姿をなし、スエズ(Suez)運河を開鑿して世界の交通に貢献した。然るに、財政紊亂のためにイギリス・フランス二國の干渉を招き、遂にイギリスの勢力下に立つに至つた。この頃、イギリスはスーダン(Soudan)を征服してファショダ(Fashoda)及びナイル(Nile)河上流地方を收め、又前にオランダより得たケープ(Cape)植民地の北部に興つたオランダ人の二共和國（トランスヴァール(Transvaal)・オレンジ(Orange)）に黃金・金剛石等が多量に產出するを見

イギリスの經略
スエズ運河の完成（一八六九）
イギリスのスーダン征服（一八九八）
南アフリカ戰役（一八九九―一九〇二）

南アフリカ聯邦の建設（一九一〇）

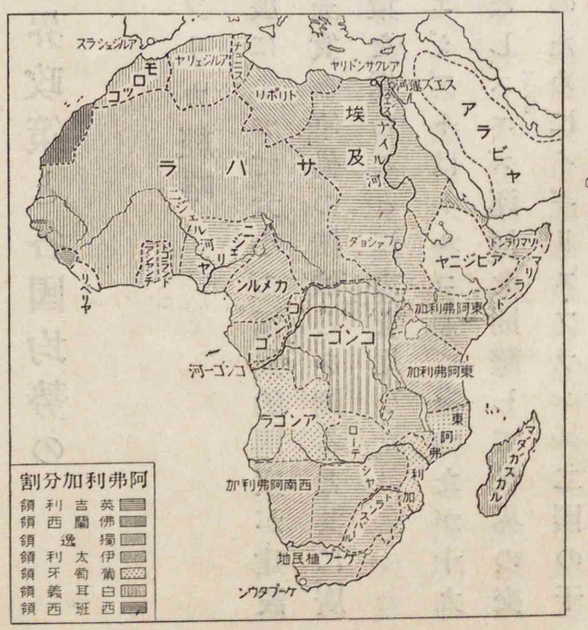
て、これと戰つて兩國を滅し、この地方に南アフリカ聯邦を建設して、アフリカ縱貫の計畫を完うした。

フランスの經略

**フランス・ドイツのアフリカ經略**　フランスは十九世紀の初頃よりアフリカの經略を企てて、その北岸のアルジェリヤ（Algeria）を取り、次いでチュニス（Tunis）を併せ、漸次南下してサハラ（Sahara）の大部を收め、マダガスカル（Madagascal）島を植民地となし、アフリカ横斷の計畫を立てて一時イギリスと衝突したが、兩國の協調によつて事なきを得た。その後モロッコ（Morocco）も亦フランスの保護國となつた。

モロッコ、フランスの保護國となる（一九一二）

この頃、ドイツも漸くアフリカの分割に加はり、中部と南部




ドイツの經略





ベルギーの經略

との東西兩岸に領土を得た。

**ベルギー・イタリヤのアフリカ經略**　ベルギーは十九世紀の末に、アフリカ中部にコンゴー自由國（Congo Free State）を建て、その王を兼ねたが、後にこれを併せてその領土とした。同じく十九世紀末に、イタリヤはアフリカの紅海岸及び印度洋岸に領土を得たが、その後、更にトルコと戰つて地中海岸のトリポリ（Tripoli）を收めた。

コンゴー自由國の建設（一八八五）

コンゴー自由國ベルギー領となる（一九〇八）

イタリヤの經略

トリポリ、イタリヤ領となる（一九一二）

## 第二章　列强のアジヤ及び大洋洲經略

**列强のアジヤ方面經略**　イギリスは既に印度を領し、マレイ半島（Malay）より支那に進出して、シンガポール（Singapore）・香港・九龍をその手に收め、威海衛を租借し、ビルマ（Burma）を併せ、アフガニスタン（Afghanistan）を保護國となし、西藏に勢力を扶植した。フランスはナポレオン三世の時安南の侵略を始め、後これを取り、更に支那に進出して廣州灣を租借し、その西南地方に勢力を延ばした。ロシヤは既に廣漠たるシベリヤ（Siberia）を領したが、地中海進出

シンガポール（一八二四）

香港（一八四二）

九龍（一八六〇）

ビルマ（一八八五）

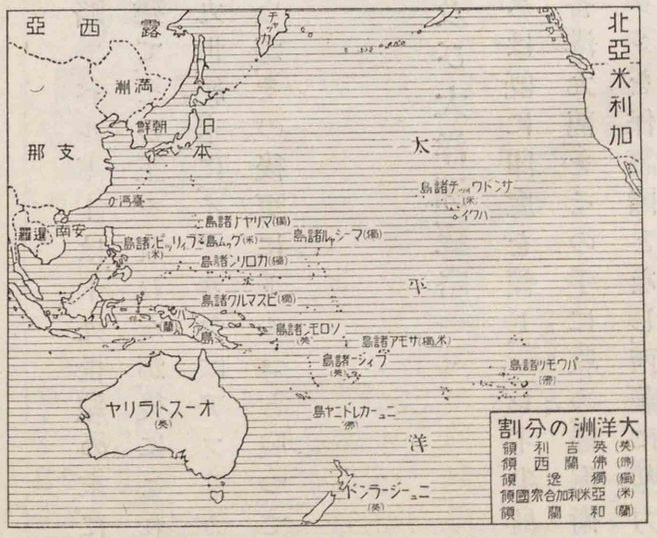
アフガニスタン（一八八一）

威海衛（一八九八）

安南（一八八三）
廣州灣（一八九八）
旅順・大連（一八九八）
膠州灣（一八九八）
大洋洲の分割
オーストラリヤ聯邦成る（一九〇〇）

が意の如くならなかつたので、太平洋と印度洋とに出でんとし、ウラヂヴォストック港を根據地として東亞を脅かし、支那に進出して旅順・大連を租借し、蒙古・滿洲・新疆地方に勢力を延ばして、漸次アフガニスタンに迫り、これを隔てイギリス領印度を脅威した。ドイツはトルコを懷柔してバグダード鐵道の敷設に着手し、進んでペルシヤ灣に出でんとし、又、支那よりは膠州灣を租借して東洋の根據地とした。

**大洋洲の分割**　イギリスは十九世紀の初より、大洋洲の植民に努め、ニュージーランド・フィージー附近の島嶼を收めたが、後、オーストラリヤ大陸を併せ、オーストラリヤ聯邦を組織してその自治を許した。ドイツも亦大洋洲に着目し、ビスマルクが首相となつてより、ビスマルク・マーシャル・マリヤナ等の諸島を取つた。この他、フランスはニューカレドニヤ等を、オランダはジャヴァ・スマトラ・ボルネオ等を割取した。






合衆國の帝國主義
フィリッピン・ハワイ合衆國領となる（一八九八）
パナマ運河の開通（一九一四）
三帝同盟（一八七二）

**アメリカ合衆國の發展**　アメリカ合衆國は南北戰爭のために一時疲弊したが、その後、產業も大に興り、國力も内に充ちたので、漸くモンロー主義を離れて帝國主義を取り、イスパニヤと戰つてキューバを獨立せしめ、フィリッピン諸島を取り、又、ハワイを併せた。その後、同國の勢はいよ〳〵振ひ、パナマ運河を開いて大西・太平兩洋を連絡し、大に海軍を擴張して益〻東洋に進出せんとする勢を示した。

## 第三章　大戰前のヨーロッパの情勢

**三大勢力の鼎立**　先にドイツはフランスと戰つてこれを屈せしめた後、その復讐に備へるために、ロシヤ・オーストリヤ兩國と所謂三

三國同盟（一八八三）

二國同盟（一八九一）

日英同盟（一九〇二―一九〇五改訂）

三大勢力の鼎立

帝同盟（ドイツ皇帝ウイリヤム二世・ロシヤ皇帝アレクサンドル二世・オーストリヤ皇帝フランシス・ジョセフ）を結んだが、ベルリン會議にロシヤの恨を受けるに及んで、更にオーストリヤと防守同盟を約し、次いでイタリヤを誘つて三國同盟を締結した。フランスはドイツに敗れてより、常にこれに報復せんと欲し、ロシヤのドイツに好からざるを見るや、これと約して二國同盟を結び、以て三國同盟に對抗した。イギリスはいづれの國とも同盟せず、所謂「名譽の孤立」（Sprendid Isolation）を守つたが、常にロシヤの東ヨーロッパ及び印度に於ける侵略を防止するに努め、極東に於て日本がロシヤと衝突するや、日本と同盟してロシヤを制した。かくてヨーロッパ列國は、この三大勢力の鼎立によつて、その均衡が維持されたが、その後ドイツが大に海軍を擴張し、又、その商工業がイギリスの商工業を壓せんとするに及んで、イギリスは、フランス・ロシヤ・イタリヤの三國と協商し、互に親善の關係を結んでドイツに對抗した。かくて武裝的平和は保たれたが、會〻東ヨーロッパに戰亂が起るに及んで、その均勢は遂に破れた。

イタリヤ・トルコ戰役（一九一一―一九一二）

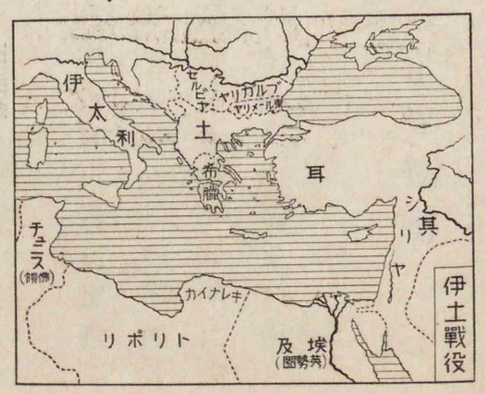
バルカン戰役（一九一二―一九一三）

## イタリヤ・トルコ戰役

イタリヤはトルコがロシヤ・トルコ戰役によつて多くの領土を失ひ、國力の衰頽したのに乘じ、トルコ領トリポリ（Tripoli）を占領してトルコと戰を開いた。このトルコの困厄に乘じ、ブルガリヤ・セルビヤ・モンテネグロ・ギリシヤの四國も亦聯合してトルコ領の分割を企て、トルコに向つて戰を開いたので、トルコは遂にトリポリ及びキレナイカ（Cyrenaica）をイタリヤに割讓して和を結び、專ら四國聯合軍に當つた。

## バルカン戰役

かくてトルコは四國聯合軍の防戰に力を注いだが、勢甚だ振はず、遂に敗れて地を四國に割き、和を講ずるに



ブカレストの和約（一九一三）

アルバニヤ國の新設（一九一三）

至つた。然るに、その割讓地の分配に關してブルガリヤと他の諸國との間に異議を生じ、再び戰は開かれたが、ブルガリヤ軍は敗れ、トルコ・ルーマニヤも亦この機に乘じてブルガリヤに侵入したので、ブルガリヤも遂に和を求めるに至り、各國はブカレスト Bucharest に會して和を結ぶに至つた。かくてトルコはヨーロッパに於ける領土の大半を失ひ、他の諸國はそれ〴〵境を擴め、且つアドリヤ海岸 Adria にアルバニヤ Albania が永世中立國として新設された。

# 第六篇　世界大戰とその後の世界情勢

## 第一章　世界大戰

オーストリヤ皇儲夫妻の暗殺（一九一四、六月十八日）

先にオーストリヤがボスニヤ・ヘルゼゴヴィナを併合するや、二州と民族を同じうするセルビヤ人の反感は日に加はり、會〻ボスニヤに來つたオーストリヤ皇太子夫妻は、排オーストリヤ主義の一青年のために暗殺された。これを動機として、列强間の反目疾視は遂に爆破して、空前の世界大戰を惹き起した。

世界大戰の原因

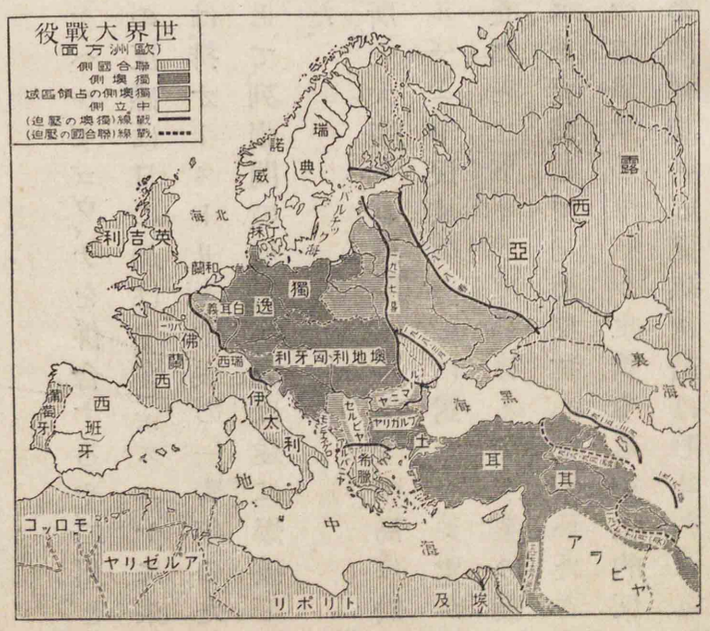
**原因**　その大戰の原因する所を大觀すれば、(一)バルカン半島に於けるドイツ・オーストリヤのゲルマニヤ民族の發展に對し、ロシヤがスラヴ民族擁護の政策に出でたこと、(二)ドイツに於ける商工業の發達と海軍の大擴張とがイギリスを脅威して、その反抗心を招いたこと、(三)ドイツ・フランス戰役以來フランスのドイツに對する復仇的反感がイギリス・イタリヤ兩國との間に親善の關係を結ばしめたこと

戰端開始

等によるものである。

**大戰の破裂**　オーストリヤはドイツの後援を賴んで、直ちに最後通牒をセルビヤに發し、その全部の承認せられざるや、斷然宣戰を布告して戰端を開いた。こゝに於て、ロシヤはセルビヤを援け、ドイツはオーストリヤに黨して互に宣戰し、次いでフランスは二國同盟の關係上ロシヤを援け、イギリスはドイツ軍がベルギーに侵入してその中立を侵害す

ドイツ帝ウィリヤム二世



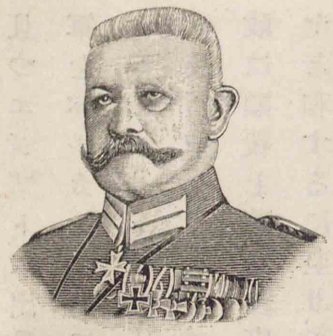





マルヌ河畔の戰（一九一四、九月）
ジョッフル（一九三一歿）
ヒンデンブルグ（一九三四歿）
ワルソーの陷落（一九一五、八月）

るに及んで、ロシヤ・フランスに黨し、我が國も亦日英同盟の義によつてドイツに宣戰し、戰の進むに從ひ、イタリヤ・ルーマニヤ・ポルトガル・アメリカ合衆國・ブラジル及び支那は聯合軍に參加し、トルコ・ブルガリヤはドイツ・オーストリヤに荷擔した。

**大戰役の經過**　ドイツは一擧にフランスを屠り、やがてロシヤに向はんとし、戰亂の初め、先づオーストリヤと共に大軍を發してルクセンブルグ及びベルギーの永世中立地を侵してフランスに入り、將にパリーを突かんとしたが、マルヌ河畔（Marne）に於てフランスの將ジョッフル（Joffre）のために逆擊されて敗れ、兩軍は相對峙するに至つた。こゝに於て、ドイツは主力を東方に轉じ、名將ヒンデンブルグ（Hindenburg）統率の下に、オーストリヤ軍と協力してロシヤ軍を破り、ワルソー（Warsaw）を陷れて敵をその國内に壓迫した。これより先、ドイツはトルコをしてロシヤを侵し、



ヒンデンブルグ

ロシヤのロマノフ朝滅ぶ（一九一七、三月）

膠州灣の攻略（一九一四、十一月）

ドイツの潛水艦活動

合衆國の參戰（一九一七、四月）

且つエジプトに出兵せしめたが、イギリス・フランス聯合軍はその海軍をバルカン半島に進めてこれに對抗した。次いでドイツの猛將マッケンゼンMackensenはドイツ・オーストリヤ軍を率ゐて半島に攻め入り、セルビヤ及びモンテネグロを攻略した。既にしてロシヤに革命が起つて帝政は顚覆し、革命政府は遂に過激派の手に歸してドイツ・オーストリヤと和するに至り、ルーマニヤも亦ドイツ・オーストリヤに降つた。

海上に於ては、優勢なイギリス海軍はイタリヤ・フランス及び日本の海軍と共に常に海上を制し、敵國を封鎖して物資供給の道を斷ち、又、アフリカに於けるドイツの植民地を奪つた。我が軍は戰の初め、イギリスと協力して膠州灣を取り、赤道以北のドイツ領諸島を占領し、印度洋に敵の海軍を掃蕩して、遠く地中海にまで進出した。

初めドイツは海上に於て潛水艦を縱（ホシイマヽ）つて活動したが、各國の船舶に向つて無警告撃沈をなすに及んで、アメリカ合衆國も亦聯合國に加はり、陸海の大軍をヨーロッパの戰場に送つた。これより聯合軍の勢は大に振つた。

ドイツ軍最後の大突撃開始（一九一八、三月）

フォッシュ（一九二九歿）

ドイツの革命

ドイツ休戰を請ふ（一九一八、十一月）

ドイツ共和國となる（一九一八、十一月）

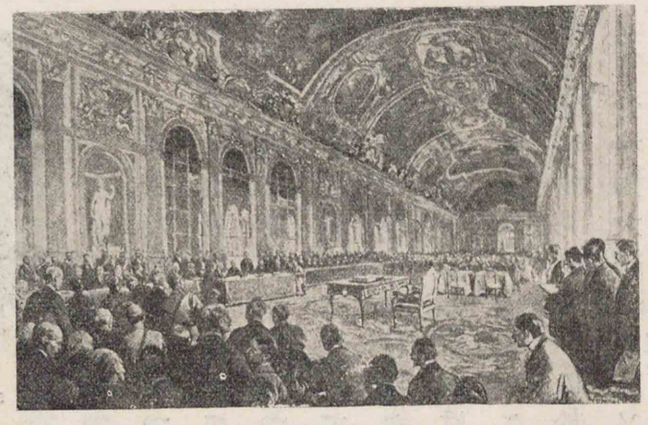
ヴェルサイユ條約（一九一九、六月二十八日）

ウィルソン（一九二四歿）

フォッシュ

ドイツはロシヤと講和した後、最後の突撃を敢行し、勝敗を一擧に決せんとして西部大攻撃を開始した。然るにフランスの將フォッシュの率ゐる聯合軍のために阻止され、却つて猛烈な逆撃を蒙つて退却し、次いでブルガリヤ・トルコ・オーストリヤの與國も聯合軍に降り、内には又革命的騷亂を生じたので、愈〻力窮り、遂に聯合國に向つて休戰を請ふに至つた。かくて休戰條約は締結され、五箇年に亙つて世界を震憾せしめた大戰役も、ドイツの屈服によつて終を告げた。この戰敗により、ドイツ・オーストリヤは共に著しく國威を損し、帝政は破れて共和國となつた。

**ヴェルサイユの講和**　こゝに於て、聯合國はパリーに會して講和條約を定め、ヴェルサイユに於てドイツに調印せしめた。この條約は、アメリカ合衆國大統領ウィルソンWilsonの首唱にかゝる世界の恆久平和を目的



ヴェルサイユ講和條約調印の光景

とした國際聯盟及び勞働規約に關する條項をも含み、ドイツはこれによつて巨額の償金を課せられ、アルサス・ローレン(Alsace Loraine)をフランスに割き、その他著しく本國内の領土を削られ、又、悉く海外の植民地を失つた。オーストリヤ・ブルガリヤ・トルコに對する講和條約も亦次いで成り、オーストリヤは分裂し、トルコは殆どヨーロッパの領土を失ひ、そのアジヤ領も亦縮小されたヤ。而してドイツ領植民地及びアジヤトルコの一部はイギリス・フランス・日本の委任統治下に置かれた。

**國際聯盟**　國際聯盟はアメリカ合衆國大統領ウィルソンの首唱に基づき、世界平和の協力維持を目的とするもので、イギリス・フランス・日本・イタリヤ

講和條約調印後歸路に就ける三巨頭
ウィルソン・クレマンソー・ロイド・ジョージ

の四大國を始め、世界の獨立國は大半これに加盟したが、合衆國は國内に反對があつて、遂に加入しなかつた。その後ドイツ・オーストリヤもこれに加はり、次いでロシヤも加盟するに至つたが、我が國は滿洲國の承認に關して、ドイツは軍備制限に關して、聯盟諸國と意見を異にし、相次いで脱退し、最近イタリヤも亦エチオピヤ(Ethiopia)占領に關して聯盟に脱退を通告した。

## 第二章　大戰後の世界情勢

### 國境の移動と諸小國の新興

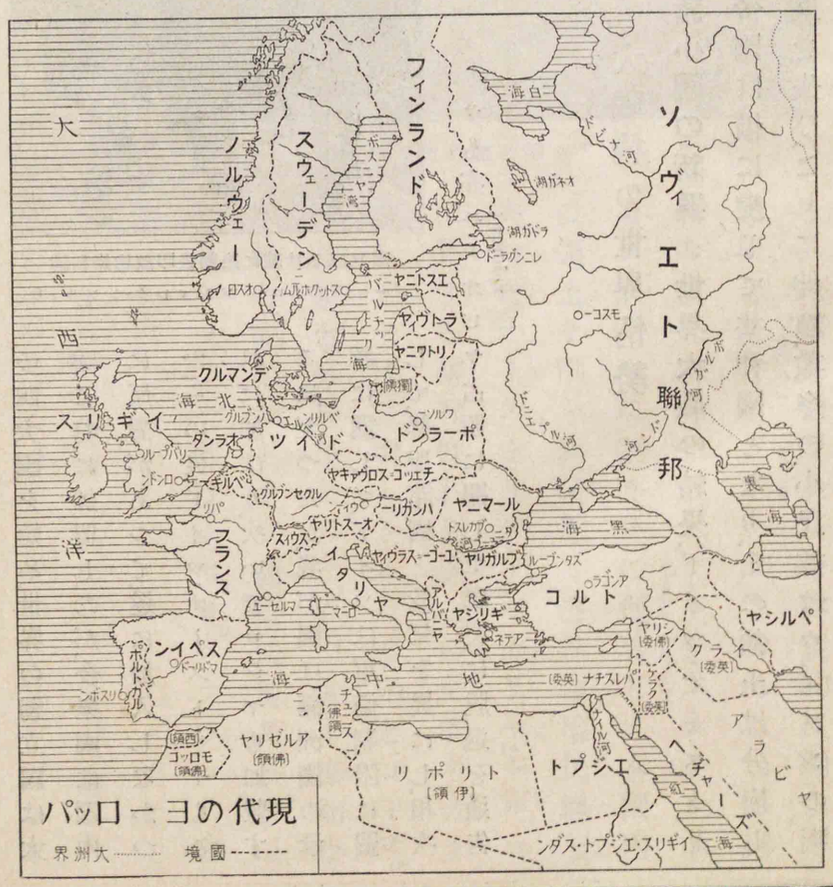
世界大戰の結果、ドイツ・オーストリヤ・ロシヤの三大帝國は俄に變じて共和國となり、その領土は分崩して全く戰前の勢威を失ひ、これに伴ひ、數多の小民族はウィルソンの唱

新獨立國

へた民族自決主義によつて獨立し、ポーランド・チェッコ-スロヴァキヤ・Czecho-slovakia ユーゴー-スラヴィヤ・Yugo-slavia フィンランド・Finland エストニヤ・ラトヴィヤ・Esthonia Latvia リトワニヤ・Lithuania ヘヂャーズ・Hedjaz 等の新興國を見るに至つた。又、アイルランド・Ireland は自由國となつて自治を許され、エジプトはイ

アイルランド自由國となる（一九二二）

エジプト獨立王國となる（一九二二）


現代のヨーロッパ
大洋
西
海
ソヴィエト聯邦
フィンランド
スウェーデン
ノルウェー
ポーランド
ドイツ
ドンラーポ
ヤニマール
ヤシルペ
ヤシリギ
コルト
ヤリガルド
ヤウラス-ゴーユ
ヤリトスーオ
ヤキャウロス-ゴッエチ
ヤウトラ
ヤニワトリ
ヤニトスエ
ヤリゼルア
ヤリ
ヤ
ヤ
ヤ

トルコとギリシヤとの紛爭（一九二三）

フランスとドイツとの紛爭（一九二三）

ロカルノ條約（一九二五）

支那と日本との紛爭（一九二〇）

合衆國と日本との紛爭（一九二一）

ワシントン會議（一九二一、十一月―一九二二、二月）

を爭つたが、結局フィウメはイタリヤに屬した。トルコのケマル・パシャは聯合國の講和條件を不當とし、政府をアンゴラに立てて聯合國に反抗し、ギリシヤ軍と戰つてこれを破り、ローザンヌ條約によつて、スミルナの外に東トラキヤを回復した。フランスはドイツが財政困難のために償金を支拂ひ得ざるや、ベルギーと謀つてドイツの炭坑地ルール地方を占領したが、イギリス・アメリカ等の斡旋によつて、その支拂方法を緩和することとなつて撤兵した。次いでイギリス・フランス・イタリヤ・ベルギー・ドイツ・ポーランド及びチェッコ・スロヴァキヤの七國は、ロカルノに會して相互の安全保證を議定した。支那は膠州灣の直接還付を唱へて我が國に反對したが、遂に失敗に終つた。又、アメリカ合衆國はヤップ島の委任統治について異議を唱へたが、同島は我が國の委任統治下に置かれることとなつた。

**ワシントン會議**　アメリカ合衆國の大統領ハーディングは、交戰各國が戰後いづれも財政難を忍んで軍備の擴張を競ふは、國民の負擔

ハーディング（一九二三歿）

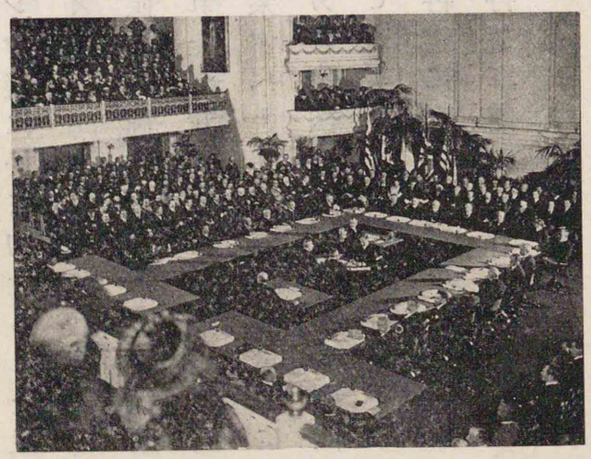
海軍軍備縮小

太平洋條約（四國條約）

極東條約（九國條約）

不戰條約（一九二八、八月）

を苛重ならしめるものとして、日本・イギリス・フランス・イタリヤの四國に諸り、軍備制限會議をワシントンに開いた。この會議に於て、日本・イギリス・アメリカ合衆國・フランス・イタリヤの五國は共に海軍の縮小を謀り、主として主力艦と航空母艦との制限を約し、これと同時に、四國條約（日本・イギリス・アメリカ合衆國・フランス）を結び、太平洋の平和を確保して日英同盟の廢棄を誓ひ、更に九國條約（日本・イギリス・アメリカ合衆國・フランス・イタリヤ・ベルギー・オランダ・ポルトガル・支那）によつて支那の主權及び領土を尊重すべきことを約し、且つ日本は膠州灣を、イギリスは威海衛を、フランスは廣州灣を支那に還付すべきことが聲明された。



ワシントン會議

**不戰條約とロカルノ條約**　次いで同國の大統領クーリッヂの首唱

クーリッヂ（一九三三歿）

ロンドン海軍條約（一九三〇、四月）

ロンドン會議（一九三五―一九三六）

ワシントン條約廢棄通告（一九三四、十二月）

ヴェルサイユ條約破棄通告（一九三五）

により、日本・イギリス・アメリカ合衆國・フランス・イタリヤの五國を始め、列國の代表者はパリーに會し、不戰條約を締結して、戰爭に訴へることなく、平和手段によつて國際紛議を解決すべきことを約し、その後、更に日本・イギリス・アメリカ合衆國・フランス・イタリヤはロンドンに海軍軍備縮小會議を開き、ワシントン會議に於て約せられた主力艦の代艦建造休止の延長と共に、日本・イギリス・アメリカ合衆國の補助艦の比率を協定した。この條約は期限を五箇年としたので、滿期に近づいて、更にロンドンに會議が開かれたが、我が國が比率の不公平なるに反對して、ワシントン條約を廢棄すべきことを關係諸國に通告するに至つたので、イギリス・アメリカ合衆國・フランスの三國間に於て新協定が成立した。この時に當つて、ドイツは突然軍備の平等を主張し、再軍備を宣言して、陸・海・空軍の再建に着手した。かくて軍備縮小の實現は愈〻困難となり、列國は今や再び軍備の大擴張を行つて、國際不安の情勢に處することとなつた。



ファッショ運動起る（一九二二）

トルコ共和國成る（一九二三）

## 第三章　世界の現狀

國際聯盟によつて世界の恒久平和を維持せんとした希望は、その後國際關係の變化によつて、大戰前の列國角逐の情勢となり、聯盟も權威を失ひ、列國は競つて軍備を充實し、互に國民的勢力の發展に努めるに至つた。

### 列國の現勢

イタリヤは大戰後社會主義が上下を風靡し、國狀頗る不安であつたが、ムソリーニ（Mussolini）が國家主義のファシスト（Fascist）黨を率ゐて內閣を組織して以來、社會主義者を一掃し、國勢は隆々として興つた。最近にはエチオピヤを征服してイギリスに對抗し、ドイツと親善の關係を結んで、我が國と共に三國の防共協定を締約するに至つた。

ムソリーニ

トルコは大戰後帝政を廢して共和國となり、ケマル・パシャが大統領

に擧げられて、大に國勢の回復に努め、よく外國の侮りを阻止した。

ドイツは戰敗國として列國の重壓に苦しめられたが、國民はよく不撓不屈の精神を以てその難局を打開せんとし、ヒトラーがナチス黨を率ゐて內閣を組織してより、既に回復に向ひつゝあつた國力は著しく進展し、ヴェルサイユ條約を破棄して再軍備を實行し、又、イタリヤと提携して防共政策を採り、再びヨーロッパの一强國たる勢を示してゐる。

ヒトラー

ヒトラーの政權掌握（一九三三）

ロシヤはレーニン・トロツキーが實權を握つて、共產主義によつて財產の私有を許さなかつたが、國家の收入が大に減少したので、或程度の私有を認める新經濟政策を實行し、又、元のロシヤ帝國領であつた大小諸邦を聯合してソヴィエト社會主義共和國聯邦（Union of Soviet Socialist Republics）を組織するに至つて、漸く內政も整ひ、產業も振ひ、レーニンが死し、トロツキーが放



逐された後は、スターリン（Stalin）が政治の實權を握つて、着々と國力の振興を圖つてゐる。

イギリスに於ては、アイルランドは自由國となり、エジプトは獨立王國となり、印度は自治運動を起し、海外自治領は殆ど獨立國の觀を呈するに至り、廣大な海外領土の統治は從前の如く容易でなく、又、內政に於ては、先の保守・自由兩黨の外に勞働黨が勢を得て、その首領マクドナルド（Macdonald）は勞働黨內閣を組織するに至つたが、その後この難局に對處するために、擧國一致の下に各黨の聯合內閣が成立して、保守黨の領袖ボールドウィン（Baldwin）・チェンバーレン（Chamberlain）が相次いで首相となり、專ら國力の充實を圖ると共に、軍備擴張計畫の完成を急いで、その勢威を保持せんことに努めてゐる。

スターリン

マクドナルド（一九三七歿）

フランスは常にドイツの復興を畏れてその抑制に努めたが、ドイツが再軍備を宣言するや、大に不安を感じ、ロシヤと相互條約を締結

して、自ら備へると共に、イギリスと親善の關係を結び、その協力によつて國威を損せざらんことに專念してゐる。

アメリカ合衆國は大戰の中頃まで中立を守つて、莫大な通商上の巨利を收め、大に軍備を擴張して威力を世界に示したのみならず、特にヨーロッパ諸國が大戰後の復興を一にその援助に仰がねばならぬ勢となつたために、自ら世界の政治・外交・經濟の中心となり、隱然世界の大勢を左右するに至つた。

イスパニヤ共和政府成る（一九三一）

イスパニヤに於ては、大戰後國王が放逐され、共和政府が成立し、反政府黨に大彈壓を加へてゐたが、最近フランコ Franco 將軍は兵を擧げてこれに反抗し、ロシヤ・イギリス・フランスが政府軍を援けるのに對して、ドイツ・イタリヤは反政府軍に援助を與へ、今やフランコ將軍の勢力は全國の大半を占領するに至つた。かくて大勢は同將軍の勝利に歸したので、ドイツ・イタリヤ及び我が國は相次いでその政府を承認することとなつた。

# 第四章　西洋史より見たる我が國の使命と國民の覺悟

我等は五千年前の遠き昔に遡り、西洋文化の淵源を尋ねて、その發展の跡を學び、顧みて我が國體の如何に尊嚴無比なるかを知つた。

西洋文化の由來

**西洋文化の大觀**　今その西洋文化の由來を大觀するに、西洋文化はエジプト・メソポタミヤより起り、ギリシヤにその基礎を固め、ローマに至つて世界的發展をなし、ローマの衰亡後ゲルマニヤ民族の手に移つて、更に國家的發達を遂げた。その間にキリスト教が起り、久しく異教徒の迫害を蒙つたが、遂にローマの國教となつてより、西洋に於ける精神文化の中樞となり、キリスト教と西洋文化とは密接不離の關係をなすに至つた。もと西洋文化は概してギリシヤの箇人主義に立脚するもので、キリスト教の博愛主義によつてよくその中庸を保つたとはいへ、漸次世運の進歩するに伴つて、民主主義・社會主義の

思想の發達するに至つたことは、自然の趨勢といふべく、東洋の家族主義を根柢とする思想の發達とは、大にその趣を異にするものである。たゞその物質的文明の發展が、世界文化に貢献した功績は實に偉大であつた。

我が國の使命

**我が國の使命と國民の覺悟**　我が國は肇國以來未だ曾て一度も異民族の侵略を蒙らず、皇室を中心として家族的國家を經營し、巧に外國文化を採り入れて國本を培つて來た。明治維新以來の我が國の躍進は西洋文化に負ふ所が固より大であるが、國初以來鍛煉された國民精神はよく今日の隆運を來し、世界の列强に伍して國際的地位を向上するに至つた。我が國の使命は實にこの國民精神を發揚し、東西文化を融合して新文化を創造するに努め、正義に立脚し、共存共榮を目標として、廣く世界に向つて光輝ある我が皇道を具現することに精進するにある。今や列國は互に國勢の伸張を圖り、軍備を擴張してその權益の擁護に努めると共に、ひたすら世界の進運に遲れざらんことを競ひ、國際關係は日に複雜多端となりつゝある。我が國民たるもの、深く思を國家の將來に致し、內は建國の大精神に則り、國體の精華を發揮して國運の隆昌を圖り、外は列國と親善を厚うして恒久平和の確立に努め、大に世界文化の發達と人類福祉の增進とに貢献せねばならぬ。

國民の覺悟

新修外國史綱　終

| | | |
|---|---|---|
| 前二七二 | 羅馬、伊太利半島を統一す | |
| 前二六九 | 阿育王摩揭陀國王となる | |
| 前二六四 | ポエニ戰役起る（—前一四六） | |
| 前二五六 | 周亡ぶ | |
| 前二一一 | 秦、支那を統一す | |
| 前二〇六 | 秦亡ぶ | |
| 前二〇二 | 漢の高祖支那を統一す | |

# 上古史年表

| 日本 | 支那 | 世紀 | 西紀 | 年代 | 外國事蹟 | 日本事蹟 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 神代 | | | 前三〇〇〇 | | 支那・印度・メソポタミヤ及び埃及に文化興る | |
| 皇紀一 前六六〇 | 周 前一一二〇 | 前六世紀 | 前一一二〇 | | 周興る ◎箕子古朝鮮の王となる | |
| | | | 前七五三 | | 羅馬の建國（西、四七六亡ぶ 東、一四五三亡ぶ） | |
| | | | 前七二二 | | アッシリヤ隆盛時代（——前七〇五） | |
| | 春秋 前七〇〇 | | 前六六〇 | | | |
| | | | 前六一二 | | アッシリヤ亡ぶ | |
| | | | 前五五七 | | 釋迦生る（—前四七七歿）（生歿諸說あり） | |
| | | | 前五五二 | | 孔子生る（—前四七九歿） | |
| | | | 前五五〇 | | 波斯の建國（—前三三〇、亡ぶ） | |
| | | | 前四九二 | | 波斯戰役起る（—前四四九） | |
| | | | 前四七七 | | デルス同盟成る | |
| | | | 前四七〇 | | ソクラテス生る（—前三九九歿） | |
| | | | 前四四四 | | ペリクレス時代（—前四二九） | |
| | | | 前四三一 | | ペロポネスス戰役起る（—前四〇四） | |
| | | | 前三三四 | | アレクサンドル大王波斯に遠征す | |
| | | | 前三一一 | | チャンドラ・グプタ摩揭陀國王となる | |
| | | | 前二七二 | | 羅馬、伊太利半島を統一す | |
| | | 前四世紀 | 前二六九 | | 阿育王摩揭陀國王となる | |
| | 戰國 前四〇三 | | 前二六四 | | ポエニ戰役起る（—前一四六） | |
| | | 前三世紀 | 前二五六 | | 周亡ぶ | |
| | 秦 前二二一 | | 前二二一 | | 秦、支那を統一す | |
| | | | 前二〇六 | | 秦亡ぶ | |
| | 前 前二〇二 | | 前二〇二 | | 漢の高祖支那を統一す | |
| | | | 前一九四 | | 衞滿、古朝鮮を簒ふ | |
| | | 前二世紀 | 前一四六 | | カルタゴ・マケドニヤ及び希臘、羅馬に滅さる | |
| | | | 前一〇八 | | 古朝鮮、漢に滅さる | |
| | | | 前九七 | | | |
| | | | 前六〇 | | 羅馬の第一三頭政治 | 崇神天皇卽位 |

# 上古史年表

| 日本 | 支那 | 世紀 | 西紀 | 年代 | 事蹟 外國 | 事蹟 日本 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 神代 | | | 前三〇〇〇 | | 支那・印度・メソポタミヤ及び埃及に文化興る | |
| 皇紀一 前六六〇 | 周 前一一二〇 | 前六世紀 | 前一一二〇 | | 周興る ◎箕子古朝鮮の王となる | |
| | | | 前七五三 | | 羅馬の建國（西、前七六六亡ぶ）（東、一四五三亡ぶ） | |
| | 春秋 前七〇〇 | | 前七二二 | | アッシリヤ隆盛時代（——前七〇五） | |
| | | | 前六六〇 | | | 神武天皇卽位 |
| | | | 前六一二 | | アッシリヤ亡ぶ | |
| | | | 前五五七 | | 釋迦生る（—前四七七歿）（生歿諸說あり） | |
| | | | 前五五二 | | 孔子生る（—前四七九歿） | |
| | | | 前五五〇 | | 波斯の建國（—前三三〇、亡ぶ） | |
| | | | 前四九二 | | 波斯戰役起る（—前四四九） | |
| | | | 前四七七 | | デルス同盟成る | |
| | | 前五世紀 | 前四七〇 | | ソクラテス生る（—前三九九歿） | |
| | | | 前四四四 | | ペリクレス時代（—前四二九） | |
| | | | 前四三一 | | ペロポネスス戰役起る（—前四〇四） | |
| | | | 前三三四 | | アレクサンドル大王波斯に遠征す | |
| | | 前四〇三 戰國 | 前三二一 | | チャンドラ・グプタ摩揭陀國王となる | |
| | | | 前二七二 | | 羅馬、伊太利半島を統一す | |
| | | | 前二六九 | | 阿育王摩揭陀國王となる | |
| | | | 前二六四 | | ポエニ戰役起る（—前一四六） | |
| | | 前三世紀 | 前二五六 | | 周亡ぶ | |
| | | | 前二二一 | | 秦、支那を統一す | |
| | 秦 前二二一 | | 前二〇六 | | 秦亡ぶ | |
| | | | 前二〇二 | | 漢の高祖支那を統一す | |
| | 前 前二〇二 | | 前一九四 | | 衞滿、古朝鮮を簒ふ | |
| | | 前二世紀 | 前一四六 | | カルタゴ・マケドニヤ及び希臘、羅馬に滅さる | |
| | | | 前一〇八 | | 古朝鮮、漢に滅さる | |
| | | | 前九七 | | | |
| | 漢 | 前一世紀 | 前六〇 | | 羅馬の第一三頭政治 | |
| | | | 前五七 | | 新羅の建國 | |
| | | | 前四四 | | ケーザル暗殺せらる | |
| | | | 前四三 | | 羅馬の第二三頭政治 | |
| | | | 前三七 | | 高勾麗の建國 | |
| | | | 前二七 | | 羅馬の帝政始る | |
| | | | 前一八 | | 百濟の建國 | |
| | | | 前四 | | イエス・キリスト生る（後三〇歿）（歿年諸說あり） | |
| | | | 後八 | | 王莽、漢を簒ふ | |
| | 後新 八 | | 二五 | | 漢の再興（後漢） | |
| | 後 二五 | 後一世紀 | 四〇 | | 大月氏のカニシカ王卽位す | |
| | | | 六七 | | 佛敎始めて支那に傳來す | 崇神天皇卽位 |
| | | | 八二 | | | |
| | 漢 | 二世紀 | 一一〇 | | | |
| | | | 一一六 | | 羅馬の版圖最大となる | |
| | | | 一六六 | | 羅馬帝アントニヌスの使節漢に至る | 景行天皇の熊襲親征 |
| | | | 二〇〇 | | | 日本武尊の東征 |
| | 三國 二二〇 | 三世紀 | 二二〇 | | 後漢亡ぶ | |
| | | | 二二六 | | ササン朝の波斯起る | |
| | | | 二八〇 | | 晉、支那を統一す | |
| | 西晉 二八〇 | | 二九二 | | 羅馬帝國の四分治 | |
| | | | 三一六 | | 西晉亡ぶ | |
| | | 四世紀 | 三一七 | | 晉の再興（東晉） | |
| | 東晉 三一七 | | 三二三 | | コンスタンチヌス大帝羅馬を統一す | 神功皇后の三韓親征 |
| | | | 三三〇 | | コンスタンチノープルの奠都 | |

# 中古史年表

| 年代 | 日本 | 支那 | 世紀 | 西紀 | 外國 | 日本 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 事蹟 | | | | | | |
| | 皇紀一三六八 | 東晉 | 四世紀 | 三七五 | ゲルマニヤ民族の大遷徙始る | |
| | | | | 三九五 | 羅馬帝國東西に分る | |
| | | 南北朝 四三九 | 五世紀 | 四三九 | 支那の南北朝分立 | |
| | | | | 四五一 | シャロンの戰 | |
| | | | | 四七六 | 西羅馬帝國亡ぶ | |
| | | | | 四八六 | フランク王國の創建 | |
| | | | 六世紀 | 五五二 | | |
| | | | | 五七一 | マホメット生る(—六三二歿) | |
| | | 隋 五八九 | | 五八九 | 隋、支那を統一す | |
| | | | | 六〇七 | | |
| | 奈良時代 皇紀一四一 | 唐 六一八 | 七世紀 | 六一八 | 隋亡び唐興る | |
| | | | | 六三〇 | | 佛教傳來 |
| | | | | 六三二 | マホメット歿す(—五七一生) | |
| | | | | 六四一 | サラセン、波斯を滅す | 小野妹子隋に使す |
| | | | | 六四五 | | 遣唐使の始 |
| | 平安 七八一 | | | 七三二 | ツールの戰 | |
| | | | | 七五六 | サラセン、東西に分裂す | 大化の改新 |
| | | | 八世紀 | 七九四 | | |
| | | | | 八〇〇 | | 平安奠都 |
| | | | | 八四三 | チャールス、西羅馬皇帝となる | |
| | | | | 八六二 | ヴェルダン條約 | |
| | | | 九世紀 | 八七〇 | ルーリック、露西亞の基を開く | |
| | | | | 八九四 | メルゼン條約 | |
| | | 九〇七 五代 | | 九〇七 | 唐亡ぶ | |
| | | | | 九一六 | 契丹(遼)興る | |
| | | | 十世紀 | 九六〇 | 宋(北宋)興る | 遣唐使の停止 |

| 日本 | | 中國 | 世紀 | 西暦 | 事項 | 日本事項 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 皇紀一三六八 | | 隋 五八九―六一八 | 七世紀 | 五八九 | 隋、支那を統一す | |
| | | | | 六〇七 | 隋亡び唐興る | 小野妹子隋に使す |
| | | | | 六一八 | | 遣唐使の始 |
| | | | | 六三〇 | マホメット歿す(―五七一生) | |
| | | | | 六三二 | サラセン、波斯を滅す | |
| | | | | 六四一 | | 大化の改新 |
| | | | | 六四五 | | |
| | | | | 七三二 | ツールの戰 | |
| 奈良時代 皇紀一四一―七八一 | | | | 七五六 | サラセン、東西に分裂す | |
| | | | | 七九四 | | 平安奠都 |
| | | | 八世紀 | 八〇〇 | チャールス、西羅馬皇帝となる | |
| | | | | 八四三 | ヴェルダン條約 | |
| | | | 九世紀 | 八六二 | ルーリック、露西亞の基を開く | |
| | | | | 八七〇 | メルゼン條約 | |
| | | | | 八九四 | | |
| | | | | 九〇七 | 唐亡ぶ | 遣唐使の停止 |
| | | 五代 九〇七―九六〇 | | 九一六 | 契丹(遼)興る | |
| | | | | 九六〇 | 宋(北宋)興る | |
| | | | 十世紀 | 九六二 | オットー一世、神聖羅馬皇帝となる | |
| | | | | 一〇六六 | ノルマンの英蘭征服 | |
| | | | | 一〇九六 | 第一回十字軍起る | |
| | | | | 一〇九九 | イエルサレム王國の建設 | |
| | | | | 一一五 | 金興る | |
| | | | | 一一二五 | 金・宋連合して遼(契丹)を滅す | |
| | | | | 一一二七 | 宋(北宋)亡び、南宋興る | |
| | | | | 一一八七 | イエルサレム王國亡ぶ | |
| 皇紀一八四五―一一八五 | | | | 一一九二 | | 源頼朝幕府を開く |
| | | | | 一二〇六 | 蒙古の鐵木眞、成吉思汗と稱す | |
| | | | | 一二一五 | 英蘭の大憲章發布 | |
| | | | | 一二二三 | 蒙古、金を滅す | |
| | | | | 一二四一 | ワールスタットの戰 | |
| | | | | 一二五四 | 獨逸の大空位時代(―一二七三) | |
| | | | | 一二五八 | 東サラセンの滅亡 | |
| | | | | 一二六〇 | 元の世祖卽位す | |
| | | | | 一二六五 | 英蘭の議會(下院)創設 | |
| | | | | 一二七〇 | 第七回(最終)十字軍起る | |
| | | | | 一二七一 | マルコ・ポーロの東洋漫遊(―一二九五) | |
| | | | | 一二七九 | 南宋亡ぶ | |
| | 南宋 一一二七―一一八七 | | | 一二八一 | | 弘安の役 |
| | | | | 一二八八 | オスマン、土耳其帝國の基を開く | |
| | | | | 一三〇二 | 佛蘭西の國會創設 | |
| | | | | 一三〇九 | アヴィニョンの法皇廳(―一三七六) | |
| | | | | 一三三九 | 百年戰役起る(―一四五三) | |
| | | | | 一三五六 | 獨逸の黃金勅書發布 | |
| | | | | 一三六八 | 明興り元亡ぶ | |
| | | | | 一三六九 | チムール、中亞を平定す | |
| | | | | 一三九二 | 高麗亡び朝鮮興る | |
| | | | | 一四〇一 | | 足利義滿始めて明に通ず |
| | | | | 一四〇二 | アンゴラの戰 ◎明の成祖卽位す | |
| | | | | 一四二九 | ジャンヌ・ダルク、オルレヤンの圍を解く | |
| | | | | 一四五三 | 東羅馬帝國の滅亡 ◎百戰役終る | |
| | | | | 一四五五 | 薔薇戰役起る(―一四八五) | |
| | | | | 一四六七 | | 應仁の亂起る |
| | | | | 一四七九 | 西班牙王國成る | |
| | | | | 一四八六 | ヂヤズ、喜望峰を發見す | |
| | | | | 一四九二 | コロンブスの亞米利加發見 | |
| | | | | 一四九八 | ヴァスコ・ダ・ガマ印度航路を開く | |
| | | | | 一五〇〇 | カブラル、ブラジルを發見す | |
| 皇紀一九九三 | | 元 一二七八―一三六八 | | | | |
| 建武中興及び吉野時代 皇紀二〇五一―一三九二 | | 明 一三六八― | | | | |

# 近古史年表

| 年代 | 日本 | 支那 | 世紀 | 西紀 | 外國 | 事蹟 | 日本 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 室町時代 | | 明 | 十六世紀 | 一五一七 | ルーテル、宗教改革を唱ふ | | |
| | | | | 一五一九 | マジェラン、世界周航を始む(一五二二) | | |
| | | | | 一五二一 | 西班牙、メキシコを征服す | | |
| | | | | 一五二六 | バーベル、ムガール帝國を建つ(一八五七) | | |
| | | | | 一五三三 | 西班牙、ペルーを征服す | | |
| | | | | 一五四〇 | 耶蘇會の創立 | | |
| | | | | 一五五五 | アウグスブルグの宗教和議 | | |
| | | | | 一五五七 | 葡萄牙人澳門を租借す | | |
| | | | | 一五七二 | セント・バーソロミューの虐殺 | | |
| | | | | 一五七三 | | | |
| | | | | 一五八一 | 和蘭、獨立を宣言す | | |
| | | | | 一五八二 | | | |
| | | | | 一五八八 | 無敵艦隊大敗す | | |
| | | | | 一五九二 | | | |
| | | | | 一五九八 | ナント勅令の發布 | | |
| | | | | 一六〇〇 | 英國東印度會社の創立 | | |
| | | | | 一六〇二 | 和蘭東印度會社の創立 | | |
| | | | | 一六〇三 | | | |
| | | | | 一六一五 | | | |
| | | | | 一六一八 | 三十年戰役起る(一六四八) | | |
| | | | | 一六二四 | リシュリュー佛蘭西の宰相となる | | |
| | | | | 一六三二 | リュツェンの戰 | | |
| | | | | 一六三七 | | | |
| | | | | 一六三九 | 清、朝鮮を降す | | |
| | | | | 一六四三 | | | |
| | | | | 一六四四 | ルイ十四世卽位す(一七一五) | | |
| | | | | 一六四八 | 明亡ぶ | | |
| | | | | 一六四九 | ウェストファリヤ條約(三十年戰役終る) | | |
| 皇紀二三三 一五七三 織田豐臣時代 | | | | | 英王チャールス一世の死刑 ○英蘭共和政となる(一 | | |
| 皇紀二六三 一六〇三 江戸時代 | | 一六四四 | | | | | |

| | |
|---|---|
| 足利氏滅ぶ | |
| 本能寺の變 | |
| 秀吉朝鮮を伐つ | |
| 關ヶ原の戰 | |
| 家康江戸に幕府を開く | |
| 豐臣氏滅ぶ | |
| 鎖國となる | |

# 近古史年表

| 年代 | | | | 日本支那世紀 | 西紀 | 外國事蹟 | 日本 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 室町時代 | 皇紀二三三 | | | 十六世紀 | 一五一七 | ルーテル、宗教改革を唱ふ | |
| | | | | | 一五一九 | マジェラン、世界周航を始む(一五二二) | |
| | | | | | 一五二一 | 西班牙、メキシコを征服す | |
| | | | | | 一五二六 | バーベル、ムガール帝國を建つ(一八五七) | |
| | | | | | 一五三三 | 西班牙、ペルーを征服す | |
| | | | | | 一五四〇 | 耶蘇會の創立 | |
| | | | | | 一五五五 | アウグスブルグの宗教和議 | |
| | | | | | 一五五七 | 葡萄牙人澳門を租借す | |
| | | | | | 一五七二 | セント・バーソロミューの虐殺 | |
| | | | | | 一五七三 | 和蘭、獨立を宣言す | |
| 織田豐臣時代 | 一五七三 | | | | 一五八一 | | |
| | | | | | 一五八二 | 無敵艦隊大敗す | |
| | | | | | 一五八八 | | 足利氏滅ぶ |
| | | | | | 一五九二 | ナント勅令の發布 | |
| | | | | | 一五九八 | | 本能寺の變 |
| | | | | | 一六〇〇 | 英國東印度會社の創立 | |
| | | | | | 一六〇二 | 和蘭東印度會社の創立 | 秀吉朝鮮を伐つ |
| | | | | | 一六〇三 | | 關ヶ原の戰 |
| | | | | | 一六一五 | | 家康江戸に幕府を開く |
| | | | | | 一六一八 | 三十年戰役起る(一六四八) | 豐臣氏滅ぶ |
| | | | | | 一六二四 | リシュリュー佛蘭西の宰相となる | |
| | | | | | 一六三二 | リュツェンの戰 | |
| | | | | | 一六三七 | 清、朝鮮を降す | |
| | | | | | 一六三九 | | 鎖國となる |
| | | | | | 一六四三 | ルイ十四世卽位す(一七一五) | |
| | | | | | 一六四四 | 明亡ぶ | |
| | | | | | 一六四八 | ウェストファリヤ條約(三十年戰役終る) | |
| | | | | | 一六四九 | 英王チャールス一世の死刑 ◎英蘭共和政となる(一六六〇) | |
| 江戸時代 | | 明 | 一六四四 | 十七世紀 | 一六六二 | 清の聖祖卽位す(一七二二) | |
| | | | | | 一六八二 | ペートル大帝卽位す(一七二五) | |
| | | | | | 一六八八 | 英蘭の名譽革命 | |
| | | | | | 一六八九 | ネルチンスク條約 | |
| | | | | | 一七〇〇 | 北方戰役起る(一七二一) | |
| | | | | | 一七〇一 | 西班牙繼承戰役起る(一七一四) | 赤穗義士の復讐 |
| | | | | | 一七〇三 | | |
| | | | | | 一七〇七 | 大ブリテン王國の成立 | |
| | | | | | 一七一三 | ユトレヒト條約 | |
| | | | | | 一七一四 | ラスタット條約 | |
| | | | | | 一七二一 | ニスタット條約 | |
| | | | | 十八世紀 | 一七四〇 | フレデリック大王卽位す(一七八六) ◎墺太利繼承戰役起る(一七四八) | |
| | | | | | 一七五六 | 七年戰役起る(一七六三) | |
| | | | | | 一七五七 | ブラッシーの戰 | |
| | | | | | 一七七二 | 波蘭の分割始る(一七九五) | |
| | | | | | 一七七五 | 亞米利加合衆國獨立戰役起る(一七八三) | |
| | | | | | 一七七六 | 亞米利加合衆國の獨立宣言 | |
| | | | | | 一七八七 | | 松平定信老中となる |

# 近世史年表

| 日本 | 支那 | 世紀 | 西紀 | 年代事蹟 外國 | 年代事蹟 日本 |
|---|---|---|---|---|---|
| 皇紀二五二八 江戸時代 | | | 一七八九 | 佛蘭西大革命起る | |
| | | | 一七九三 | ルイ十六世死刑 ◎恐嚇政治始る(—一七九四) | |
| | | | 一七九五 | 波蘭の第三回分割(波蘭の滅亡) | |
| | | | 一八〇四 | ナポレオン皇帝となる | |
| | | | 一八〇五 | トラファルガルの海戰 ◎アウステルリッツの戰 | |
| | | | 一八〇六 | 神聖羅馬帝國の滅亡 ◎大陸封鎖令の發布 | |
| | | | 一八〇七 | フルトン汽船を發明す | |
| | | | 一八一二 | ナポレオンの露西亞征伐 | |
| | | | 一八一三 | ライプチヒの戰 | |
| | | | 一八一四 | ウィーン會議(—一八一五) ◎スチヴンソン汽車を發明す | |
| | | | 一八一五 | ワーテルローの戰 ◎神聖同盟の成立 | |
| | | | 一八二三 | モンロー主義の宣言 | |
| | | | 一八二九 | 希臘の獨立 | |
| | | | 一八三〇 | 七月革命起る ◎白耳義の獨立 | |
| | | | 一八三九 | 阿片戰役起る(—一八四二) | |
| | | | 一八四八 | 二月革命起る | |
| | | | 一八五〇 | 長髮賊の亂起る(—一八六四) | |
| | | | 一八五二 | ナポレオン三世卽位す(—一八七〇) | |
| | | | 一八五三 | | ペルリ浦賀に來る |
| | | | 一八五四 | クリミヤ戰役起る(—一八五六) | 我が國の開國 |
| | | | 一八五七 | ムガール帝國亡ぶ | |
| | | | 一八六一 | 伊太利王國の建設 ◎合衆國の南北戰役起る(—一八六五) | |
| | | | 一八六四 | 長髮賊の亂平ぐ ◎赤十字社起る | |
| | | | 一八六六 | 普墺戰役 | |
| | | | 一八六八 | | 王政復古 |

| 代 | 清 | 世紀 | | |
|---|---|---|---|---|
| 皇紀二五二八 一八六八 明治時代 | | | 一八五三 | クリミヤ戰役起る（—一八五六） |
| | | | 一八五四 | ムガール帝國亡ぶ |
| | | | 一八五七 | 伊太利王國の建設 ◎合衆國の南北戰役起る（—一八六五） |
| | | | 一八六一 | 長髮賊の亂平ぐ ◎赤十字社起る |
| | | | 一八六四 | 普墺戰役 |
| | | | 一八六六 | |
| | | | 一八六八 | スエズ運河完成す |
| | | | 一八六九 | 普佛戰役起る（—一八七一） |
| | | | 一八七〇 | 獨逸・伊太利の統一完成 |
| | | | 一八七一 | 露土戰役起る（—一八七八） |
| | | | 一八七七 | ベルリン會議 |
| | | | 一八七八 | 三國同盟成る |
| | | | 一八八三 | ウィリヤム二世即位す（—一九一八） |
| | | | 一八八八 | |
| | | | 一八八九 | |
| | | | 一八九〇 | |
| | | | 一八九一 | 露佛同盟成る |
| | | | 一八九四 | ニコラス二世即位す（—一九一七） |
| | | | 一八九八 | 獨・露・英の三國、清國の港灣を租借す ◎米國、ハワイ・フィリッピンを併合す |
| | | | 一八九九 | 南阿戰役起る（—一九〇二） 佛蘭西の廣州灣租借 ◎義和團の亂起る |
| | | | 一九〇二 | 南阿戰役終る |
| | | | 一九〇四 | 英佛協商成る |
| | | | 一九〇五 | ポーツマス條約 |
| | | | 一九〇七 | 英露協商成る |
| 皇紀二五七二 大正時代 | 中華民國 | 二十世紀 | 一九一一 | 伊土戰役起る（—一九一二） ◎支那に革命戰起る |
| | | | 一九一二 | 第一バルカン戰役起る ◎清亡ぶ |
| | | | 一九一三 | 第二バルカン戰役起る ◎中華民國成立す |
| | | | 一九一四 | 世界大戰役起る |
| | | | 一九一七 | 露西亞、共和政となる ◎ソヴィエト政府成る |
| | | | 一九一八 | 世界大戰役の休戰 ◎獨逸、共和政となる |
| | | | 一九一九 | ヴェルサイユ條約（世界大戰役の終總） |
| | | | 一九二〇 | アンゴラ政府の樹立 |
| | | | 一九二一 | ワシントン會議（—一九二二） |
| | | | 一九二二 | 埃及獨立王國となる ◎伊太利のムソリーニ內閣 |
| | | | 一九二三 | 土耳古共和國となる ◎佛白兩國兵のルール地方占領 |
| 皇紀二五八六 昭和 | | | 一九二四 | 伊太利のフィウメ併合 ◎英國の勞働黨內閣成る |
| | | | 一九二五 | 孫文死す ◎佛白兩國兵のルール撤退 |
| | | | 一九二六 | 獨逸の國際聯盟加入 |
| | | | 一九二八 | 不戰條約 |
| | | | 一九三〇 | ロンドン海軍條約 |
| | | | 一九三一 | 西班牙共和國となる ◎滿洲事變起る |
| | | | 一九三二 | 上海事變起る ◎滿洲國の建設 |
| | | | 一九三三 | 獨逸のヒトラー內閣成る |
| | | | 一九三四 | 露國の國際聯盟加入 ◎滿洲國の帝政樹立 |
| | | | 一九三五 | 獨逸の再軍備宣言 ◎獨逸の國際聯盟脫退 |
| | | | 一九三六 | 伊太利のエチオピヤ征服併合 ◎西班牙のフランコ將軍擧兵 |
| | | | 一九三七 | 支那事變起る ◎日獨伊防共協定 ◎伊太利の國際聯盟脫退通告 |

| | |
|---|---|
| 一八五三 | 清國の開國 |
| 一八六一 | 王政復古 |
| 一八六六 | 西南の役 |
| 一八六八 | 憲法發布 議會の開會 |
| 一八九四 | 日清戰役起る（—一八九五） |
| 一八九八 | |
| 一九〇二 | 日英同盟成る |
| 一九〇四 | 日露戰役起る（—一九〇五） |
| 一九一一 | 明治天皇崩御 |
| 一九一二 | 日獨開戰 |
| 一九二一 | 日英同盟廢棄 |
| 一九二六 | 大正天皇崩御 |
| 一九三三 | 我が國の國際聯盟脫退 |
| 一九三七 | 日獨防共協定 |

# 近世史年表

| 年代 | 日本 | 支那 | 世紀 | 西暦 | 外国事蹟 | 日本事蹟 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 江戸・十時 | | | 十八世紀 | 一七八九 | 仏国民大革命起る | |
| | | | | 一七九三 | ルイ十六世死刑 ◎恐怖政治始る（一七九四） | |
| | | | | 一七九五 | 波蘭の第三回分割（露墺と共に） | |
| | | | | 一八〇四 | ナポレオン皇帝となる | |
| | | | | 一八〇五 | トラファルガル海戦 ◎アウステルリッツの戦 | |
| | | | | 一八〇六 | 独逸帝国の滅亡 ◎ナポレオン大陸封鎖令の発布 | |
| | | | | 一八〇七 | ティルジットの和約 | |
| | | | | 一八一二 | ナポレオンの露西亞遠征 | |
| | | | | 一八一三 | ライプチヒの戦 | |
| | | | | 一八一四 | ウィーン会議（一八一五） ◎スチヴンソン汽車を発明 | |
| | | | | 一八一五 | 同盟成 | |
| | | | | 一八一六 | ワゲルローの戦 ◎神聖同盟の成立 | |
| | | | | 一八二五 | サンクロー主義の宣言 | |
| | | | | 一八二九 | 希臘の独立 | |
| | | | | 一八三〇 | 七月革命起る ◎白耳義の独立 | |
| | | | | 一八三九 | 阿片戦争起る（一八四二） | |
| | | | | 一八四八 | 二月革命起る | |


昭和十三年一月三十日印刷
昭和十三年二月二日發行
昭和十三年三月五日訂正印刷
昭和十三年三月十日訂正發行

新修外國史綱

定價 金壹圓拾錢

編者 明治書院編輯部 代表者 三樹退三

發行者 東京市神田區錦町一丁目十六番地 株式會社 明治書院 取締役社長 三樹退三

印刷所 東京市神田區小川町一丁目十一番地 宮本印刷所 印刷者 綾部喜久二

發行所 東京市神田區錦町一丁目 振替貯金口座東京四九九一番 株式會社 明治書院 電話神田(25)代表二二四七番(3)



不許複製

川農第一學年

田嶌房芽

広島大学図書
2000074177